
花ひらけば風雨多し

天海りく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花ひらけば風雨多し

【Nコード】

N3608W

【作者名】

天海りく

【あらすじ】

容姿才能家柄、全てに恵まれながらも驕ることなく王に尽くす武官、鴻羽。 苦境に耐え這い上がってきた半陰陽の美貌の軍師、爰。 自己に自信を持てず卑屈に鴻羽を妬む王、呂淳。 心の隙間を埋めるように盤遊びに興じる鴻羽の姉、柚凜。 変革の表と裏にいた彼ら4人の歴史に刻まれることのない愛憎物語。 【誰ひとりとして幸せになれないアンハッピーエンドです。 陵辱・暴力・差別・自傷行為に関わる描写がありますので苦手な方はお気をつけください。 ヒロインが半陰陽のためBLにも見えるのでそれも苦手な方はお気

【おなじくしつを】

小さな部屋でひと組の男女が盤の上を駒を動かしていた。ふたりの年の頃は四十前後。整った面立ちは似通っている。それもそのはずでふたりは姉弟である。

「俺はもう、盤を降りてもいいでしょうか」

駒を動かす手を止め、男がぼつりと吐き出す。その顔は美しい。だが女々しさはまるでなく精悍な武人であった頃の面影は多分に残している。しかし彼の表情は疲れ切っていた。

「どうして？」

ひとつふたつしか弟と年の変わらないように見えるが実のところ六つ年上である姉のほうが不思議そうに首をかしげる。

「もう十分でしょう。後は姉上の好きなようにすればいい。俺は後悔するのに疲れました」

「……お前はわたくしを憎んでいる？」

そうして女は軽い口調で言っ て盤に目を落としたままの弟を見つめる。

「あなたを憎んで何もかも取り戻せるならそうしています。それに、責めるべきは自分です」

男が自らの將の駒を女の側の駒の前へと動かす。

「お前のそういうところが大嫌いよ」

優しくいたぶるような笑みを浮かべて女は駒を進めて將を取った。これより遡ること十二年前。元号は白峨^{はくが}。その九年の秋。

男 齋鴻羽^{さいこうう}は従弟でもあった十二代紫秦国王を弑虐し新たな王となった。

その王は宦官を寵愛し政務を投げ出すような愚王であった。

十一代の王の頃より国を支えた齋家の当主であり軍神とまでよばれた武人である彼

がその王とその宦官を討つたことを誰もが英断と讃えた。

王となつてからも勤勉に政務をこなし国を豊かにしていく彼にはいくつもの賛辞が投げかけられた。

しかしながら彼が心からそれを喜ぶことはなかった。

彼の胸の内には玉座を手に入れいたその日の冷たい秋雨がやまずに降り続いていた。

物語はこれよりさらに時をさかのぼり白蛾二年の春より始まる。

紫秦国の後宮と隣り合う禁苑の中に建つ桃花楼とうかろうは、その名にある通り桃木に囲まれた二階建ての楼閣である。王宮では主に柱や扉、調度品に使われている黒檜を贅沢に使った外壁は年月を重ねた艶やかな漆黒で花の色がよく映える。中に入れば梁や柱は同じく黒檜で壁や床は香りのほとんどない白い雪杉と何から何まで花見のために作られている。

今日は王の即位一周年を祝うために上位の官吏やその家族が招かれ咲き乱れる桃花を肴に酒を酌み交わしていた。

招かれた客の中でもごく一部の官吏と王しか立ち入れない二階の露台で鴻羽こううは花ではなく半年だけ年下の従弟である王、秦呂淳しんりょじゅんの周囲を目で追っていた。

形ばかりの護衛とはいえ花に気をとられるわけにはいかない。しかしながらあまり面白くない光景である。

王である呂淳への挨拶もそこに官吏たちが媚を売るのは鴻羽の父である丞相の溪雁けいがんばかりだ。

若干十八。いつも自信のない顔で丞相の後ろに隠れがちな呂淳に對しての不愉快な評価は何度も耳にしている。彼に敵こそはいないが味方もいない。

けれど、自分だけは違うと思っていた。誰よりも忠を尽くしていて、何よりも実の兄弟のように大切に思っていた。それを呂淳も分かっていると思っていた。

視線は自然と呂淳の左腕へ移りやがて裾に隠された手首へと向かい、胸に苦いものがこみあげてきて鴻羽は拳を握りしめた。

「なにしかめっ面してんの？」

ふと斜め下から声がかかってそちらに目を落とすと花の顔かんばんせがあった。

年の頃は自分と変わらないくらいの少女とも或いは年下の少年と

も見えるこの人物は宦官である。この場にいることが許されるほど高位ではない。

「なんでもない」

鴻羽はこの媛えんという名の宦官があまり好きではない。

相変わらず冷たいね、とぼやいて堂々と丞相を中心にした人の輪に入っていく媛のふてぶてしさはもちろんだが。

「呂淳、下のやつらにき、ワタシのことちゃんと聞いた？ なかなか通してくれなかったんだけど」

主君に対するこの口のききかたである。

自分も人目のないところでは子供のころからの気易さで声をかけるが、後宮に入ってたかだか半年、しかもこんな公の場でこの態度は主君を馬鹿にしているとしかいいようがない。

しかし呂淳は鴻羽の憤りも知らずに眉をひそめることもなくすまないと答えていた。

周囲は驚きを見せるものの、すぐに媛の容姿に見入ってしまう。

結いあげられず華奢な背から細い腰まで無造作に流れる髪は星の光がまぶされた新月の夜空かのような艶やかな漆黑。それによく映える肌は新雪のように白いが、頬はほんのりと朱色が滲んでいて健康的だ。纏う衣装は飾り気のない官服だが生来持ち合わせているものだけで媛はどんな花よりも美しくそこにある。

表情ひとつで少女にも少年にかわる不思議な印象の顔に笑みを浮かべるだけで人々の感嘆を呼ぶほどに。

その中でやはり自分と同じように媛が気に入らない溪雁が苦虫を潰した顔をして、こちらに寄ってくる。

「あれをあまり陛下に近づけるな」

出来ることならとつくにそうしている。

後宮の女たちに見向きもせずにはいた呂淳がこれほどまでに宦官を甘やかしこんな場にまで連れてくるのは外聞が悪い。

「ですが、陛下がそれを望んでいる以上は強くは言えません。父上、陛下は繊細なのです。分かっておいででしょう」

鴻羽がため息と共に答えると鼻で笑いながら繊細、と溪雁が繰り返す。

父のこういう態度も嫌いだ。

なにかと昔から伯父という立場で呂淳に厳しくあつた父だが度が過ぎるほど辛辣だ。七年前に父の妹である呂淳の母が亡くなつてからはさらにそれは酷くなり、呂淳がこうまで萎縮してしまったのは父のせいだと思つている。

しかし、最後の最後に呂淳を追い詰めたのは自分だった。

即位して二カ月。いまから八か月前。

朝議の後、卑屈になりすぎる呂淳にどうにか自信を持たせようと始めた会話だった。そのときに呂淳は言ったのだ。

お前も兄上ではなく私が死ねばよかつたと思つているのだろう、と。

叔母が亡くなる少し前に急死した呂淳の腹違いの兄である第一王子、稜明は優秀で人徳もあり後継者として期待を集めていた。だから周りにはそんなことを言う者も多くはいたが、自分はけしてそうではなかつた。

しかし呂淳がそんな輩と自分を同じように見ていたことの衝撃に否定の言葉も出せずに絶句してしまつた。

沈黙こそが肯定ととつたのか、そのまま弁解する間もなく呂淳は後宮の奥へと駆けだした。

そして自室に戻つた呂淳は自らの手首を切つた。

命に別状はなかつたが、それから彼は後宮の奥に引きこもつてしまつていた。

「鴻羽、呂淳が疲れたつてさ」

その呂淳と共に先月表に出てきたのが横柄に自分を呼ぶ湊である。鴻羽は静かに呂淳のそばにより道を開けさせる。

「……大丈夫か？」

人目につかないところまで来て鴻羽は呂淳に問いかける。

「少し人に酔つた」

あの時のことはお互い口にしない。

それでなかったことになることなどなく、言葉を選ぶのに慎重になりすぎる自分に鴻羽は苛立ちを覚える。

「だから上に人あげないほうがいいって言っただろ。あいつらは呂淳に用があるわけじゃないんだし丞相と一緒に下に置いとけばよかったんだ」

遠慮というものがまるで頭にないのだろうか。

爰の物言いに苛立ちを上乗せされながら鴻羽は呂淳の表情をうかがう。

もとよりあまり感情を見せるほうではなかったが、ことさら無表情になってしまっている気がする。

「こっちのほうがゆっくり見れるよ」

奥の部屋に先に入った爰が窓を開けると黒檜の窓枠の内いっぱい薄紅の花が敷き詰められていた。静かに花は揺れ、零れ落ちた花びらが甘い香りと共に部屋に舞いこんでくる。

部屋の入口で立ち止まった鴻羽はほらほらと手招きする爰を見ながら何度目かの疑問を持つ。

あれは本当に男なのだろうか。男というにはあまりにも花の香が似合いすぎる。ともすればそれは爰自身から放たれる香氣とすら思えるほどだ。

しかし女が男のふりをして後宮に入る意味などあるはずがない。

「鴻羽？」

いつまでも部屋に入ってこない鴻羽を呂淳が呼ぶ。

「あ、ああ、俺は部屋の外で見張りをする」

花に彩られ無邪気に笑う爰がふと誰かに似ている気がしてじっとその顔を眺めていた鴻羽はびくりと肩を跳ね上げて答える。

なぜか早鐘のように心臓は動いていた。

自分の脳裏に浮かんだおぼろげな人影は一体誰だったのか、思い出すことはできなかった。

宴から二月の後、鴻羽は呂淳の護衛の任から解かれた。代わりに命ぜられたのが禁軍の騎兵隊小隊長だった。

北の大国蒼魏そくぎの不安定な情勢から昨今その周辺の小国の動きは騒がしい。蒼魏に隣接するここ紫秦は蒼魏へ攻め入るための通り道として、そして豊かとまではいかながある程度安定した食糧を得られる恰好の土地として狙われやすい。

手薄とまではいかないが紫秦国の兵力はおぼつかない。

この頃は防戦に窮し王都まで救援を求めるところも増えてきた。それ故に国境まで出向いていかなばならない事態は増えつつあり、城を空けることは必然的に多くなる。

呂淳はやはり自分と距離を置きたいのかと半ば安堵しながら鴻羽は新たな任に就いたのだが、補佐に涇がくつついてきた。

要は涇が軍に行きたいというから呂淳は自分を護衛代わりにつけたということだった。さすがにこれには父も激怒していたが呂淳はそれを聞かなかった。

「……まったく、どこへ行っただ」

東の国境側に広がる粟畑の畦道を馬で辿りながら鴻羽はいつものまにか姿を消した涇を探していた。

道の向こうには畑を一望できる小高い場所にある村が見える。そのすぐそばまで、紫秦の東隣に位置する香陽かように攻め入られて五日。あと少しでも遅れていれば村は陥落していただろう。

「まだ残党がどこかにいるかしれないのにひとりでうるうるするな。実りを迎えた粟が泥と血にまみれ腐臭の漂う畑に涇がたたずんでいるのを見つければ、鴻羽は馬を降りる。

「本当は殺されてなくて残念なんじゃない？」

涇は国境の砦があるほうへと目を向けたまま投げやりに言葉をよこした。

人が心配してやったのにまったくもって可愛げのない奴だと思

ながらも、鴻羽はその横顔の真摯さに腕を組み問う。

「……戦は初めてか？」

湊が切れ長の黒目の大きい瞳を向けきてうなずいた。

「頭で考えた通りに人を動かすのは難しいね。敵も味方も。大まかな状況での策は書にあっても、実際にはその通りなんて絶対無理。地形なんてほんと、その場に立たないとわかんないしさ」

予想とは違う湊の返答に拍子抜けした。

十四の時小競り合い程度であったが初めて戦場に出て二晩はろくに眠れず、師に諭されてどうにか持ち直した鴻羽は湊もそうかと心配してみたが無用だったようだ。

「無茶な策だったけど、半日で勝てたんだ。上等だろう」

「でもこれってワタシの手柄にはならないよな」。約束したしなあ」
湊が不満げに唇をとがらす。

今回の鴻羽率いる右軍騎兵第一小隊の他に騎兵小隊一つと右軍歩兵小隊をふたつ統括する隊将は最初話半ばで湊の軍略を聞いていたが、敗戦の責任は湊に、勝利の功績は隊将にと提示され策に勝機を見出した途端乗ってきた。

「どうだろうな。砦を半壊させた責任をとるのが嫌で押しつけてくかもしれないぞ」

敵軍が陣を張ったのは当然砦でそこに夜に奇襲をかけた。

あまり使用されていない砦の一部はもろくなっており、そこに敵を誘導したあと瓦礫の下敷きにして、残った兵は暗闇の中右往左往するところを叩いたのだ。

そして日が昇る頃には向こうは撤退していった。

「でも、あれはどっち道だめだっただろう。ちよっとついただけあの通りなんだし。補修が間にあってなくてよかつたんだか、悪かつたんだか。どっちにしる村の人間はこれ以上荒らされなくて良かったか」

湊が見つめる先では疲れ果てた顔の村人が身内の死体を引き揚げたのち、あちらこちらに転がる敵の骸の武器や装備を引きはがして

いた。こちらに気づくと小さく頭を下げ、またすぐに金になりそうなものや使えそうなものを無心に探し出す。

収穫は半分以上終わっているとはいえ、被害はけして軽くない。

「お前の父親がごねてなかったらまだましだったかもしれないけどね。いつまでああしてるつもりなのさ」

不意に矛先を向けられ、鴻羽は渋面を作った。

連日禁軍側と丞相を筆頭とする文官ら側で兵の増強について話し合われているがまだまとまりきらない。

父は長年かけて軍を国防に必要な程度まで縮小し領土を増やすより今ある土地を豊かにすることに尽力してきた。そして武官主導から文官主導へと今日の政を導いた。

今になってまた武官らが力を増すのを嫌がり、なにかと文句をつけているらしく情けないばかりだ。

ことに呂淳が王位についてから父の横暴さは目に余る。

禁軍の二柱のうち一柱である左軍將軍と父が衝突しているのをもう一柱である右軍將軍が仲裁し軍と丞相側はどうにか割れずにいるもののこのままでは危うい。

「もう、父上も折れるだろう」

しかし、このまま乱世に入れば紫秦が生き残れないことも分からないほど父は愚かではなく、すでに自分を軍に取り入る足がかりにしようと画策しているようだ。

そもそも父と同じ道を歩むのが嫌で軍に入ったこちらには協力してやる気はないが。

「そういつてもすぐには使い物にならないだろ。今回は敵が馬鹿だからよかったけど、その馬鹿にここまで入り込まれるようじゃ駄目だな」

去年から幾度か洪水に見舞われ食糧難にあえいでいる香陽は数を揃えれば短期で圧倒できるだろうとろくな準備もせず食糧目当てで大挙してきた。そんな軍というより強盗団に近い半ば破れかぶれの集団に数は負けるとはいえここまで苦戦させられたというのはたし

かに由々しきことだ。

「当分足りない頭数は知恵をまわすしかないか……それでも来年の春までにだな」

あと半年持ちこたえれば西側から南側の国境に横たわる白線山脈が雪に覆われ多くの敵を阻んでくれるだろう。問題はそれ以降だ。このままいけばさらに乱は激しくなる。

「……来年の春、か」

ゆったりとそうつづやいた爰は何か考えをめぐらしているようだった。

鴻羽は不思議に思う。

戦のことがまるで分からず爰は軍に來たわけではない。軍略家となるために学んでいたようでもあるというのに。

「なぜ最初から軍に入らなかった」

疑問を口にする爰が少し間を開けて答える。

「いろいろとさ、面倒だから」

「なにかやましいことでもあるのか？」

爰の素性は後宮に勤める官吏の遠縁、ということになっているが生家についてまゐるできない。その官吏もなにかと評判の悪いもので、実際遠縁というのもあやしい。

「……この体じゃ入れないよ」

拗ねた子供のような言い草だったが、その言葉の意味の裏に気づいた鴻羽は悪い、と返していた。

よくある話だ。

貴族階級以外が官吏となるには宦官になるしかない。そのために自らなる者もいるが子供が貧しさから親にそうされたり人買いによるものも多い。

爰もそうして自らの意思に反して後宮にねじ込まれたのだろう。

「別に謝らなくてもいいよ。運よく最初から小隊の補佐官やらせてもらえたからもついいや。さ、帰ろうか」

踵を返して歩み寄ってく爰の表情に影はないがどこか作り物めい

て見えた。

「兵法はどこで習った？」

先に行く涓を追い馬の手綱を引き緩やかに歩みながら鴻羽は静かに問うた。

「爺様。名前は彭吾准ほういつぐん。証明するものは何もないから名乗るつもりもないから言つてないけど」

「彭軍師……？」

予想外の人物の名前に鴻羽は目を瞬かせる。

彭吾准といえば左軍將軍の師にして先々代王の頃の禁軍の要として名高い人で丞相をも務めていた傑物だ。將軍職を兼任することはなかったが筆頭軍師という特別に設けられ役職にも就いていた。先代にはあまり重用されず、むしろ厭われて筆頭軍師という役職も撤廃されたが左軍將軍をはじめとして彭軍師を師事していた彭門下生と呼ばれるものは軍内にまだ多い。そうして彭軍師の推挙で近侍として取り立てられた父は彼が王に閑職に追いやられてもなにひとつ異議を唱えずにいたことで恩知らずと軍内では蔑まれていた。

その恩知らずの息子である自分は父と同じ道を歩むのを拒んで十二の頃から軍に入ったが、やはり向けられた目は厳しかった。今はずいぶん自分に対する敵意は和らいだものの揉め事があると肩身は狭い。

たしか彭軍師は十八年前に王都から二つ隣の州にある領地にある村に居を移し、そこで盗賊に押し入れられ共に暮らしていた娘と共に殺されたときいた。娘は寡婦で子供がひとりいたが、生死は不明だったような気がする。この見目のよさならそのまま攫われ売られたとしてもおかしくはないだろう。

それにやたらと父に対しては刺々しい物言いの理由もそれで納得できる。

神妙な面持ちで涓を見下ろすと、品と華のある笑みがかえってきた。

「深くは考えなくていいよ。ワタシは軍にいらればいいだけだから」

ら

言いきる言葉に芯の通ったものを感じた。

けして不真面目なばかりではないようだし、頭も切れる。これから共に戦っていく不安があったがどうにかやっていけるかもしれないと鴻羽は思った。

後宮の最奥の部屋は扉を開いてすぐ、こぶりな円卓と二脚の椅子が見える。中央には奥との間仕切りのようになっていた背中あわせの書棚。書棚の左端と左の壁際は隙間があつて、最奥に見える分厚いガラスが嵌めこまれた窓とちょうど同じ幅だ。そこを通り進むと寝台と小物や書簡を入れる箆笥があつて他に調度品はない。そんな数少ない調度品は全て黒檀で作られているので色合いすら質素である。ここが王の私室である。

王の部屋にしては狭すぎるのは本来ここが衣装部屋であるからだ。隣の本来の王の私室は書庫にしてしまっている。

王の私室としては粗末とさえ呼べるこの部屋が呂淳にとっては最良の空間だった。

もっとも近い正妃の部屋も空き部屋のおかげで煩わしい人の声も気配も届いてこず、世界に自分ひとりきりのようで居心地がいい。

呂淳は読み終えた本をたたみ、寝台に寝転がる。

今日は後宮から出ず朝から気ままに書物を読みあさりぼんやりとしていた。そのうちに時間は無為に流れて、もうすぐ日が暮れる。夜には明日伯父に詰られることを考える。翌朝にはまたここから出るかどうかぐずぐずと悩む。

爰が来てから表に出る機会は増えたが、三月前に軍のほうに異動してからは遠征に行かれると今日のように部屋から出ないことが多くなってしまう。

身体を丸め瞳を伏せると眠気がやってきた。

夕餉まで寝ていようかとうつらうつらし始めたころ、足音が聞こえてきて目が覚めた。

「ただいま」

入室の許可も取らずに入ってきたのは爰で、身を固くしていた呂

淳はほつとしながら身体を起して寝台の上で正座する。

「早かったな」

遠征に出たのは五日前。一週間はかかると言っていたが存外早くすんだようだ。

「ああ。鴻羽がさつさと相手隊将の首取ってくれたおかげで思ったより手間がかからなかった。ほんと、馬鹿みたいに強いね」

従兄の功績に呂淳は表情を曇らせた。

戦場に鴻羽が出ればこうなることは分かっていた。三年前まで近衛ではなく騎兵隊の一員だった鴻羽の評価は戦が増えてから高くなつていつていつた。それが嫌でほとんど宮から出ることはない自分の近衛になるように命じた。だがそれからも鴻羽は鍛錬を欠かさず同輩に実力で置いておかれるどころか差を広げて強くなつていく。再三軍議で右軍の夏^か將軍が近衛にしておくのはもつたいないと進言してくるほどだ。

昔から学問も武術も秀でていて見栄えもよく、真面目で人のいい鴻羽は本人がどんなに謙虚に隅にいようと誰かが中央へ押しやる。

そして自分は端のほうへはじきだされる。

「呂淳」

窺める声に呂淳は自らの左腕を強く握りしめ爪を食いこませようとしていた右手から力を抜いた。

「別に鴻羽に張り合う必要はないんだ。あの手の単純で人のいい奴は扱いやすいから上手く使つてやればいい」

それは、対等かそれ以上のものが出来ることだ。自分のような者が利用しているなどと言つてもただ助けられているだけだと見られるだけで惨めでしかない。

不満げに口を閉じていると爰が苦笑した。ただそれだけで責め立てることもなく寝台の上にあつた本へ話題を移す。

ざらざらとしたものを胸に残しながらも、呂淳はとつとつと話しているうちに懐かくなつてきた。

母が生きていた頃はこうしてよく本を広げとりとめなく言葉を交

わした。伯父の怒声に耐える毎日の中で何よりも安らげる時間だった。

呂淳は次第に重なっていく母と媛の声にまどろんだ。

季節は、冬を目前としていた。

王宮の南東の一角にある軍舎は広い。入口には門があり、小さな都市まちのようでもある。中央に騎馬隊が悠々と動けるだけの広い演習場があり、入口から見て左右にいくつかの建物が密集していてそれぞれが回廊で結ばれている。文字通り右手側に右軍、左手側に左軍が詰めている。

鴻羽は冷たい風が容赦なくぶつかってくる右軍側の回廊から右へと曲がる。この先には隊長、その補佐官の私室がひしめく棟だ。

向かうのは媛の私室で持っていくのは香陽陥落の知らせである。一月前、ついに香陽の民は蜂起した。数年前から私腹を肥やすこととしない王や官に民は不満を募らせていた。そうして去年からの食糧難に加え半年前の無謀な進軍について立ち上がり、紫秦はその背を押した。

香陽反乱の援助を最初に提案した媛の部屋の前についた鴻羽は扉を叩く。返事はないが中から声がするのでいることはいゆるようだ。

ふと聞こえる男の声の語調が荒いことに気づいて一度目より強く叩いた。

やはり返事はなかったが、何か叩きつけられるような大きな音と陶器が割れる音が響いた。

思わず部屋に飛びこんだ鴻羽が目にしたのは茶杯の欠片が散らばる床に倒れた媛を小太りな男が蹴りつけているところだった。

「何をしている！」

怒鳴りつけると男が動きを止め鴻羽を一瞥する。

たしか媛の『遠縁』となっている男だ。

「同じ過ちは二度も許されませんよ」

低い声で諫めれば過去に宦官への暴力で問題になった男は舌打ちして涑を見下ろす。

「この淫売めが」

聞くに堪えない言葉に鴻羽は嫌悪感をあらわにして顔をしかめた。男はそんなことには気にも留めず乱暴な足取りで部屋を出て行った。「破片に気をつける」

鴻羽がそう言いながら手を差し伸べるが涑はその手を取らずに立ち上がり、椅子が倒れているのでかわりに寝台に腰かけた。

乱れた髪が背に流され露わになったその顔は酷い有様だった。

最初に目が行ったのは唇の左端下の顎あたりの赤紫色。頬や額にも破片につけられたのだろう幾筋かの緋色がある。

「来るのがはやいよ。あとちよつとで正当防衛だったのに」

涑がむくれ顔で言っただけから短刀を取り出して寝台に投げる。

「気持ちにはわからんでもないが、軍舎をあんな男の血で汚すな。元から素行の悪い男だ。訴え出れば正当に処罰される」

「そうしたら揉めた理由は言わないといけないだろ」

頭が痛い鴻羽はため息を吐きだす。

態度はふざけているが涑は軍師としても優秀であるし、仕事ぶりは悪くない。

剣を合わせてみればたしかに上手いとまでは言い難いが、真摯に切先を操り食いついてくる様子に本質は意外と生真面目だと気づかされた。

しかし身辺がきな臭すぎる。その点を見るとこのまま呂淳の側に置いておくのも考えものだ。

「あまり問題を起こすと軍にいらなくなるぞ。それと、自分の体は大事に使え。特に足は、命取りになる」

屈んだ鴻羽は床につけられずぷらぷらと揺れている涑の足をとる。さつき立ち上がる時にふらついてたのもしやと思いい裾を少しめくれば案の定足首は赤く腫れていた。

「はい。はい。気をつけます」

投げやりな返答にいらつきながらも握った足の細さに鴻羽は驚く。ほんの少し力を込めただけで小枝のように折れてしまいそうだ。

「まずはもう少し肉をつけることだな」

立ちあがって見下ろせば爰が座っているせいもあっていつもより小さく見えた。自分の背丈が高いせいもあるがだろつが、それにしても肩の線といい長い手足の細さといいまるで少女のようだ。

自分と同じ年というのが本当であればいくらなんでもこれは男と言つのは無理があるのではないだろうかと思いつながら爰を見ているといきなり手を掴まれた。

そのまま目を見開く鴻羽の手は爰の薄い胸にあてられる。見たとおり、平らで押し返してくる弾力などない胸だった。

「急になんだ」

声を不安定に波立たせてうるたえる鴻羽に爰が悪戯っぽく笑う。

「いや、なんかすごく疑ってる顔してたからさ。期待はずれだった？」

自分の動揺ぶりに赤面しながら鴻羽は何も期待していないとやら力を入れて言った。それにしてもこの手で確かめても小さく吹き出している爰はまだ女にも見える。

「で、何しに来たの？ あ、香陽か。落ちたの？」

まだ声が震えている爰の問いに平常心と自分に言い聞かせて鴻羽はうなずく。

「香陽の民は紫秦に属することには異議がないらしい」

民が粟の粒が浮いた白湯をすすする暮らしをしているというのに肉に首が埋もれて斬首に困るほど肥太った王などは必要なく、欲しいのは堤を整え、田畑に実りをもたらしてくれる王だそうだ。

「まさに討たれたのは自業自得だね。せめて官がまともならこうはならなかっただろつけどな。でも、こつちもよそのこと言ってもらえないか」

意味ありげに視線を送ってくる爰の言わんとしていることはわか

る。

呂淳はまだ王として頼りなく、それを支える父と禁軍將軍のふたりは齡五十近い。微妙な均衡を持ったこの中核は二十年持つかどうかといったところだろう。それまでに呂淳が成長しなければならぬが、我の強すぎる父に展望は阻まれている。

このままの状態で私欲に走る官が中核についたなら香陽の二の舞になるだろう。

「俺にはもう呂淳を変えることはできない。父上も止められない」
そう、何も出来ない。

築いていたと思っていた信頼はただの思いこみであり、父の耳に自分の声は届かない。

「自分が丞相か將軍になろうとは思わないの？」

鴻羽はすぐに返答が思いつかばず、ゆったりひと呼吸する程度の間をおいて口を開く。

「呂淳が望むのなら」

自分の意思で自分の立ち位置を決めるつもりはなかった。呂淳のために出来ることは、従順であることではない。

「ねえ、呂淳に忠実なのは義務だから？ それともただの同情？」
どちらも違う。ならば何かと考えて脳裏をよぎったのは罪悪感だった。父を止められないことへのか、それとも追い詰めてしまったことか。あるいは両方。

鴻羽は唇を引き結んで、澄んだ瞳に影を揺らした。

「……臣下は王に忠実であるべきだ」

その場しのぎの答に涙がつまらなそうに息を吐いて自分の腿に肘をつきその手に顎をのせる。

「そう言ってるうちは呂淳はお前を近くに置きたがらないだろうね
それならばそれで仕方ないと鴻羽は思う。しかし、一つだけ納得
いかないことがあった。

昔から母親以外とはあまり慣れ親しもうとしなかった呂淳が出会って間もない涙のような苦手な部類に入るだろう人間を受け入れた

事は不可解だった。

後宮の女たちなど足元にも及ばない容姿に惑わされたなどというものがいるが、そうではないだろう。

美しいというのなら。

国一の華と謳われた呂淳の母親である叔母の顔を思い出し、鴻羽は戦慄した。

「お前……」

ようやく、媛が誰に似ているのか分かった。

叔母だ。媛のほうがわずかにきつい印象があるが、瞳や、口元など一つ一つ見ていけばよく似ている。瓜二つと言ってもいい。

「なに？」

怪訝そうに首をかしげる媛に乾いた口でなんでもないとかえす。

容姿とはこのことだろう。

七年前に呂淳の腹違いの兄が急死し、父が呂淳を世継ぎとするために暗殺したのではないかとの噂が立った。第一王子が生来病を得やすい体質だったので噂にとどまったが、第一王子の生母は殺されたのだと言い張った。そしてついには呂淳と叔母に毒を盛り、自らも服毒し自害した。

幸い呂淳はその日体調が悪く毒の入ったものを口にせず助かったが、溺愛していた息子と寵姫二人を相次いで亡くした先王は消沈し、そのまま病を得ておとしついに崩御した。

この件があつて宮中では叔母のことも第一王子やその生母のことについては皆口を重くしているので曖昧にしていたのだ。

気づいてみればその顔の傷がなおさら痛々しく思えて、鴻羽は眉をひそめた。

「その傷、呂淳にどう説明するつもりだ」

「ワタシが話さなかつたら追及してこないよ」

立ちあがつてくじいた足をかばうようにして卓の前まで歩く。寝台が部屋の半分近くを占める小さな部屋なのでそれはほんの数歩の距離だった。

鴻羽は側で倒れている椅子を起こして片足立ちしている爰にそこに座るよう促す。

「今はとにかく事をうまく進めていかないことには先も何もないな」
卓に敷かれた地図を見つめる爰の顔は見れば見るほど叔母と重なる。

「湿布と軟膏を持ってくる。他に痛むところはないか？」

痣や切り傷を放置しておくのも見ている側としても心地よいものではないので鴻羽はひとまず近くの医務室に行くことを決めた。

「蹴られた肩のあたりが痛むぐらいかな。折れてないし、打ち身程度だな」

肩を少し動かしてみる爰の口調は軽い。慣れた様子にいったい今までどんな暮らしをしていたのかと鴻羽は呆れる。

いや、さっきの男の暴言からおおよそは察することが出来る。

けれどやけに哀しく腹立たしいものがこみあげてきて深く考えることは出来なかった。

年も明け白蛾三年。春の気配は近く軍の演習場は溶けはじめた雪でぬかるみ、兵卒らはそれに足をとられぬよう手綱を操り馬を走らせる。

軍の増強の算段が整い増えた部下たちの指導に当たっていた鴻羽は右軍將軍夏悠宗に呼ばれ、部下に休憩を言い渡しその場を離れた。「精を出しているところすみませんね」

そろそろ五十近い夏將軍は柔らかい物腰とは裏腹に若いころは単騎敵陣へと突っ込んでいくような苛烈さで功績をあげた実力者であり、鴻羽の師でもある。

「いえ。そろそろ一区切りつけようと思っていましたので。何かありましたか？」

「陛下がいらっしやっているのでご案内を頼もうかと思ひまして」

珍しいと思いながら鴻羽は首をかしげる。

大抵こういうときは爰が一緒についているものだ。

爰の所在を問うてみると夏將軍が苦笑した。

「爰殿は関牙と軍盤をしています。それを見ているばかりでは退屈そうだから君にお相手してもらおうかと」

はいと、うなずきながら鴻羽は内心でため息をつく。

呂淳の自殺未遂のことはごく一部の人間しか知らない。そしてその元凶が自分であることは父以外誰も知らず、自分は陛下の気心の知れた幼馴染と思われる。

こうして当然のように呂淳の相手を頼まれるとどこか後ろめたい。

「失礼します」

左軍側の軍舎の応接室にふたりは入る。

部屋の中央にすえられた長椅子に挟まれた卓では爰と左軍將軍郭関牙が升目の入った盤の上で兵に見立てた文字の入った真四角い木駒を動かしている。今日はいつもと少し様相が違った。

幸い先日の怪我が痕になることもなかった爰の隣に呂淳が座ってふたりで交互に郭將軍の相手をしているらしい。

「いつの間にか参加してしまわれていますね」

「そのようですね」

盤を覗きこめばすでに爰と呂淳側は追いこまれているようだった。年の頃合いは夏將軍と同じの郭將軍は見た目も性格も岩のようだが、彭軍師の優秀な弟子であっただけに頭はやわらかく智将として知られる人である。

爰のことは気に入ったようで、彭軍師も好きだったという趣味の軍盤によく付き合わせている。

「降参！ あー、騎兵はとっとくんだったな」

真剣に盤を睨みながらとられたら負けとなる將の駒の逃げ場を探っていた爰だが、退路は見つからず前のめりにしていた身体を椅子の背に投げ出した。

「うむ。あきらかにお前の読み違いだったな。陛下、お相手ありが

とつございます」

深々と怖面をさげる郭將軍に呂淳も小さく頭を下げる。

「どうしましようか。陛下をご案内するのに鴻羽を連れてきたのですが」

「鴻羽の隊、見せてあげて。ワタシはまだここにいますから」

再び盤を眺めて駒を何手か戻し、涑が言うと、呂淳も頼む、と言って立ち上がった。

王直々の言葉に鴻羽は涑の態度を窺める言葉をのみこむ。

「では、こちらへ」

わずかな緊張とともに鴻羽は呂淳を誘い部屋から出る。

ふたりきりになってもお互い言葉はない。静まった回廊の遠くから兵卒らのかけ声がさざ波のように寄せては返していく。

思い返せば呂淳とふたりきりになるのはあの日以来だ。

あの日自分がよけいなことを言わなければ幼いころのように今でも軍盤遊びをしていたのだろうか。

「……懐かしいな」

思い出に意識を飛ばしていた鴻羽の口から自然と言葉はこぼれた。

「軍盤か？」

隣にいる呂淳が視線だけ鴻羽に向ける。

「ん、ああ。子供のころはよくやったな」

「ふたりで母上に何度挑んでも一度も勝てなかった」

そういえば、そんなこともあった。彭家と斎家の邸宅は近く、父と彭軍師の間に亀裂が入るまでは両家とも懇意にしていたので年の近い叔母と彭軍師の娘は仲が良かったそうだ。そのときに鍛えたという叔母の軍盤の腕は相当なものだった。

やはり涑が彭軍師の孫、というのは真実かもしれないとまだほんの少し疑心を抱いている鴻羽は思う。

「涑は、似ているな」

誰に、とは言わずとも呂淳はうなずいて前を向いた。

「よく似ているよ。何もかも母上に瓜二つだ」

どこか浮ついた声に鴻羽は危うさを覚える。

幸福だった記憶に癒されるのはいい。ただそこへ沈みこんでしま
うとなれば、引きずり出さなくてはならない。

しかし、その術は見つからない。

以前の自分ならば、入れこみすぎるなどとも言えただろうが今は
そんな些細な言葉にすら気を使ってしまう。

隣にいるのに、呂淳との距離は途方もなく遠く思えた。

春、呂淳が即位して三年目を迎えた。

今年も桃花楼では宴は開かれたが、主役であるはずの呂淳はここ数日の寒暖の差に風邪をひいたようで挨拶もそこそこに後宮へと戻っていった。うつすといけないからと湊は連れずに近衛を数名共にして、である。

残された湊の付き添いに当然のようにあてがわれた鴻羽は下に降りていた。

高樓にいた者たちより幾分質素な衣装をまとった人々は料理や酒の置かれた円卓を中心にして談笑したりしている。しかし鴻羽と湊が近くを通ると緊張したように背を伸ばして動きを止めた。

「逃げるの？」

あまり好きな言葉ではないが、この場合は仕方ない。

鴻羽は人々がそっと開ける道を通り、出来るだけ人気がないほうに歩いて行く。

「ごうもひつきりなしだとさすがにこたえる」

今年父にだけでなく自分のところにも人は集まった。その傍らには年頃の娘がいて彼女らは頬を染め熱心に視線を送ってきていた。今も物珍しそうにこちらを見ながらも娘をせつついている姿が見受けられるが、気づかないふりをして鴻羽は通り過ぎる。

「いい子いなかったの？」

「……まだ結婚する気はない」

「まだって、もう十九じゃないか」

たしかにそろそろ伴侶を持つてもおかしくない年だ。実際幼いうちから相手の決まっている同輩にはすでに子が出来ている者もいる。

「呂淳が先だ。後継が生まれるまでは俺は結婚しない」

辺りを取り巻く薄紅が途切れ、新緑に変わったところであろうやく鴻羽は足を止めた。

「それ待ってたら一生結婚できないよ」

「それは」

言いきる爰に鴻羽は声をあげかけて難しい面持ちで口をつぐむ。

呂淳が即位の際に妃になるべく後宮に入った娘やその侍女らは数多くいるが、いまだに誰の寝所に訪れることもなければ自分の寝所に呼ぶこともない。ただ呼び寄せるのは爰のみで、もしや女には関心がないのではと官たちが頭を悩ましている。

さすがに、それはないと思うのだが。

だがしかしと鴻羽は後宮で並び立つ者のいない美しさを持つ爰を視界の隅に映しながら、本人に聞くのもはばかられてひとり悶々する。

「……言っておくけど呂淳とは寝てないよ」

沈黙の意味を察したらしい呆れ混じりのため息と共に爰がそう言う。そのあけすけな言葉に頬を熱くしつつも鴻羽は安堵した。

「それはないと思っていたからそれでいいが……呂淳から気に入った娘がいるとかいう話は……」

「ない。男も女も嫌いだよ、呂淳は」

鴻羽が言い終わるのも待たずに答えた爰は瞳を半ば伏せた。長い睫毛が影を落とす目元は憤っているようできてどこか哀しさがあった。

爰が呂淳に忠を尽くしているようには見えないが、ただその脆い感情を気遣う素振りはある。臣下、ではなく友人のような関係なのだろうとかつてその位置にいたと思いこんでいた鴻羽は寂しく思った。

「良さそうな娘を見つけたらそれとなく場を作って、ゆっくりでいいから話が出来るようにしてやってくれ」

「いたらそうするけど、いつになるかわからないんだからお前は早く決めておいたほうがいいと思うよ。気になる子とかいないの?」「いない。今はそれどころでもない」

そんな暇があるなら馬を駆り剣術に励むべき時期である。

「今だからこそ、だろ。山宇さんうと漢芙かんぷの勝負はもうすぐつくだろうし、そしたらまたどこかが動く」

紫秦の南部に位置する二国はお互いの国境にある銀鉾山の利権で揉めている。度々争いを起している両者だが、雨による崩落で漢芙側に土砂が積もりそこから漢芙が難癖をつけ戦となり泥仕合を二月半続けている。

「どちらが勝つと思う？」

「さあ。でもどっちが勝つても一緒だろう。お互い意地になっただけで終わるころには擦り切れてぼろぼろだろうね。でも今、人が流れてくるのはなあ」

隣国から踏み荒らされた土地を捨て逃げてくる者もぼつぼつと増え始めている。今は軍も香陽の復興にも人手はあるほうがいいが問題はその者らをどう食わせていくかだ。

香陽は土地と水に恵まれている。古い堤などを手直しし、紫秦が培ってきた農耕の技術を用いれば豊かな実りが期待できるが、まだそれも始まったばかり。これ以上の民が増えるのは考えものだ。

「上には戦が終わったら両方攻めとればいいと言っている者もいるらしいが」

なんでもかんでも取り込めいいというものではないだろう。しかし一部の隊将らが真面目に議論しているらしいことを聞くと不安になる。

「あのふたつとるなんて綿しよって川をわたるみたいなものだよ。

鉾山も五年持たないかもしれないから將軍達も丞相も許さないだろう。今は無駄に版図を広げること考えずに地盤を固めることに専念すべき、って郭將軍も言ってたしワタシもそう思う」

そのためにも一刻も早く世継ぎが必要なのだ。

堂々巡りになりそうなので鴻羽はそれを口にするこなく空を仰いだ。

緑の合間に見えるのは澄んだ透明な青。舞うような春風に乗ってくる花の香りが緑の匂いを和らげちようどよい。

「酒持ってくればよかつたね。ここならゆつくり飲めるや」

同じように空を見上げていた漕が腰をおろして幹にもたれかかる。

「お酒ならありますわよ」

ふと、背後で群れる緑の木々の合間から姿を見せた女性がいて、
鴻羽は目を瞬かせた。

六つ年上の三番目にあたる末の姉の柚凜ゆっりんである。

「姉上！ どうされたのですか？」

父方譲りの美貌に母譲りの柔らかな印象が溶け込んだ面おもてに微笑を
浮かべながら、自棄酒でもと思つてと柚凜は言った。

「はあ。そうですね……お久しぶりです」

啞然としつつ、鴻羽は柚凜に頭を下げた。

自分が九つの時に十五で西の亜州あ長官に嫁いだ姉とは実に三年ぶ
りの再会である。

「しばらく見ないうちにまた大きくなつたわね」

自分から言わせてみれば姉が縮んだように見える。その上婚家で
心労が多いときいていたのでやつれて顔色も悪い様子に胸が痛んだ。

「ねえ、自棄酒って何かあったの？」

あまりの突然のことで鴻羽が聞き逃していたことを漕が問う。

「離縁しましたの」

無理のない様がことさら痛々しく思える笑顔でそう言う姉に鴻羽
は絶句した。

「ふたりめがもうすぐ産まれるの。だからもう諦めたの」

亜州長官には息子が一人いる。ただし柚凜の子ではない。

嫁いで一年、二年と過ぎ五年たてど子はできず、八年目にして侍
女が柚凜の夫の子を身籠った。相手の侍女は雇われてまだ一年と経
たぬ十五の少女だった。それは珍しいことではなく正妻に子が出来
ないのならそうすることは普通だ。しかし、姉にはそれが耐えられ
なかつたようだ。

「……父上には？」

「あいかわらず興味がなさそうにしてたわ。先に家に帰った時に母

様は少しは慰めてくれたけど」

さして寂しそうでもなく言っただけで、柚凜がとこざらはと、媛を見ながら首をかしげる。

「媛です。私の補佐官です」

鴻羽の紹介にはじめましてと、媛が頭だけで会釈した。

「あら、こちらが。とても優秀な軍師様と聞いてますわ。それに噂通りお綺麗な方。あ、ごめんなさい。男の方に綺麗だなんて失礼ですわね」

「いいよ。美人に褒められるのは悪い気しないし。それにしても上のふたりも見ただけで、斎家はみんな美人だよ。鴻羽も顔はいいし」

「そうですよ。顔はいいのよ、鴻羽は。でも戦地での活躍はきいても浮いた話は全くきかないのはやっぱりねえ。媛様も大変でしょう、この子昔から頭が古いから」

「ふうん。呂淳の言っただけとおり昔からこうだったんだ」

言いたい放題の姉と媛に口を挟む気力すらない鴻羽はふたりは姉弟のようだと思う。姉が叔母にも少し似ているせいだろう。

柚凜と並ぶと媛はどちらかと言えば少年に見える。背丈が柚凜よりも高いせいだけでなく、輪郭の線がやはり媛のほうが尖っている印象がある。しかし、男と並ぶと柔らかすぎ、女に見えてしまう。

つくづく不思議な顔立ちだ。

「いけない。杯がひとつしかないわ」

酒を注ぐ様子としていた柚凜の丸い瞳は、鴻羽を映していた。

ひとりである場に戻りたくはないのだが。

鴻羽は柚凜からそっと目をそらし賑やかな声の聞こえるほうを敵陣でも睨むかのように見つめる。

「ワタシが行くよ。どうせ鴻羽は呑まないだろ」

一歩も足を進められずにいた鴻羽に媛が助け船を出す。酒も女も苦手な鴻羽はこの時ばかりは素直に感謝した。

「驚いたわ。叔母様そっくりね。呂淳が気に入るのも分かるわ」

媛の背中を見送って、柚凜がしみじみとつぶやく。

「姉上、その話はあまりなさらないように」

「いいじゃない、今はふたりきりなんだし。それにしても鴻羽が涓様のように楽しい方と仲がいいなんて珍しいわね」

別に仲がいいわけではない。

この頃は呂淳のことや戦の話はよくするのは単に仕事上一緒にすることが増えたのと情報収集のためである。たしかに雑談めいたことを話すこともあるし、剣はあまり得意でないというので指示したり、暇つぶしの軍盤の相手もすることはあるが。

そんなことを言うと姉は不思議そうな顔をした。

「それを仲がいいというんじゃないの？」

客観的にみればそうかもしれないとはいえ鴻羽はそれを認めるのにはまだ心境は複雑で、返事を濁した。

山宇と漢芙が半年にわたる戦を終え共倒れしたのは夏の終わりだった。それに伴い西南に位置する李宋いそうが動き始めた。国境で二月もこう着状態が続き、援軍を出すことが決まり総大将に夏將軍を置き鴻羽の小隊も参戦することになり出立が間近に迫っていた。

その戦に備えての訓練の合間、演習場の一角で涓と鴻羽は木剣を合わせていた。実力の差は傍から見ても明らかである。涓が頬を薔薇色に紅潮させ向かう一方で鴻羽はうっすらと汗をかいている程度でやすやすと涓の向ける切先をかわしている。

剣を受けるにしてもわざと隙をつくって誘い込んでいるのだ。

やがて鴻羽の木剣が薙いで、涓の握る木剣が陽に吸い込まれていくように天高く舞った。

「力、強いよ」

衝撃でしびれているらしい手を振りながらそう言う涓に鴻羽はやりすぎたかなどと思ってしまう。

いつもの他の兵との訓練ではけして思わないことである。

それもこれもいつまで経っても爰が男に見えないからだ。少し赤くなった手は小さくその指は細い。剣を持つより甘い菓子でもつまんでいるほうが似合いだ。汗ばむ白い首筋に幾筋かほつれた髪が乱れ落ちているのもどこか妖しい。

「……これぐらいは耐える。まったく、お前は前線には向かないな」
鴻羽はこれ以上爰を見つめ続けているのも気ままずくなり厳しい顔をつくってそう言う。

「まあ、お前みたいに先頭に立って戦うより軍略立てるほうが得意だよ。でも小隊の補佐官ぐらいじゃあんまり後ろには回してもらえないからもうちょっとは強くなりたいたいんだけどなあ」

爰が自分の袖をめくり露わになった細い腕を眺めた後に羨ましげに鴻羽のを見て、その布越しにも分かる筋肉質な腕に触れる。

「なにをどうやったらこうなるの？」

「日々、鍛錬あるのみだ」

布越しに触れてくる爰の指先に腕の筋肉が強張る。なぜそうなるのかはわからないがとにかく落ち着かないので鴻羽は静かに答えて出来るだけさりげなく爰の指先から逃げる。

「結構頑張ってるつもりなんだけどなあ。一年やそこらじゃ無理か」
「呂淳に言えば軍師として扱ってもらいやすくはならないか」

これまでの戦でさして大きい怪我もなくそれなりに器用にぐぐりぬけているとはいえ爰を前線に立たせるのは気が休まらない。あまり褒められたことではないが呂淳に頼れるならそうしてほしいところだ。

「でも実力で軍師として認められてじゃないと意味ないよ。今でも十分恵まれてる立場だからこれ以上呂淳に口利きしてもらうのもね」
至極真つ当な返答に鴻羽は自分の考えを恥ずかしく思った。

軽薄な言動のせいですい中身もそうだと思いきやこんでしまう。人を表面だけで判断するのはよくないとは重々分かってはいるつもりだが、と鴻羽はあらかじめ用意していた竹の水筒から水を飲む爰の上下する喉に初めて気づく。

喉仏がない。ないことに違和感がなさ過ぎてまるで気づかなかつた。

「飲む？」

「いや、いい。お前今いくつだ」

「お前と同じ十九だ。爺様の孫だからお前や呂淳と同じ年に決まってるだろ」

果実のように瑞々しい濡れた唇が少女ほど高くはないが声変わり前の少年よりは高く玲瓏な声を紡ぐ。

「あ、もしかしてまだ性別疑ってるの？ なんだったらここで上脱いで見せてもいいよ」

服の合わせに手をかける溲を鴻羽は止める。

一度その胸に触れて確認しているので必要がないと感じたのはもちろんだが、遠巻きにふたりの様子を見ている他の演習中の兵らの視線が強まったのに気づいたからでもあった。

「疑って悪かった。だが、不用意に人前で脱ごうとするな」

この男所帯で下手に女よりも見栄えがいいとなると兵たちもつい目が行きがちだ。実際遠征の時に夜に自分の天幕に溲を呼びつけようとした上官もいる。無論、間に入ってちくちくと下種な勘ぐりをされつつも所定の場所、つまるところ自分と同じ天幕で休ませた。

「なんで？」

愛らしく小首をかしげてみせる溲の瞳にあどけさはなくからかいの意図がありありと見えた。遠まわしな言葉を選んでいた鴻羽はそれに言葉を詰まらせて口をへの字に曲げる。

「わかってるならきくな」

「とうかさ、お前ワタシが宦官だって忘れてるだろ。普通の男とは違うんだよ」

言われてそのことを失念していたことに気づいてなるほど思った鴻羽だったが、まだ納得しきれなかった。子供のころは後宮によく出入りしていたので宦官はよく見たがここまで女に見える者はいなかった。

「それに心配しないで軍の中で身売りするような真似はしないさ」
そう付け加える爰の物言い物言いはどことなくひねくれている、
なぜだか腹が立った。

「お前にそのつもりがなくても、そういうことはあるだろう。自分で対処できないと思っただらちゃんと言え。わかったな」

別に爰の身持ちが悪いと思っただけではないのだ。ただ、なんだらうか。せつかく才もあればそれを伸ばすような努力をしているのだからそれを無駄にさせたくない。

鴻羽のくどくどした説教をきく爰の表情はいつもの煩わしげなものではなくて心底不思議そうなものだった。

「わかった」

珍しく素直にうなずいたのち爰はなにかを思い出したようでそうだと声を上げる

「柚凜に暇が出来たら軍盤の相手をしてほしいって言われてるんだけどいいよね。休憩時間だし」

「ああ、それはいいが……。いつも付き合わせて悪いな」

柚凜は爰のことをすっかり気に入ったようで休憩時間をききだしては禁苑に爰を誘い茶だの軍盤だのと相手をさせている。

家に戻ってきた頃には影を残していた柚凜だったがこの頃はずいぶん明るくなってきたてきでありがたいと思っっている。

「あの結構軍盤強いから面白いんだよね。話も上手いし、離縁だなんてもつたいないことするよなあ。あ、でも心配しなくてもお前に義兄上って呼ばれる気はないから」

爰が口元を楽しげに歪ませてそう言い、その場を離れた。

その背を見送るうちに先ほどまでの自分の言動がまるで年頃の少女に説教しているようだと思つてしまった鴻羽はため息をつく。

頭の片隅にはあれは男だという認識は確かにあるのにどうしても接し方が少女に対するものになつてしまいがちだ。

「隊長、手解きお願いしますー!」

そこへ爰に比べれば随分遅しい十六の兵が緊張気味に申し出て来

て鴻羽はうなずく。

他の見物していた何人かも自分もと手を上げる。その一同を眺めながら彼らと同じように扱うことはできそうにないとまた涙のことを思う鴻羽だった。

「退屈ですわねえ。もうひとつきになるかしら」

禁苑の池を臨む東屋で柚凜は軍盤の準備をしながらねえ、と対峙相手の呂淳に同意を求めると。

呂淳は子供のころから変わらない無愛想な顔でうなずいた。

鴻羽の小隊が夏將軍に率いられて出兵してひとつきになる。

この頃の暇つぶしの相手である媛がいなくなり母と共に刺繍をするのにも飽いた柚凜は朝議を終えて後宮に戻る呂淳を捕まえた。手頃な軍盤の相手にと思いついたからだ。

秋も深まり冷えるこの頃だが今日は日差しが暖かい。

ときおりそばで踊る風は涼しく、陽光を跳ねさせる水面には朱や金の葉がたゆたい目に楽しい。陽の力が弱まっているこの時期、室内で呂淳といるにはあまりにも陰気すぎるのでここにしたのは間違いいではなかったようだ。

「媛様は戻ってきてほしいけど、鴻羽は帰ってこないほうが嬉しいですわよね」

駒を進める指が一瞬止まったが、それだけで呂淳は無言だった。

なにかと頼りにしながらも呂淳が妬む視線を鴻羽に向けていたのは知っている。自分もそんな顔をしてるだろうと思うと心底嫌気がさしたものだ。

五つになる頃にもう男児は諦めて自分に婿を取り後継がせると父が言った矢先、鴻羽が産まれた。それからはどれだけ学問に励もうと父に構われることもなく、先々益になるような家に嫁いだ姉二人とは違い適当なところへ嫁がされた。

そして婚家では子が産めない厄介者扱い。

離縁したいと言った時の夫の安堵しきった顔は今思い出しても齒噛みしたくなる。

「姉上」

昔のように自分を呼ぶ呂淳に柚凜は自分の手が止まっていることに気づき、駒を進めた。

「鴻羽のことをこれからどうされるおつもりですか？」
逃げる呂淳の駒を柚凜は追い落とす。

鴻羽が高位につけばつくほど、呂淳に落ちる影は濃くなっていくことは明白だ。それに耐えられるはずがない。

「それは爰が決めることです」
てつきりまた沈黙かと思えば意外な答えだった。

そんな判断すら任せてしまうなんて、あの容貌によほど心酔しているらしい。

「それなら、出世するのね。あの子のこと気にいつているようですもの」

とくに確証があるわけではないが確信はあった。

鴻羽に人が向けるのは嫉妬か好意のどちらかである。鴻羽よりも優れたものを持っている爰ならば嫉妬よりも好意を抱くだろう。

しかし駒を動かす呂淳に動揺は見られない。

「あなたはそれでよろしいのですか？」
駒を進めたが呂淳の次の手に逆に取られてしまった。

「爰はけして鴻羽の味方にはなりません」
柚凜は盤に落としていた目を上げる。

駒を見つめたままの呂淳の表情は硬いが、珍しく強気な目をしていた。それは記憶の中にある呂淳とは違いすぎて違和感を覚える。

「……あら。よけいなお喋りがすぎたわね」
いつの間にか将の眼前に騎兵が迫っていた。

「私の勝ちでよろしいですか？」
柚凜はもちろんと、素直に敗北を認め再度呂淳に勝負を持ちかけた。

雨にけぶる紫秦西南に位置する汰州たしゅうの都市まちの門前にはぞくぞくと泥まみれの兵らが戻ってきており、見知った顔を見つけると声をかけ生還を喜び勝利を祝った。

緩やかに闊歩する馬の上で鴻羽もそんな風に声をかけたりかけられたりしながら無意識のうちに小柄な兵ばかりが自分の目にとまっているのに気づく。

変な癖がついたものだ。

以前注意して分かったと言ったにもかかわらず涇は自分の側を離れて行動することが多く姿が見えないと気になって仕方ない。

おかげでこの頃は涇を視界の隅に入れるようにするという癖がついてしまっている有様だ。

「鴻羽」

門のすぐ前にいた夏將軍に声をかけられ、鴻羽は馬を降りる。その傍らにとくに大きな怪我を負った様子もない涇がいるのを見てようやく任務を果たし終えた気分になった。

「しんがりご苦労様。よくやりましたね」

師の褒め言葉に鴻羽は笑顔でありがとうございますと返した。

涇の案により実にひとつき近くかけて山の中腹に張られた敵陣周辺の道なき道を探り当て、夜明けを前にそれぞれの道に部隊を配置し四方八方から濁流が押し寄せるかのごとき勢いで敵陣になだれこんだ。

最初に合図として崖とも呼べそうな急斜面を馬で駆け下りた部隊の先頭に立ったのが鴻羽だった。

「お前を選んだのは良かったみたいだな」

先頭に鴻羽を指名した涇も満足げにうなずいている。

やれるだろう、と向けられた期待の眼差しを思い出した鴻羽は面映ゆくなり視線を涇から夏將軍に移す。

「ええ。本当に。それにしても涇殿の策を見ていると彭軍師を思い出しますね。あの方は地形を利用した奇襲はとても得意でしたから」

爰が彭軍師の孫であることを軍内で知るのは鴻羽のみである。

一度家名を名乗ることはないのかときいたが、証拠もなければ継ぐこともできないからわざわざ名乗ることもないとのことだ。しかし、幼少のころに刻まれた軍略の基礎は誰が築いたかすぐ分かるものならそのうち名乗ったほうが士気もあがってよいだろう。

「郭將軍にもいろいろ習つてるところだし、似るんだろっね」

言つた後にくちゅん、と爰がくしゃみをした。そろそろ雨も雪に変わる季節である、戦闘の熱気でまるで感じなかったが冷静なってみれば寒い。

「早く中に入るぞ」

風邪でも引かれたらたまつたものではないと鴻羽は爰の肩を叩いて城門の内へと促した。

夜には雨が上がり冷えこんだ空気が浸透しているが、篝火の光に包まれた都市は祭の様相で熱気にあふれていた。州長官の屋敷と役所として機能する建物がおさめられた州館の庭を中心に、近くの官吏の屋敷の庭も解放され酒と料理が振舞われている。

騒がしいなか死に物狂いで勧められる酒を断り、しなだれかかってくる女をひきはがしながら鴻羽は夏將軍の側に逃げこんだ。

「とても、賑やかですね」

疲れ切つた鴻羽のつぶやきに、彼に持ち寄られる酒を片っ端から呑みほしている夏將軍が楽しげに笑う。

「長かつたですからねえ」

いつ攻めこまれるかと城門を締めきり不安の中過ごしてきてようやく解放された民と勝利に熱が上がりついている兵の歡喜は都市が揺れそうなほどだ。

鴻羽は茶を飲みながら人々の笑顔を眺め、つられるように口元を緩める。

しかし、その和やかな表情は酔った地元の兵に絡まれている湊を見つけると同時に消えた。

湊のしらけた顔からして友好的な雰囲気はなく、小柄な湊より一回り大きい男の手は尻に伸びている。

卓に茶杯を置き、鴻羽は一直線にそこへ向かい男の手をとった。

「我が隊のものにこのような品のないことはなさらないようお願いします」

鋭く睨めば、男が酒臭い息を吐きながらしまりのない笑い声をあげる。

「そりゃ悪かったなあ。あんまりにも別嬪だから女かと思つてなあ。でも男にしちやいい尻してるぞ」

下品な物言いに無表情で鴻羽は男から手を離しかわりに湊の腕を掴んで元いた場所に歩き始めた。

「ああいう場合はすぐに助けを呼べ」

「酔っ払いなんてあんなもんだしなあ、いちいち生娘みたいな反応してるとつけあがるから頃合い見計らつてあしらうのが穏便だよ。」

ところで、腕

いつまでも湊の腕を掴んでいたことに気づいて鴻羽はあわてて手をほどいた。

しかしあいも変わらず細い腕だ。これだからああいった手合いに絡まれるのだろう。男児たるものもつと逞しくあるべきである。

「もてますねえ」

「まあね。あ、郭將軍に酒持つて帰りたいんだけどいいかな」

先ほどの件は気に留めていなさそうな湊と夏將軍にひとり腹を立てている自分が虚しくなりながら鴻羽は茶をすする。酒も旨いが、ここは水がよいので多少冷めた茶も旨い。

卓の皿から料理が消え、次第に酔い潰れ眠りにつくものが増えて辺りの騒々しさもおさまった頃、なにやら屋敷の裏手で騒がしい音がした。賑やかな類のものでなく不穏な空気をそれは孕んでいる。

「將軍」

指示を仰ぐと夏將軍も動き始めた。

すわ奇襲かと駆け付けたが、すでに見張り役の兵に風体の悪い小汚い数人の男らが取り押さえられていた。辺りに玉や貨幣が散らばっているところからして宴に乗じた盗賊のようだった。

柄を握っていた手を離し、鴻羽は夏將軍と顔を見合わせて苦笑した。

「戻って報告に行ってくる」

一緒について来ていた爰がなぜか小声で言っつて背を向ける。だがそれを呼びとめる声があった。

「おい、そこにいんのは爰か？」

そう言ったのは一番年長と思われる盗賊の男だった。

知り合いかと尋ねれば少々間において否定の言葉が返ってきた。

「へえ。今ここで困われてんのか。楽啄らくとんの奴いくらで手放した？」

聞き覚えのある名が盗賊の口から出て鴻羽は考えて、答はすぐに出了た。

爰の遠縁となっている官吏の名だ。

向き直った爰が後で話は聞くと言っつたが男はかまわずやたら大きいだみ声で喋り続けている。

「大枚はたいたんだ、それなりだろうなあ。しかし、それだけの買い手がすぐにつくなんて、さすが半陰陽だな」

思考が止まった鴻羽は無意識のうちに振りかえり舌打ちする爰を見てようやく頭が回りだす。

半陰陽。つまりは男でも女でもない体を持つて産まれた者。

すでに騒ぎに集まっていた十数人のざわめきを薙ぎ払うように爰が声を張り上げる。

「そいつらが、爺様と母上を殺した。彭吾准ほういつしゅんとその娘を殺したのはそいつらだ」

一瞬、音が消えた。

しかしすぐに先ほどより大きなどよめきが起こった。

「な、何いってやがる！ そんなことは知らねえ！」

男が押さえつけながらも食いかかるように体を前に乗り出そうとする。

どちらが正しいか、みな口々に言い合い始める。頭の中の整理がつかないまま鴻羽は夏將軍にどうするべきか問うた。

「事の真偽については明日にしましよ」

そうしてその場合は、夏將軍が涸を連れ用意された部屋に戻り、盗賊らは牢に放り込まれた。

鴻羽は涸に声をかけようと思ったがなんといいかわからず、夏將軍の隣でうつむき強張った涸の顔を見つめることしかできなかった。

「処分が決まったぞ」

軍舎の懲罰房の一室に鴻羽は入り、涸に声をかけた。

寝台がなく硬い石床に敷布と上掛けのみが置かれた小奇麗な部屋で本をめくっていた涸が少し顔を上げた。

「王宮から追い出されるの？」

さして困った様子もなく尋ねる涸に鴻羽は首を横に振る。

件の盗賊が捕えられ、王宮にまで連行されてひとつきになる。

彭軍師とその娘の殺害に関しては否認し続けたが、首領の持っていた短刀が先々代王が彭軍師に下賜したものであることがわかり余罪も合わせ斬首となった。

そして残った問題は涸だった。

過去に盗賊の手助けをしたことがあること、官吏に取り入り身体のことを隠した後宮に入りこんだことについてどう処分するか半月にわたって話し合われた。涸の後宮入りに手を貸した楽啄という官吏はこれまでの素行不良もあり北東部の村に左遷が決定している。

涸は直接窃盗に及んだことはないが経路や侵入手段の助言をしている。それと同時に三つの州の実に二十近くに及ぶ地方貴族の不正

を呂淳に告げていた。こうなった時のことを見越してのことらしく、
爰の正体が知れたと同時に呂淳は監査を命じた。実際貴族ら税をこ
まかし私財としており、その徴収と罰としての追加徴収された財の
おかげでここ近年の戦で目減りしていた国庫は多少は潤うようだ。

ただ、その情報を手に入れた理由も問題だった。盗賊らの話によ
ればある金満家に爰を一晩売ったところそこから貴族の元に噂が伝
い、興味本位で買った貴族からまた別の者へと口伝で広がり通りに
立たせているよりよほど儲かると盗賊らが味を占めて各地の貴族や
金満家の元を渡り歩く中で得た情報ということだ。爰の買い手がな
い時は爰に助言をしてもらい盗みを働くを繰り返したようだ。

そして盗みの手段も覚えたところで楽啄が破格の値段をつけたの
で売ったということだ。

楽啄がそんな値段で買い取ったのは爰が倍で返してやるから買っ
て宦官として後宮のもぐりこませると要求してきたからだそうだ。
亡き呂淳の母に瓜二つの容姿から爰が呂淳から湯水のように金を引
き出せるかもしれないと考えて話に乗ったものの滞る返済についに
業を煮やしたのが去年の暴行である。

そうして処分が決まるまでは一応は懲罰房にということになった。
「二月の謹慎だ。將軍方と呂淳に感謝しておくことだな」

丞相を中心に各尚書らは官位剥奪を訴え、軍側は謹慎処分にとど
め置くことを主張した。丞相と郭將軍の舌戦がいままでになく凄ま
じいものだった、とは夏將軍の話だ。

家に戻っても苛々としたままの溪雁けいがんに鴻羽も意見したが、それは
やはりあしらわれた。

最終的にはようやく弱気ながらも呂淳が軍側につき処分は決定し
た。

鴻羽は冷え切った床に腰を下ろし、あぐらをかく。

「あと、これはお前が持つていてもいいことになった」

懐から鞘に翼を広げる大鷲の意匠が施された短刀を取り出し、鴻
羽は爰に渡す。

「とつくに、売り飛ばされてると思ったよ」

吐息のようにつぶやく爰の表情はいつになく柔らかい。

短刀を手に取りまじまじと眺めた後にすっかりと握りしめ胸にだきしめる姿は母親に抱きつく幼子のように見えた。

思い返せばこの三年近くこんな無防備な表情を見るのは初めてだ。

親の後を懸命に歩いてついていく雛鳥を初めて見たときのように胸に暖かな熱がこみ上げてくる。

「……ねえ、謹慎っていうことはしばらくここにいろってこと？」

大事そうに短刀を傍らに置いて問う爰にまっすぐ見つめられ、ぼんやり魅入っていた鴻羽は我に返る。

「いや、ここじゃない。私室に戻っていいらしいが、嫌だというなら別の部屋を用意してもいいということだ」

話し合いの席に着いていた口さがない隊長によって爰が身売りもさせられていたことは軍内で広まっている。妙な期待を持って話題にしている兵もいるので軍舎よりどこかほかに部屋を移し替えたほうがいい。

「軍舎のほうでいいよ。どうせこの先とやかく言われるんだ。今から逃げたって仕方ない。ああ、あとは歩きながら話そうよ。ここ寒い」

短刀と本を懐にしまいこんで爰が立ち上がる。

たしかに床石から足に伝わる冬の冷気は芯までしみると鴻羽も腰を上げた。先に出ていく爰の後ろ姿は少女そのものでこの儂げな身がどう扱われてきたかを考えると言いようのない怒りがこみあげてくる。それと同時に諸悪の根源が誰であるか思いいたって胸が痛んだ。

「……すまない」

「何が？」

「いや、父上が彭軍師から受けた恩を忘れなければこんなことにならなかつただろう」

涙が少し歩みを緩めて振り返らずに小さく笑い声を洩らす。

「本当に真面目だねえ。そんなこといまさら言ったってさ、何にも変わらないし、そもそもお前が謝るのは違うよ」

「だが、俺の下につくのはもう嫌だろう。左軍に行けば彭門下生も多にいる。そちらのほうが護ってもらえるだろう」

軍舎にとどまるといふなら彭軍師の教えを受けたものたちの中にいたほうが安全だ。それに斎家の人間の下に就くというのはやはり心情的にもいいものでないだろう。

そう思うが涙が自分の目の届かないところに行ってしまうことを考えると苛立ちに似た落ち着かない気分になった。

「それは、いいや。お前のそういう律義なところは嫌いじゃないしさ、嫌じゃなけりゃ補佐官でいさせてよ」

ようやく振り向いた涙は朝露に濡れる緋色の牡丹のように艶やかな笑みを浮かべる。

やはりこの容貌は軍舎においておくには危うすぎるのではないかと鼓動を速めてしまった鴻羽はぎこちなくこのまま補佐官でもかまわないと返した。

二日前に謹慎を解かれた^{えん}爰はようやく^{りょじゅん}呂淳のもとに顔を出した。後宮の出入りは禁じられておらず、今まで通り好き勝手出入りさせてもらっている。

謹慎中も呂淳が自ら様子を見に来ることも多かったので、さしたる感慨もなく^{えん}爰はいつもどおりに椅子に座った。

「軍は居心地悪くないか？」

呂淳がそう問うのに薄く笑って見せる。

「物珍しがられるけど、そうでもないよ」

補佐官という立場上やたら世話焼きで堅物な上官の近くにいるので直接声をかけられることはほとんどなく、好奇の視線がうるさいぐらいだ。

楽^{らく}啄^{とく}への支払いも滞っているしいつまでも隠し通せるものでもないが三年足らずというのは思ったより早かった。だが邪魔な奴らが消えて祖父の形見が返ってきただけでも良しとするべきだろう。

実のところ祖父と母を殺したのはあの盗賊連中ではない。

だが半ば見世物のように自分を売りつけ、全部自分の懐にしまいかんだあげくに手近な劣情の捌け口にして機嫌が悪い時は殴ったり蹴ったりしてくれた男どもに抱く罪悪感などこれっぽっちもない。

「そうそう。次の第一騎兵隊の隊長、^{こじゅう}鴻羽の名前が拳がってるんだけどきいた？」

尋ねると、呂淳は首を横に振った。

足を痛めていた隊将が引退し、後任に騎兵隊長が就くことになって空いた隊長の席を埋める候補が何人か拳がっている。夏^か將軍は若く勢いあるものを前に立たせることを考えているので実力も先導力もある^{こじゅう}鴻羽が押されることに違いない。

そんなことを話しているうちにまだ年若い女官がやってきて茶を置く。その際ちらりと^{えん}爰を見て何事もなかったように静かに出て行

った。

軍の中よりは品のある反応だと面白がりながら爰はそろそろと茶に口をつけるが、熱さにすぐに口を離した。

「出来るだけ冷まして持つてくるよう言っているのだが……」

爰の様子に呂淳が困り顔で湯気の上がる茶瓶を見る。

その顔があまりにも真剣味を帯びていて、添えられている砂糖漬けの生姜に手を伸ばしていた爰はくすりと笑った。

「いいよ放っておいたら冷めるから。あの子見ない顔だったし新しい子だろ。それでも冷ましてる範疇だろうしな。茶は熱いうちに飲むものだと言つてたのは鴻羽か」

冷まして飲んでいると、湯気の立たなくなった茶に不服そうな顔をしていた鴻羽は妙におかしかった。

「……爰はやはり鴻羽の補佐官がいいか？」

問われて少し爰は考える。

鴻羽以外の、と言われても特に理由あるわけでもないが気分が乗らなかった。

さすがに付き合いも長くなったせいだろう。最初は彭家ほうの生き残りであるという自分の秘密を告げて狙い通り信頼を得たが、共有の秘密がなくとも十二分に信頼を勝ち取っている自信はある。

それにいたつてわかりやすく真面目なああの男の隣にいるのは肩肘を張る必要がないので楽だ。

「……動きやすいし使い勝手もいいからな。けど、謹慎明けでいきなり昇進は通るかな？」

「少し強く言えば通る、と思う」

言葉こそは強気だが禁軍の統括官でもある呂淳の声音は弱腰だ。しかそれでも最初にあった頃よりは成長したといえるだろう。

三年近くかかってこの程度と言つてしまえばそれまでだが、進まないよりはいい。

出会う前に市井の噂で聞いた王の評判は特に何もなかった。自分がいたのは王都から離れた場所だったのでこれだけ目立たないので

あれば何も無いのは当然だろう。後宮に迎えられそんな娘を探しに
来ていた楽隊からも、これといって特徴のない、しいていうなら陰
気とぐらいしかきかなかった。

会ってみればなるほどその通りで少し落胆した。

話してみれば頭の回転はむしろ早いほうで知識もある。卑屈さの
要因に気づいたときには歯噛みし手首を切ったことを知ってもう少
し早く辿りついていればとそんなことをさせなかったのにと悔しく
もあった。

「爰は本当に熱いものが苦手だな」

茶をすすり不思議そうにつぶやく呂淳を眺めながら爰はしかし、
と思う。

いずれ王として全てを取りまとめ背負わねばならないことを考え
るとのんびりしてはいられないだろう。

そう遠くないうちに齋さいけい溪雁から全てを取り上げてしまうのだから。

その日の齋家の夕餉の卓にはいつもよりも少しだけ質のいい食材
を使った料理が並んでいた。

鴻羽の昇進祝いである。

といつても夕食の席は賑わうことなく静かなもので、鴻羽の元に
侍女が食後の茶を持ってくる頃には父の溪雁は立ちあがっていた。

「鴻羽、後で私の部屋に來い」

いつも通りの重々しい顔つきの父親に、鴻羽は特に何の疑念も抱
かずに返事をした。

「何かあったの？」

部屋から溪雁がいなくなったのを見はからって隣の袖ゆいじん凜が楽しげ
に瞳を輝かせながら問うてくる。

「何も無いと思いますが」

言いながら鴻羽は考えてみるが思い当たる節はない。

「そうなの……。ああ、そうだわ、涇様はもう補佐官ではなくなつたの？」

残念がりながら首を傾げてくる姉にそれかと鴻羽は苦虫を潰したような顔をする。

今まで上げた功績を思えば涇の昇進は不自然ではないが、ひとつき前に謹慎を終えたばかりだというのはおかしい。呂淳が口添えしたのは間違いない。父の話とは先々の涇の扱い方についてだろう。

「その方の話はおやめなさい」

やんわりと窺める母の花江かこうに柚凜が生返事をしてつまらなそうな顔をする。

このところの涇雁の不機嫌の元である涇の話はたとえその場に彼がいなくとも話題にのぼらせるのを花江は嫌がる。鴻羽と柚凜はそんなことをあまり言わない母の態度を珍しがりながらも、出来るだけ口にするのは控えている。

とはいえ、今日のように柚凜が口を滑らせて重苦しい雰囲気になることは多い。

鴻羽はその場から逃げるように席を立ち、涇雁の部屋に向かった。

「失礼します」

部屋に染みこむ橙の灯りの中心に坐する父の正面に置かれた椅子に促され、鴻羽は行儀よく座った。

「彭涇を殺せ」

なんの前置きもなくそれだけを涇雁が言った。

父の口から出た言葉に我が耳を疑いながら鴻羽はなぜ、と問うた。

「好き勝手が過ぎる。陛下を盾に取って罪を逃れた拳句、こんどの昇進だ。そもそも醜業をしていたものを軍に置くなど規律が乱れるもどだ」

「それならば陛下にじかにご忠告されればよろしいのではないのですか？」

父の言うことは正論だ。しかし、死に値するほどのことではない。

「呂淳は言うことを聞かぬ」

不快そうに震える父の口元に刻まれた皺は灯に陰影を濃くしている。炎が揺らめくとその顔が歪んでひどく醜い面相に見える。

「次の出陣のときに実行しろ。戦死ならば誰も文句は言っまい」

「味方を討つなど私には出来ません。失礼します」

席を立ち一礼して踵を返す。

いつから父はこうなのかと考えてみても節目は思い出せない。自分の最も古い記憶の父は今よりもっと誇らしかった。

「鴻羽」

呼び止められて、迷いながらも足を止める。

「お前は彭濞を留め置いて陛下のためになると思っっているのか。一度の失敗で逃げるな。のちに陛下を支えるのはお前だ。あのようなものではない」

返事をせずに鴻羽は部屋を出た。

廊下に灯された灯りはもう小さく、先は闇に呑みこまれなにも見えなかった。

軍議會を終えた鴻羽は最後に部屋を出て緊張を和らげる。

騎兵隊長に任命されて初めての軍議會だった。挨拶程度でほとんど声を発することはなかったが、多くの視線は浴びていた。

自分と年がひとつふたつしか変わらない隊長は数人いるので若さゆえに注目を浴びたのではなかった。

丞相である父の後ろ盾による出世、あるいは湊の昇進のためなどと好ましくない噂があるからだ。

「齋殿」

前を歩いていた五つ年上の隊将に呼ばれて鴻羽は再び気を引き締める。

「そちらの彭殿はずいぶんと貴殿を気に入っておられるようだが、どうやって気を惹いたのか教えてはくれませんか」

言葉の意図するところを掴み切れずに鴻羽は訝しげに整った上官の顔を見た。

「どうせなら私の補佐官に、と誘ったのですが、あなたの下がいいと言われまして。実に羨ましいことだ」

含みを持った笑顔に鴻羽は失望を覚えた。

湊の策を自分の考えたことだと吹聴する上官もいれば、その過去が知られてから下卑た値踏みをする上官もいた。若くして隊将につき有能とされたこの隊将も変わりないようだ。

「若輩ゆえ、隊将の補佐をするにはまだ経験が足りないなのでお断りしたのだと思います。また時を置いて声をかければよろしいのではないでしょうか」

義務的に口を動かすと、上官が興ざめした顔をする。

「貴重な意見、感謝するよ」

上官が先をいくのに一礼して鴻羽は口を引き結んだ。

待っていたらしき隊長らと合流した隊将の声が漏れ聞こえる。真

面目ぶって面白くないだの、生意気だのと言われても他にどういう言い方が出来ただろうか。

もやもやしたものを抱えながら執務室にもどると、問題の補佐官が卓につっぱして寝息を立てていた。あまりにも緊張感のない様子に怒りを通りこして脱力してしまう。

起こそうと近づいて、その傍らにある積み上げられた書物を目にしてためらった。

小隊から中隊を飛ばし騎兵隊のまとめ役となりやるべきことが急に大がかりになった。任に就いてから一〇日、ふたりで明け方近くまであれこれ必死に覚え込んでいるのでろくに寝ていないのはよくわかつている。

「起きろ」

とはいえここで寝るのはと鴻羽が声をかけるとすぐに湊は体を起こした。

「どうだった？ 初めての軍議会は」

あくび交じりの問いかけに鴻羽の眉根が寄せられる。

「特に変わったことはなかった。それよりここで寝るな。身边には気をつけると言っただろう」

父が湊の命を狙っていることを直接は言っていないが、自分の立場をよく考えるようにとは伝えている。それでだいたいの状況は察しているようだが、まだどこか甘く見ている節がある。

「気をつけてる。お前が部屋に入った時には起きてた。そもそもこんな昼間からここで誰に襲われることもないだろうけどね」

「それはそうだが、心構えの問題だ」

だらりと椅子の背にもたれかかっている湊の顔は面倒くさいとも言いただげである。

こちらとて面倒だと鴻羽はついさっきの上官とのやり取りを思い出す。

「そついう堅物なところなおさないと無駄な苦勞するよ」

椅子から立ち上がり書物のおしこまれた壁際の棚へ湊が移動する。

無造作にひとつに束ねただけの漆黒の髪が流れる無防備な背中に
鴻羽は足音を忍ばせて近寄る。

細い首に手を伸ばしてその指先が触れる寸前、爰が振り向いた。

「俺がもし、お前を殺すつもりだったらどうする」

硬い声でいえば爰がさして緊張感のない顔で考え始める。

「うーん、とりあえず悲鳴あげてみるかな。殺人未遂と強姦未遂とどっちがいい？」

それはどっちも困る。

真剣な顔でそう言うつと爰が弾けるように笑った。

「だめだ、お前単純すぎて面白い」

柵にすぎるようにしながら肩を震わせる爰の言葉は笑い声が大半でとぎれとぎれだった。

「人が真面目に話しているのを茶化すな！」

怒鳴ったところで恰好はつかない。体を反転させて柵に背をもたれる爰の笑い声はもうないものの、その顔はまだ楽しげである。

「お前はこんなところで馬鹿をやるほど短慮でもないし、呂淳が嫌がることはしないだろう」

それはその通りで嫌々ながら負けを認め目仕事に戻ろうとしたとき、扉が叩かれた。返事をして招き入れ鴻羽は苦い顔をした。

「……姉上、軍舎は女人禁制です」

「開口一番からそれなんてひどい弟ね。このあいだ後宮に出入りを控えるよう言われたばかりで退屈で死んでしまっそうなのよ」

芝居がかった様子で柚凜が嘆いて見せるのにこの姉にも困ったものだと鴻羽はため息をつく。

出戻ってきて早一年、昔の記憶はおぼろげだったがこういう食えない性格であることをようやく思い出したところだ。

「いいじゃないか、別に」

それを助長するような爰の態度もよくない。

「昨日今日決まったことではないんだ。姉上も、知っておいでしよ」

軍舎への女人禁制はもちろん、王族は従姉弟同士での婚姻が認められていないため万一のことを防ぐために本来ならば柚凜は後宮に出入りすることは許されない。離縁の理由が理由なのでこれまでは大目にみられていたが、ただでさえ後宮の女たちに目を向けていない王の側に世継ぎを産むことのない女がいるというのはまずいと柚凜は先日忠告されたばかりなのだ。

「でも王陛下がいいとおっしゃったならいいでしょう？」

柚凜が先に中に入ると後ろから呂淳が入ってきた。

「そこで姉上とお会いして、どうしても入りたいというから……」

声をすばませて床に視線を落とす呂淳に何か言えるはずもなく鴻羽はため息すら飲み込んで用を聞こうとするが爰に先を越される。

「急な用？」

「急ぎ、というわけではないのだが母上の形見を見つけたんだ」

見つけた、という言葉に違和感を覚え鴻羽は聞き返す。

「伯父上が、宝物庫に母上の物も兄上の母上の物もいっしょくたにしてしまって分からなくなっていたんだ。ふたりの遺品は処分されてしまつてほとんど残っていなかったけれど、思い出せる分だけだけは残っていて……」

もたもたと懐から包みを取り出す呂淳を待ちながら鴻羽は柚凜と顔を見合わせた。

叔母が亡くなつてから遺品を売らねばならないほど財政がひつ迫したことはないはずだ。

「お父様もひどいことするのね。何か手元に残してあげてもよかつたのに。あら、綺麗。星真珠だわ」

批難するというより訝しげに言つて柚凜が包みから取り出された腕輪に声を弾ませた。

瑠璃色の大粒の真珠ひとつといくつか小粒の黒真珠を銀鎖でつないだものだ。

遙か南の海でしか取れない黒真珠はもちろん高級だが、星真珠は昨年辛勝した李宋の国土の三分の一を占める湖の貝からしかとれず

さらに価値が高い。

「売り惜しみされるわけだね、これは。万一の時にいい資金になる」
この類のものには興味がないのか、媛の感想は素っ気ない。

そんなことにはかまわずに、呂淳が恭しく媛の手をとり、その手首に腕輪を巻きつけた。

「これは媛が持っているといい」

満足げに口元をほころばす呂淳に、鴻羽は閉口する。

たったひとつの母親の形見を贈るなど求婚しているも同然にも見える。ただ母親に似せてみたいだけというのあればよいのだが。

「貰うのはいいけど、さすがにこんな高いもの部屋に置いておくのはなあ。とりあえずはお前が持つていればいいよ」

媛が腕輪を外すと、呂淳は落胆してそれをまた包み懐に戻した。

その様子に胸をなでおろしていた鴻羽はふと、柚凜の視線を感じ、そちらを見るとなぜか笑顔が返ってきた。

「陛下、贈り物ならもつと気軽に身につけられるものの方がよろしいですよ」

しかし言葉は呂淳に向けられ、姉の笑顔の意味はさっぱり分からなかった。

「これでないと意味がないんだ」

頑なに言いきる呂淳に、鴻羽はこれはどうしたものかと考え込む。
覗き見るようにして目を向けた媛は特に変わった反応することもなく、装飾品はつけないよと笑っている。

「媛様ほどお綺麗ならば飾る必要もありませんものね。ああそうだが、わたくし厩舎を見に来ましたの。よろしければ案内してくださいます？」

「あー、そうしたいけど隊長殿がそこでまたしかめっ面してるし、まだやることもあるからなあ。厩舎なら呂淳でも分かるだろ」

「そう。残念だね。陛下、お願いしてもよろしいですか？」

いったいこのふたりは主君を何だと思っているのだろうか。

しかしながらあまり後宮から出ない呂淳が出歩くようになったこ

ともあるのでそうきつくは窘められない。

「前々から言ってるけど本当に痕になるよ、眉間」

ふたりを見送ったのち、媛が深い縦皺の刻まれた眉間を見ながら淡々と言う。

「お前たちが勝手すぎるからだ」

「それって、呂淳も含めて？」

問い返され、鴻羽は言葉に詰まる。たしかに言葉を発した時頭に、呂淳のことも浮かんでいた。

「とにかく、あの腕輪は受け取るな。面倒なことになる」

「呂淳はそういつつもりじゃないだろうけどね。それより見て欲しいものがあるんだけどさ」

書棚に向かう媛は、呂淳との関係は兄弟に近い友人というが、呂淳自身がそう思っているかどうかは確かではないだろうに。

「これなんだけどさ」

書棚から引っぱり出した本を媛が机の上に広げる。地形録のもののようにあるが、古いようで地名が微妙に違うところがちらほらとみられる。媛によると、彭軍師の書き込みが随所にみられるということだ。

軍略について語るときの媛が一番綺麗だとひっそり鴻羽は思っている。熱のこもった瞳の煌めき、は否応なく魅了されてしまうほど美しい。

媛の左腕にあの腕輪は馴染んでいた。

このままであれば媛があ腕輪を取ることがあるかもしれないと思つと奇妙な感覚が胸に沸き起こって、ちりちりとした痛みがあとに残った。

「聞いてる？」

相槌すら打っていなかった鴻羽は聞いていると、動揺を隠すように平坦な声で答えた。それに媛は唇をとがらせる。

「だから、呂淳が子供つくろうとしないのはワタシのせいじゃないって。お前が真剣に考えたって仕方ないことだろう」

何か取りちがえたらしい爰に鴻羽はうなずいて、自分の胸の奥底に垣間見えたものから目をそらした。

演習場の隅にある厩舎ではまだ年若い馬番が背中をそりかえりそうなほどまっすぐにし、ぎこちない仕草で呂淳と柚凜を鴻羽の愛馬の前に案内していた、

「ありがとう」

柚凜が微笑むと耳まで赤くした馬番の少年は上ずった声で恐縮してきたのち、自分の持ち場に戻っていった。

「かわいらしいわねえ。そういえば初めて叔母様に会ったときの鴻羽ものぼせてましたのよ」

まだ三つの頃だったか、呂淳の遊び相手として後宮に連れて行かれた鴻羽が家に帰って来た時に叔母がとても綺麗だったと頬を上気させていた。肝心の呂淳に関しては叔母の後ろに隠れてしまっており話せなかったと落ち込んだ様子だったが。

「母上はとてもお綺麗でしたから」

そう言う呂淳はつくづく叔母に似ていない。

女だろつが子供だろつが目を奪われずはいられないほどに叔母は美しかった。人形のように綺麗だと幼心ながらに憧れていた姉ふたりが叔母を見た後ではすっかりくすんでしまったほどだ。

呂淳はどちらかといえば整っている部類の顔だが、一年も姿を見なければ思い出せないぐらいに印象がうすい。そんなところはもう顔の思い出せない先王そっくりだ。

「叔母様ほどお綺麗な方はいないと思っていたけれど、爰様なら並ぶほどかしら？」

遅しい馬首を慈しむように撫でながら柚凜はつぶやく。昔と変わらず苦手なのかぶるりと馬が口を震わせると呂淳が一步引いた。

「……この子、大人しいですわよ。撫でてみたらいかがですか？」

それにしても母親そっくりなつたわね。目がよく似てるわ」

鴻羽の愛馬は自分が嫁ぐ前に乗っていた馬の仔だ。この仔馬を産んで母馬は力尽きた。自分は嫁ぎ先が決まっただけで連れて行くつもりだったが叶わなかった。初めから父は鴻羽のものにするつもりだったのだ。

いい馬になると言われたとおり、毛艶がよくしなやかな四本の脚はどの馬より力強く地を蹴り駆ける姿を思い起こさせる。

「姉上はその馬が欲しいのですか？」

「……もうこの子の主人は鴻羽ですよ。一年しか一緒にいなかったわたくしのことなんてきつと忘れてしまっているし、わたくしも昨日まで会おうなんて思いませんでしたの」

「ではどうして急に？」

「最近、なんだか子供の頃のことをいろいろ思い出してしまって」

鴻羽には手に入れられて自分には手に入れられなかったものたち。自分から鴻羽が奪ったものたち。

たとえば、この仔馬、父の膝の上、お気に入りだった書物だとか。ひとつ思い出せば、淀んだものが胸に一滴落ちる。尽きぬ感情の雨だれは今にも外に溢れてしまいそうだ。

「どうしてあの子の手には何でも手に入るのかしら」

弟の元には望まずとも何でも転がりこんでくる。

この馬のことも欲しいなどは一言も言わず、何度もいいのかと確認してきた。嫌だといっても、父が聞き入れないことは分かっている自分には煩わしいばかりだった。

「鴻羽はこの頃よく涙様を見ているわ。きっとあの子のことだから自分でも気づいていないでしょうけど」

それにほんの少し自分が涙と名前を出せば、いつもより口数が多くなる。

「あの子が手にいらなかったものはありましたか？」

嫁いでいた期間は弟と共に過ごした時間より長い。

その自分が知らない間を共に過ごしてきた呂淳の表情が強張るの

を見て柚凜は薄く笑った。

このまま石女と陰で憐れまれ笑われながら弟がなにひとつ不自由なく榮譽を手に入れていくのを傍らで眺める退屈で惨めな余生をおくるつもりはない。

そのために必要な従弟は盤の駒のように容易く動かせそうだと確信できた柚凜の心はさつきまでの沈鬱が嘘のように弾んでいた。

夏の始まりに戦場に出た涇が戻ってきたのは秋も間近に迫った頃だった。

周辺では倒れる国もあり、国境での小競り合いはあるものの紫秦ししんは比較的平穏と呼べる日が冬から初夏まで続いていた。

ただし、あくまで表面上のことである。

北の大国蒼魏せいの内情不安は落ち着きつつあるが、もはや戦乱の炎の勢いは留まることを知らない。順調に育まれた香陽かやうの土地は周辺国に狙いをつけられ、昨年辛勝した李宋も本格的にこちらに手を伸ばしてきた。

「涇、怪我を……」

涇の動きの鈍い左腕に呂淳は表情を曇らせる。

「手こずったからな。矢に毒がなかったのは良かったな。やっぱりワタシって運だけはいいいよなあ」

飄々と言つてのける涇に呂淳は言葉を口の中で迷わせて喉の奥に押し戻した。

本当ならば、戦場には出て欲しくない。この程度の怪我ですめばいいが今の戦況ではあまりにも危険すぎる。

あの子のために何かしてあげられるのは、あなただけよ。

昔、母からもらった兄でも、鴻羽でもなかったたひとつの自分だけのもの。

だから涇の望むことは何でも叶えるつもりだが、はたして今のよ

うに爰がしたいことを出来るようどうにか道を広げることだけではないのだろうか。そう疑念を持つが、爰自身がそれだけやってくれればいいというのだから大人しく従う他はない。

「退いてくれそうか？」

変わりに戦況を聞くと爰は気難しい顔で首を横に振る。

「……このままいくとまずいな」

李宋は潤沢な資金で傭兵を集め数に物言わせて兵力を削るような攻め方をしている。昨年の侵攻は演習といったところのようで、今回はまだ進軍を繰り返すつもりのようにだ。

「この国は滅びてしまうのか？」

一国の王が口にするにはあまりにも軽率な言葉だったがそれを咎めるような人間はこの場にいない。

「王があつてこそその国っていうんならもうとっくに終わってるけどね」

開け放たれた窓の枠に腰掛ける爰の髪がぬるい風に光を受ける漆黒の川面のように揺れる。

横顔が一番似ていると呂淳は思う。この面立ちだからこそ欲深い官吏が爰を連れてきた時すぐさま人払いをし、ためらいなく跪いた。

「陛下……」

そつ口にしたのは爰ではなく呂淳だった。

「何、急に」

初めてそんな呼び方をされた爰が困ったように笑う。

呂淳が母の苑昭えんしやうに己の正体を知らされたのは兄の死の直後だった。王妃が子を産むのは後宮内が通例だが、苑昭は生家の齋家で爰を産んだ。第一王子の稜明の生母は息子が病を繰り返すうちに王の寵愛を独占しようと思んだ苑昭が呪詛している、あるいは毒をもったなどと妄言をわめくようになっていたため溪雁が万一のことを考え苑昭を実家に戻らせたのだ。

そのときちょうど近所の彭吾准ほうごしんの娘紅蘭こうらんも妊娠していた。

先に出産したのが紅蘭だった。そしてその翌々日、苑昭も出産し

た。

時に偶然を運命と呼ぶことがある。

まさしく溪雁はそう思ったのだらう。

先代の王の元では側近として信を得ていた吾准だが、そのときの王は極端に嫌っていて幼少の頃より兄のように溪雁を慕っていた。そんな状況に後押しされて溪雁はどうあがいても玉座に座ることのできない妹の産んだ子と紅蘭の産んだ男児を無理やり奪い取りすりかえた。

すり替えられた苑昭の子は当然のように殺されかけたが、身を呈して苑昭はその子を庇い彭家に預けた。

「あなたは紛れもなく王だ」

母の死、これもおそらく溪雁の手引きによるものだろう。その直後、彭家の訃報を聞いたときにはまだ自分は必死に媛が生きていることにすがりついていたが、時が過ぎるにつれて諦めていった。

けれど生きていた。いつかあこがれた兄のように聡明で、とても愛していた母によく似て美しい容貌をして。

「そうかな。まあ、まだ終わるつもりはないよ。そのためにも早いところ片づけないといけないな」

自分たちの目的は斎溪雁、ひいては斎家への制裁。

本来ならば彭軍師は第一王子が溪雁の手にかかる前に王都へ媛を連れ戻るつもりだったようだが一足遅かった。

せめてもの不忠義の斎家への制裁は媛に託された。

自分の立場なら、丞相の席を奪うことも殺すことも難しいことではない。しかしそれでは官吏からの反発も大きく内政は乱れる。王という立場の自分がもっとしっかりしていればそうはならないがいかんせん出来の悪い自分に官吏らが従うはずもない。

媛には申し訳なく思う。最も頼りにならなければいけないというのに臆病で愚昧などうしようもない人間でさぞ落胆したことだらう。鴻羽のような何もかもが揃っていれば、と羨んで呂淳の心がざわつく。

「鴻羽を、どうするかは……」

斎家の跡目を継ぐ、伯父の一番大事なもの。長女が生まれてから十一年経ち、四人目にしようやく産まれた待望の男児だ。

だからこそ早々に潰しておくべきだがと呂淳は涸を見やる。

「まだ、放っておけばいい。それに今鴻羽はいないと困るんだよな。あいつが走り出すと兵が勢いづくんだ」

涸の目元が和らいで、胸が軋む。

自分で気づいているのだろうか。この頃涸は鴻羽の話をするときはいつも楽しげに笑っている。

いつか自分の唯一のものですら鴻羽に奪われてしまいそうで怖い。しかし、斎家の者を選ぶというのは裏切りである。自分への、母たちの、これまでの歩んできた道への。

涸もそのことは重々分かっているはずだ。だから、恐れることはない。自分だけに言い聞かせるのだけだ。

「でも、これ以上の戦は無駄かなあ」

自分の思考に半ば入り込んでいる涸の側に呂淳は移動する。

そうして月のない夜空に似た瞳に自分が映るのを認めるが、ぐじやぐじやと腹の奥でもつれ絡まりうねるものは静まりはすれど消えることはなかった。

白峨^{はくが}五年、雪解けの頃^{しゅう}鴻羽^{じゅうふ}は呂淳^{りょじゅん}と共に李宋^{りそう}にいた。

李宋との戦には負けた形となった。しかしながら領土は砂一粒と奪われてはいない。

昨年の秋の軍議で^{えん}潒^{えん}が領土を差し出して停戦を乞うのでなく、軍事協定を結ぶことを申し出ることを提案した。

狙^{たんせん}うは湍茜^{たんせん}。

李宋の南に位置する湍茜は鉄の国とも呼ばれる。国土は狭いがその大半が鉄鉾山であり、鉄も豊富であると同時に山々がどんな城壁よりも堅牢に国の中枢を守護している。

この乱世に乗じてすでに小国ふたつを呑みこんだ湍茜が背後に迫る李宋は食糧確保と慣れぬ戦を覚えるために侵攻してきたというおおよその予想は当たったよう、すぐに親書の返事はきた。

そうして、李宋で同盟締結の儀が行われることになった。

不本意ではあるが、負けた以上はこちらが出向かねばならず向こうの要請通り呂淳自ら赴くことになった。

「少し横になるか？」

儀も終え宴まで休息をとるために来賓用の部屋に戻った呂淳の足元はふらついていた。

異国で呂淳が心細くないようにと近衛隊とともについてこられた鴻羽は一瞬ひやりとしたが、彼が倒れてしまうようなことはなかった。

王宮から数えるほどしか出たこともない身での初めての長旅もあるのだから、見知らぬ人間に囲まれていた疲れが出たのだろう。

「……派手だったな」

小さく頭を振って長椅子に座る呂淳の足元には金糸銀糸で飾られた深紅が色鮮やかな絨毯が敷かれている。李宋の女王の衣装はこの絨毯に負けぬほどの華美さであった。王宮全体も柱一つにまで細工

が施され華やかな国であるが、自然な色と飾り気のなさを美德とする自分たちには落ち着かない。

この部屋にある卓と飾り棚は紫秦から買いつけたか何代か前に贈られたかしただろつ黒櫨を使ったものでこれだけは目にすると気持ち安らぐ。

「そうだな。少し目が痛いぐらいだったが、おおらかな方ではあった」

ぼつちやりとした顔立ちの中に柔らかい微笑をたたえて悠然としていた四十近い李宋の女王はいたく呂淳の親書を気に入ららしい。父いわくほとんど自分で書いていたというから、少し驚いた。

この頃は爰に関わること以外にも自ら政務をこなそうと多少は前向きになっているらしい。父はおもしろくなさそうだが、漏れ聞こえる官吏たちの声も悪くないのでこのまま少しずつ自信を持つてくれればいい。

「あの方を見ていると女でも玉座に就くことが不思議に思わないな。官吏にも何人か女がいたが、皆知患者なのだろうな。わが国でも知患者は女だろうが男だろうが取ればいいと思うんだ。姉上のように賢くて口の立つ女は探せばいるだろう」

「呂淳なら変えられるだろう。通すのは難しいが提案してみるだけ提案してみればいい。しかし姉上のようなひとが何人も城にいるのは少し気疲れそうだな」

鴻羽が苦笑してみせれば呂淳もそれにつられるように笑顔でそうだなと答えた。

十日あまりの道程の中で呂淳との会話は相変わらず少ないままながらも、ようやく笑顔を見られて鴻羽は安堵する。

しかしあらかたのことがすんだとはいえまだ帰りもある。それと爰のこともあるのでまだ気は休まらない。

この頃は郭將軍をはじめとして彭軍師の門弟たちもかつての師と重ねて敬意を見せているが、彼らが常に近くににいるわけでない。父の息のかかったものが軍内にもいるかもしれない。

それにあの華奢な体で本気になった男に押さえこまれたら逃げようがない。

気がつけば援に関する事ばかりが頭を占めていてもたってもいられなくなる。

早く帰りたい。

もう何度目かも分からない願望を鴻羽は胸の内ではくくっていた。

呂淳らが出立してからは季節も相まって軍議はのんびりしたものだった。

鴻羽の代理で出席したのち援はそのまま郭將軍と話し込んでいた。「山つていうのはやっぱり手強いよなあ。向こうも少数での戦闘は慣れてるだろうし」

話題は当然のごとく湍茜攻略についてだった。

「やはり先生の血筋だな。あの方も戦の前にはそんな風だった」

あれやこれやと幼子のように言葉を連ねる援に郭將軍が目を細める。

「爺様もあれで結構勝負好きだったんだよね」

自分の知る彭軍師とは真面目で堅物でありいかなる時も冷静な人だった。だが、郭將軍の昔語りをきけばそれなりに戦に熱を上げる人だったようだ。

「ああ。先生も先々代の王陛下も戦となると生き生きしておられた。先生の智と王陛下の武があればこの国に敵なしとすら思えたものだ」

そこで沈んだ顔でだが、と郭將軍が言葉を切る。その視線はつい先ほどまで月一軍議会に参加する王の代理である齋溪雁さいけいがんのいた場所へ向いている。

「あの男を殿下のそばに置いたことが唯一の失策だったかもしれぬな」

先代、すなわち援の実父である王のことを彭軍師は多く語らな

った。

まさしく、生涯最大の失策と思っていたのだろう。

百数十年前、親族間の継承問題で国が傾きかけて以降王家は近親婚によって血を濃くし、他所へ血が漏れ出さぬよう徹底し始めた。しかし今より四代前の頃には王家は濃すぎる血ゆえに夭折、死産が増え王家は断絶寸前となっていた。それ以来王家は六親等内での婚姻を禁じ血を薄めようとしている。

だが、まだ血は濃く先々代の王の子はふたりが片手で足る年齢で夭折し、ようやく少々病弱ながらも上の二人よりははるかに健康だった先王は甘やかされ育った。

神童とすら呼ばれた溪雁は彭軍師に才を買われ年の近い近侍として取り立てられ、先王のわがままぶりを増長させつつも手懐けていた。

そして先王は口うるさく自分を窘める彭軍師を毛嫌いし、溪雁が昇りつめる一方で彭軍師は閑職へと追いやられた。

「良くも悪くも人を扱うのがうまいよな」

呂淳はあの通りだが、溪雁が育て上げたと言っても過言でない尚書らは皆有能だ。そして畏敬の念を溪雁に覚えており、王というより丞相に忠を誓っているのではないかと思えるほどである。

これが思った以上に強固で人脈は地方まで広がっていて厄介なのだ。

名目上は甥である呂淳に従わせるのは難しくないが、下手に溪雁を罷免すればそれは敵意に変わりかねない。かといって誰かひとりを丞相職に据えようものなら内部でいがみ合うだろうしでここが一番の悩みどころである。自分が丞相になればいいが溪雁と確執がある彭家の者が受け入れられるはずがない。

「お前も、欲を持ちすぎぬよう気をつけることだな」

予想外の忠告に爰は目を瞬かせる。

謹慎明けの昇進に関して呂淳が便宜を図ったことに郭將軍が渋い顔をしたのは知っているが、まさか今頃になって言われるとは思わ

なかった。

「わかつてるよ。過ぎた欲はいずれ我が身を焼く、だろ」

彭軍師の言葉を持ち出せば郭將軍は二度うなずいた。

「分かつておるのならいい。さて、続きはあとで軍盤でも挟んでよいだろ。任を受けた以上は留守をきちんとせねばならんぞ」

背を軽く叩かれ、補佐官として鴻羽がいない間の隊を任されている爰は生返事をして部屋から出た。

さすがにこの時期に軍舎で刃傷沙汰を起こす馬鹿はいないと思うがひとりになるとどうしても警戒心を強めてしまう。

別に鴻羽に口を酸っぱくして言われたせいではなく、もともと心がけていることではある。

だが鴻羽がいないといつも以上に気を張りつめてしまつて疲れる。やたら自分とふたりきりになるうとしてくる男もまだいるのでそれも鬱陶しい。目ざとい鴻羽がいたならいつも陰であれこれ言われるのもかまわず追い払ってくれるのに。

呂淳を任せるには適任だから仕方ないことだけれど。

早く帰つてこないだろうか。

執務室に戻つて最初に目にした空席に爰はため息をついた。

市の人の多さに鴻羽は後悔した。

高台にある王宮の真下に位置する湖港へと続く大通りは隙間なく人がひしめいている。最初に王宮へ行くとき通れないので迂回するよう王都の門前で出迎えた李宋の兵に言われたが、まさかここまでとは思わなかった。

「引き返すか？」

一度李宋の市を見て欲しいという女王の言葉に呂淳が興味を示したので目立たぬよう鴻羽ひとりが護衛としてついて来たわけだが、このぶんだとはぐれないようにするだけでも骨が折れそうだ。

「いや、行く」

人混みに怖気づくかと思った呂淳は自分の意思で歩き始め、鴻羽は慌ててそれを追う。

呂淳から目を離さぬように気をつけて半ば人に押されるようにして歩きながら辺りを見る。

縦長の国土を持つ李宋の王都は海に面した南部に王都を構え、陸路と海路を通じて様々な品が集まる。武でなく交易で栄えた国のすべてをこの市は象徴しているようだ。

呂淳が珍しい深紅の毛色を持つ鳥の前で止まる。観賞用の鳥を売っているらしく翡翠色やら虹色の尾をもったものやら派手派手しい色で溢れている。

「欲しいなら持って帰るか？」

「いや、見るだけでいい。この鳥たちは北では生きられないだろう」
言いながら呂淳は店の背後の壁に目を向ける。壁、といっても民家である。このあたりの家はどれも石造りで二階建てのようにみえて少し違う。こちら側からは見えないが一階部分はどの家も湖から海に向けて山型の穴が空いている。湖は少し高いところにあるので李宋の土地は雨が降ると浸水しやすいために家はだいたいこういう造りらしい。

「水はここまで上がるんだな」

呂淳が住居部分のすぐ真下のあたりに波打つ線を見ながらつぶやく。そこから上と下では壁の色がまったく違う。

「そこまで水が上がるのは十年に一辺ぐらいですよ。普段は半分ぐらいですかね。坊ちゃんこっちは初めてですかい？」

店の主人に気さくに声をかけられ呂淳がほんの少し驚いた顔をしておうなずいた。

「ああ。主人、書物を取り扱う店はあるだろうか？ 珍しいものがないのだが」

「ここにはないものなんてありませんよ。五つ向こうです。二十向こうにもうあるが、初めてなら手前ぐらいにしといたほうがいい

ですよ」

「ありがとう、助かった。鴻羽、主人に礼を」

見知らぬ人間と臆することなく会話する呂淳に目を見張っていた鴻羽は彼に求められて金を出す。

「おや、こんだけのことで貰うのは悪いですよ。そうだ、これどうぞ。抜け落ちたもんですがこれなら持つて帰れるでしょう」

店の主人が足元の籠から紅の羽をひとつ差し出して呂淳は笑顔でありがとう、と返す。

何もかもが鴻羽にとって新鮮な光景だった。

「誰も私のことを知らないとはいいいいものだな」

貰った羽を懐にしまつ呂淳の言葉に鴻羽はあることに気づいて表情を沈ませた。

彼は人でなく、王として見る人が苦手なのだ。そこにある先入観と責任とが重すぎるのだ。

そうして、自分が受け入れられなかった理由もそれに違いない。

「軍記物はあるか？」

書物を扱う店に辿りついて呂淳が貰つ先にそう問うて、主人がいくつか取り出し熱心にあらすじを語りあれこれと勧め始める。

それを聞きながら鴻羽がなんとなしに媛が好きそうだと思ったものを呂淳が選んだ。

「媛にか？」

問うと当然のようにうなずく呂淳が媛に肩入れする理由もようやくわかった気がする。あの主君を主君と思わぬ態度であれこれ気がかいをしてくれるのが楽なのだろう。それに加え母親に似ているとなれば尚更だ。

「鴻羽は、何か欲しいものはないのか？」

鴻羽の意識は一瞬呂淳の手にある書物に向いた。

媛が女であれば世継ぎの問題からなにからなにまで丸く収まるはずだと思つ一方で、その書物は自分が贈りたかったと妬む気持ちがあった。

自分で自分の心のありように訳がわからなくなる。

反感を覚えていたところですら目を奪われてしまったほどに爰は美しい。それは自分に限らず誰しもが感じることだ。

ただ時を経て予想外の生真面目さに反感が消える頃には他の兵と比べて頼りない外観が心配で目が離せなくなり、気がつけばずいぶん柔らかくなった表情に愛おしさを覚えてしまっていた。あの不貞腐れたときに尖らす桜色の唇すら可愛らしいなどと思ったときは自分の頭の正常さを疑いたくなった。

しかしいくら考えた所で答はひとつで、要は爰のすべてに惹かれているのだ。

「いや、俺はいい。明日には戻るのだからこのぐらいにして体を休めておいたほうがいい」

しかし何においても優先すべきは呂淳であって自分の感情など押し殺してしまわねばならない。

それはわかってはいるはずなのに抑えられない。かき消そうともがけばもがくほど深みにはまっていくばかりで、鴻羽は初めての感情に途方に暮れるのだった。

「お嬢さん、こんな時間にひとり歩きなんて危ないよ」

夕刻、軍舎のすぐ外に柚凜ゆうりんを見つけた爰はそう声をかけた。

葉の生い茂る木に囲まれている辺りはすでに宵の闇が一足先にやってきているので、近くに丞相らが庶務を行う宮があるとはいえ女のひとり歩きは危なっかしい。そもそも日暮れ時にこんなところを貴族の令嬢がほつき歩いているのもおかしいわけだが。

「こんばんは。残念ながらお嬢さんなんて呼ばれる年ではないから大丈夫ですわよ」

「あんまりワタシと年変わらないように見えるけどね」

花霞のように微笑む二十七の柚凜は世辞でなく本当に二十歳そこ

そこに見える。初めて会った時には離縁などの苦勞のせいかやつれて年相応といったところだったがこの頃はすっかり若々しくなっている。

「そう？ 嬉しいわ。でも本当を言うとこんな時間にこんな場所で齋家の娘に声をかける変わった殿方を探していましたの。けれど駄目ね。みんな挨拶ぐらいしかしてきませんわ」

さすがにこの発言には爰も面食らった。

貞淑な顔に似合わず変わった女である。いや、これまでの言動はとてもおとなしいものではなかったがここまで奇抜な行動に出る人とは思わなかった。

「あなたほど変わった人はそうそういないと思うよ。街でうちの奴らと呑むんだけどさ、特に用がないなら一緒に来る？」

たしか弟と違っていける口だったと思いだしながら誘いをかけるとすぐに柚凜は行くと声を弾ませた。

「爰様はよく軍の方達とお酒をお呑みになられますの？」

「たまにだな。今はほら、大戦の前おほこだろう。李宋との同盟も気に食わない奴らも多いからある程度吐き出させておいたほうがいいんだ。鴻羽もいないしね」

多少はそういうことも必要だと鴻羽もわかっているようだがあの通りの羽目の外し方など分からない不器用者なので周りも容易に気を緩められない。

それからふたりは軍のことを主に話しながら歡樂街へと向かった。話ながら、といっても柚凜の問いかけに爰が答える形だった。しかし軍がらみの話など興味を持つ女というのは珍しく、質問も面白いものだったので道のりはあっという間だった。

「まるで昼間のようですね」

店の軒先に吊られたいくつもの灯籠の光が重なり浮ついた明るさに包まれた歡樂街の様子に柚凜が感心したような声を上げる。

通りには長卓が道に沿うように並べられそこに集まる人々の声は昼間以上に賑やかだ。

貴族の邸宅が集まるのは城の北側でここは南側と真逆なので日が暮れてから家を出ることのない令嬢には珍しい光景なのだろう。

「どうしたの。女連れじゃない。さすがにあんたに見劣りしない…
…あら、あんた姉さんがいたの？」

目当ての店に向かう途中、顔見知りの娼婦に声をかけられ爰は苦笑して見せる。

とりあえず自分の体のことは王宮内でとどめられているので、この娼婦もからかい半分によく誘ってくる。

「ワタシのじゃなくて、うちの隊長殿だよ。ほら、前に一回連れてきただろ」

「ああ、あの。じゃあこちらは斎家のお嬢様なんだ。へえ、けど似てるねえ」

まじまじと娼婦に見られた柚凜が似てるかしらと小首をかしげる。

「似てる似てる。こんな美人連れ立って歩かれちゃこっちは商売あがったりだね。でもお嬢様と並んだらさすがにちよつとは男に見えるか。っと、いけない常連だ。じゃ、一回でいいから買ってよね」
勢い任せに喋るだけ喋って娼婦は呼びかける声に駆けていく。

「なんだか楽しそうでいいですね」

娼婦の背を見送りながら柚凜が目を細めた。それになぜと爰が問い返せば自由そうだからと答が帰ってくる。

「まあ、窮屈そうには見えないけどさ、どこで生きてたってそれぞれ窮屈なもんだよ。食べるものと寝床に困らないだけ幸せなことだと思っけどね」

「そうかもしれませんがね。でも他人の不幸をいくら聞かされても自分の幸せは満たされませんわ」

「そうでしょう、と同意を求められた爰はうなずきながら父親似なんだらうな、と思った。

下を見て妥協など一切しない。ただ自分が欲しいものだけを貪欲に求めていく。鴻羽よりよほど斎家の後継にはふさわしい人だ。

「どうすれば、あなたは満たされるの？」

柚凜が首をかしげながらふつと遠い目をする。

「さあ。それがわからないんです。男に生まれていたら、今よりはきつと満たされる気がしますけど。爰様は男と女、どちらに産まれたかったのですか？」

どっちか、というのは幼いころ、考えてみた。だがよくよく考えてみればそういう問題ではなくて後継の男児であるべきなのである。しかし、いつまで経っても膨らむことのない胸に安堵しながらもひどくがっかりしたのも事実だった。

「難しいね」

珍しく齒切れの悪い爰に柚凜が目を丸くする。

「爰様が答えられないこともありますのねえ。わたくしは爰様が女だったらよかったと思いますの」

そう言つてさっきまでの憂い顔をひっこめ柚凜は少女のような好奇心に満ちた笑顔を見せた。

「だって本当に姉妹になれたかもしれませんのよ。ほら、鴻羽はこの頃よくあなたを見ているでしょう」

いくつになつてこの手の話というのは女にとって楽しいものであるらしい。

「あれは、ワタシが軍にいるのが気に食わない奴がいるからね。ちよつと神経質になつてるだけだよ」

確かに鴻羽の視線はよく感じる。気づいてその表情を盗み見してみると大抵しかめっ面であるし、謹慎が明けて昇格が決まった辺り、つまりは溪雁から暗殺命令が下されたあたりとなれば何を考えているかは予想がつく。

「そうですね。残念だわ。でもね、鴻羽の初恋の人つて叔母様ですよ。きつとあなたが女だったら一目惚れしてますわ」

諦め悪く力説する柚凜の様子にだつたら面白いなあと茶化しながら爰は自分の記憶が曖昧であることに気づいて戸惑う。

視線に気づいたのは昇格より前ではなかっただろうか。そう、謹慎が明けてすぐぐらい。

いや、そんなことはない。後だ。きつとそう。
そうでなければ困る。

そうでない、目の前に敷いたはずの道が歪んでしまいそうだった。

李宋の王都では花が散り始め、紫秦では盛りを迎えるころの夕刻、
鴻羽らは問題なく帰還した。

「……いたのか」

帰りついてまず執務室に向かった鴻羽と媛は久々に顔を合わせた。
お互いにもしかしたらいるかもしれない、来るかもしれないと期
待半分であったのだが実際に顔を見ると妙に気まづくなった。

「先に家に帰らなかったの？」

「軍のほうで気になったから、な。問題はなかったか？」

「なかった。ちょっと西側の国境で揉めたけど出向くほどでもな
かったし、それだけ。そっちも無事終わったみたいでよかったよ」

淡々と述べてお互い交す言葉もなくなり、媛が先に呂淳の所に行
つてくると部屋を出る。

どこか違和感を覚える様子にふたりは自分の態度は不自然だった
だろうかと思う。

そうして胸の内にわだかまりを残しながら、時代の流れに急かさ
れていくように前へと、ただ前へと進んでいく。

白峨^{はくが}五年の夏に紫秦^{ししん}李宋^{いそつう}の連合軍は湍茜^{たんせん}攻めを始めた。

後に秦宗茜^{しんそうせん}の戦い第一次呼ばれるこの戦で連合軍は近年湍茜が侵略した小国の領土であった平野部で衝突した。湍茜の勢いは甚だしく苦戦を強いられたが数において連合軍が優勢ではあったのでどうにか勝利を収め、湍茜の領土を削り取ることに成功した。

「あいかかわらず綺麗なもんだね」

自陣に引き上げて来た鴻羽^{こうう}の姿に湲^{えん}は感心する。

鎧に返り血はあるものの頭から血まみれの者までいる中で見れば汚れていないほうである。しかし、けして怠けていたわけではない。鴻羽はいつも敵隊将へ向かって駆けだす。確かにそれは戦を迅速に終わらせる手立てではあるがあまりにも考えなしの策であり、功に焦りすぎだのと鼻で笑う者もいる。

湲も最初はそんな者たちと同じように何という単純馬鹿だろうかと思っていた。

だが、実際その戦いぶりを見れば文句など何一つ出てこなくなる。自らの足の自由に自在に馬を操り返り血を浴びる間もなく次々と兵を一振りで斬り伏せていく。

それは彼自身が刃のごとく思えるほどだ。

次第に敵兵らは恐れ戦き鴻羽から距離を取り始め、隙が出来る。そうしているうちに味方も後れを取るものかと奮闘する。

そしてあつという間に隊将の首を取ってしまうこともあれば、退かずに群がる敵兵を引き受け味方の通る道をつくることもある。

そうして戦が終わる頃に骸に囲まれて返り血をほとんど浴びることなく馬上にいる様はまさしく軍神で特に若い兵らが崇拜とすら呼べる眼差しを向けるのも納得できる。

特に今回は平野戦でその実力を余すことなく発揮していたので、その名は現丞相の嫡子ということも相まって李宋にも大きく伝わる

だろう。

「障害がないからな。だが、手こずった」

言葉の少ない鴻羽は普段の温和さなど嘘のように鋭く、燃える鋼のようでおもわず見惚れてしまう。

しかし上から下までみつめてきて負傷の度合いを確認してひとり納得したようにうなずくところはいつも通りで涸は自然と口元を緩めてしまった。

「今回は陣営からほとんど出ることがなかったよ。將軍は出たそうにしてたけど。いい年して元気だよなあ。だいたい軍師って出たがらないもんなんだけどね」

紫秦側の総大将は郭將軍である。本来ならば夏將軍の率いる右軍に属する鴻羽らの隊は国に残って王都の護りを務めるはずだが、今回に限っては右軍左軍関係なく選抜された。鴻羽らの第一騎兵隊が選ばれたのは鴻羽の戦力が大きいのもあるが、郭將軍が涸を連れていきたかったというのもある。

「郭將軍は劍の腕もいいからな。一度は手合わせしてみたいな……」
父親ほどではないが郭將軍からはあまり好かれておらずまだ一度も劍を合わさせてもらったことのない鴻羽が重苦しく呟く。

「この戦が終わったら頼んでみれば？　そこまでお前のこと嫌ってるわけじゃないからさ」

劍の実力も、父親とは真逆の裏表のない実直すぎる鴻羽の性格も郭將軍は認めている。だがやはり心情はまだ恨みが深く素直に認めきれてはいない。

彭將軍の死の真相を知らない郭將軍でさえも涸雁のみならずその息子にまで腹をすえかねているのに、自分はなぜこんなにも鴻羽を受け入れてしまっているのだろう。

出会う前はあの涸雁の息子だ、どうせろくなものではないだろうと思っていたが、実際はなんの面白みのない堅物な男で拍子抜けした。

いろいろと便利そうだと近くに置いておいてみれば、自分のこと

を嫌っている癖にやたら口うるさく世話焼きで鬱陶しいぐらいだった。そして自分が半陰陽であることも娼婦まがいなことをしていたことも知っているのになぜか非力な乙女でも庇うような態度を示されるとむずがゆくある。

しかしながら彼の側は居心地がいい。

「なんだ？」

無言で爰に見つめられて鴻羽が身構える。

「お前つてさ、欠点らしい欠点がないのが欠点だよな」

「どつという意味だ？」

「いろいろ面倒くさいってこと。ほら、あっち知り合いだろ。呼んでるよ」

訳が分からないといった顔のまま鴻羽は同輩の呼び掛けに応じて爰から離れていく。

欠点がなさすぎる人間というのは両極端な好意と敵意を抱かれがちだ。

自分は、鴻羽が嫌いではない。

だが、呂淳は彼が大嫌いだ。

この意見の相違は大きすぎる。呂淳に合わせようとしてみるが、彼が鴻羽を嫌いな理由は全部自分が鴻羽を嫌いになれない理由で永遠にこのずれが重なることはなさそうだった。

冬、第二次の戦鬪は敗退で終わったことが紫秦に伝えられる。

郭將軍の事前の忠告も虚しく囿に数隊がかかり谷合で身動きがとれぬうちに大きく痛手を被って連合軍は退却を余儀なくされた。紫秦側は隊将がひとり戦死してその補佐官も重傷、そこに代行として鴻羽と爰があてられるという報告が呂淳の卓の上に広げられている文には書いてあった。

文の送り主は爰である。

報告書が来るときに一緒に爰の自分の近況を伝えこちらの様子を尋ねる文が別にして送られてくる。代行については公の報告書にもあったが、爰の文でもう一度その事実を確認すると一層気分が重たいものになってくる。

あくまで今は代行だが、無事戦を終えられたなら鴻羽はその功績への恩賞としてそのまま隊将となるだろう。自分が許可しなければいいだけの話だが、爰はおそらく鴻羽を昇格させる。

これ以上鴻羽の地位を押し上げてどうなるというのか。

溪雁さえ落ちれば齋家そのものが揺らぐはずだったが、鴻羽はすでに代わりの柱となりかけている。ただ自分の父親の成したことを知ればたやすく地位も何もかも投げ出してしまう性格なので厄介な相手にはならないだろうが政だけでなく軍まで齋家が掌握してしまふのはなんとも不愉快だ。

呂淳は無意識のうちに自らの腕に爪を食い込ませる。布地にじわりと血が滲んできてからようやく痛みに気づいた。最近は一りでいると自分の腕をかきむしってもなかなか気づかない上に回数も多くなってきた気がする。

昔は伯父に詰られたりするたびだったが、この頃は鴻羽の話題が耳に入ったり会話をしたりした後はどうしようもない苛立ちと不安が募ってくる。

もう鴻羽の前で彼を嫌っていないよう取り繕うのにも疲れてきた。大嫌いだと面と向かって言いたいけれど、言えない。

もはやそれは負け惜しみでしかなく惨めなだけだからだ。

いつそのまま戦地で尽きて欲しいと願う一方で、生きて帰ってくるという確信があった。伯父もそう思っているのか戦況に落ち着かない様子ながらも、鴻羽を国へ戻そうとはしていない。

「陛下」

女官が呼んで、なんだと問い返せば柚凜ゆうれんが来ているということだった。

注意を受けて以来たしかに柚凜がここに直接出向いてくることは

減ったことは減ったがいまだに退屈しのぎに月に一度か二度は訪ねてくる。

正直昔からこの人も苦手だ。遠慮した口調なのに言葉は容赦ないところが特に子供心ながらに怖かった。ただ鴻羽が嫌いという共通項だけは少し楽なのでたまに話をきくのはそこまで嫌ではなくなつた。

幾分悩んだうちに呂淳はここに通すよう許可を出した。そして我が物顔で後宮を闊歩してきただろう柚凜はいつもの貞淑で美しい笑顔だった。その裏は他のどんな女よりも恐ろしいことを知っているのを見惚れることはない。

「こんにちは。ちよつと書物を貸してくださる？ 陛下なら変わったものをお持ちで……」

呂淳の腕に滲んでいるものに気づき柚凜が言葉を止める。そうして広げられたままの涸の文に気づいて見てもかまわないかと形だけ問うた。

これは毎回のことでもあるし見られて困るものでもないので許可すると柚凜は淡々とした表情で読み始めた。

「お父様が機嫌が悪そうにしてらっしゃるから旗色が悪いだろうとは思ってましたけれど見事に負け戦になりましたのねえ。ああ、でも鴻羽と涸様に特に怪我はありませんのね。まあ、早い出世だこと」
やはり柚凜も鴻羽の昇格はおもしろくないらしく最後は毒づくような口ぶりだった。

「涸様を鴻羽の下に置いておく必要はもうないのではありませんこと？ あの人はもう彭軍師の孫としてちゃんと認められているのでしょう」

確かに涸はもう郭將軍率いる左軍の主要な役職につけても問題はない。これ以上鴻羽に懐柔されてしまふまでに引き離してしまふほうが得策だがなんかのと理由をつけて涸がうなずかないだろうと思つとまた気が滅入つた。

「……提案は、してみます」

自信など微塵もない声に柚凜が心底嫌そうに顔をしてわざとらしいため息をつく。

「よろしいですこと。この国で一番偉いのはあなたですよ。お父様でも鴻羽でも濼様でもありませんわ。王位はあなただけの絶対的なものでしょう」

ひとつ、ひとつ諭すように言う柚凜に呂淳は頭を振る。

「私の絶対的なものはそんなものではありません」

たったひとりの主君。

誰も知りえない真実と憎しみを共有するそのひとの唯一の忠実な臣下であることが自分の存在意義でもある。

「……そう。あなたにだって大事なものがありませんのね」

興醒めした様子で柚凜がつばやいて、書棚に向かい適当に数冊選別し始める。

「それだけはどんな手を使ってでも護らないといけませんわよ。わたくしにも出来ることがあるなら手伝いますわ。では、これを返しに来るときにまたお話しいたしましょう。あと、どうかご自愛くださいね」

柚凜がいたわるような笑みを残して部屋を後にする。

残された呂淳は濼からの文を丁寧に畳み、小物などを納めている箆笥を開けた。そこにはこれまでの濼の文と共にそれぞれの形見の短刀と腕輪が並んでいる。

誓いは重いけれど、いまの濼と自分の繋がりはこの紙一枚で酷く頼りなく思えて心細い。

けれど自分の味方かは分からないが少なくとも鴻羽を敵視している柚凜が話を聞いてくれるなら少しは不安が和らぐ気がした。

兵の稽古に付き合ったのちついさつきまで見物していた濼の姿はどこにも見当たらなくなっていた。それを探しに自分と濼に与えら

れた天幕に入って、鴻羽の思考は一瞬飛んだ。

白い、女の背中が無防備にそこにあったのだ。

肩口から肩甲骨にかけて走る緋色の線に上半身をはだけている爰だということに気づくと今度はどう反応すべきかうつらえてしまう。男とは明らかに違う背は繊細で白百合のようにすら見える。その胸元にあるべきはずの膨らみはなく途中で成長を止めた少女のようでその裸体を見ることに背徳感を覚えた。

「ああ、ちようどいいや、これ塗って」

しかし当の本人に恥じらいは欠片もないようだった。

「ひとりで出来ないなら医者を呼べ」

果たして爰は自分がどれほど美しいのかわかっているのだろうか。髪がすべて胸元へと流され露わになったそのうなじから匂い立つ色香はすべての視線を絡め取り情動を灯す危うい魅力を秘めている。自覚がないのでなくただ単に警戒心を抱くような相手ではないと思われているのかもしれない。

それは喜ぶべきなのか否かと考えながら鴻羽は表情をこわばらせたまま近づいて差し出された軟膏を手取る。

「出来るけど近くに人がいたら頼んだほうが早いだろ……っ」

先の負け戦で退却中の混戦中に斬りつけられた傷に軟膏を塗りつけてやると爰が肩をすくめる。命にかかわるほどではなかったが痕は残るだろう。その他にもいくつか古い傷痕があつて身寄りを失くした後どんな目にあつてきたかまざまざと思ひ起こさせられる。

出来るだけ傷は増やしたくないのだが戦地に立つことを爰が選ぶ限りは仕方ない。

そう思う一方で寒さなのか痛みなのか微かに背を震わせている様子に異様な高揚感めいたものを覚えてしまう。

「終わったぞ。冷えるから早く着ろ」

早まる鼓動を抑え込んで鴻羽がそう言つと爰は素直に身なりを正して向き直る。

「でもここつてあつたかいよなあ。状況が状況だし雪が降らないの

はありがたいか」

今駐屯地としているのは初めに勝ちとつた湍茜北部の平野である。北部、と言つても大陸全体からみれば南に位置するため雪は滅多に降らない。山はそれよりか降ることはあるが積もるほどではなく雪に道を阻まれることはまづたくと言つていいほどない。

この半年での二戦で両者とも疲弊して兵を動かすことはしばらくできそうになく、今必要なのは李宋からの食糧などの物資が滞りなく届くことだ。

「しかし分かつていても雪が降らないとはなかなか思えないな」

鴻羽にとつて冬とは白いものである。山が白く染まる頃北から吹き込む風が強くなり空は灰色に覆われ数日雪が降り続く。そうして世界は一面真っ白に変わる。

その雪の上に立つ王宮の漆黒の門扉を見上げるのが子供のころから好きだった。

「帰りたくなる？」

「多少はな。母上は風邪をひきやすいから少し心配だ」

「なら文のひとつでも書いてよこしたらいいのに。柚凜には薄情者つて言われてるじゃないか」

報告書を国に送る際兵らは身内への文も一緒に預けることが出来るが、鴻羽はまだ一通も出したことはない。元より文というのは苦手なうえ取りたて書くこともないし、戦況なら丞相である父が報告書でつぶさに知ることが出来る。

「父上や姉上から状況は伝わっているからいいだろう」

姉はいつものように我儘を言つて爰から呂淳にあてた文を盗み見ているようで呂淳からの返信には彼女からの一言が添えられていることが多い。今回はたった三文字、薄情者とだけあった。

爰の負傷を気づかう一言がなくて一瞬首をかしげたが、爰がわざわざ呂淳を不安にさせるようなことを書くはずがないとすぐに思いいった。

「字ぐらいでも見せたほうが喜ぶと思つよ」

「そういつものか？」

「そういつものだよ。離れててもさ、母親って自分の子供のことずつと考えてるものなんだ」

無惨な死を迎えた母を思っているのか、湊の表情は寂しげに翳っている。

それに愛おしさを感じずにはいられず、ふたりきりの空間が居心地悪くなってくる。

「次は、一言でも書くか」

不自然な間をおいたものの、湊はそれには気づかず微笑んだ。

「そうするといい。いい報告になるよう次は勝たないとな」

「ああ。そのためには気を抜くな。最近ひとりで行動しすぎだぞ」
今日もそうだが、この頃、湊が自分の視界にとどまることが少なくなってきた気がする。

「箱入りのお嬢さんじゃないんだから、四六時中見張ってくれなくてもいいよ。自分の身の守り方ぐらい分かってる」

「やんわりと、拒絶された気がした。」

「呂淳から頼まれている。お前の身辺については俺に責任がある」
もはや建前でしかなくなったことを口にする、湊が小さくため息をついて立ち上がった。

「……郭將軍の所行ってくる」

出ていく湊に他に言えることはなく、鴻羽は黙ってひとり取り残されることになった。

目の前で子供が大声で泣き叫んでいた。

その時柚凜はなぜその子供が泣いているのかわからなかったが、掌に熱さを感じてようやく自分がふたつになったばかりの夫の子に手を上げたことに気づいた。

その子が何をしたわけでもなかった。漏れ聞こえる侍女たちの憐憫と嘲笑の入り混じった声が耳について仕方なく苛立っていた。ちよとそこへその子がやってきてまとわりついて来たのが煩わしくて仕方なかったが、叩く気などなかった。

なのに自分の手はその子の白い頬が真っ赤になるほどの平手打ちをくらわせていた。あどけない唇も切れて血が滲みむごたらしい様子に自分がしたこととはにわかには信じられなかった。

泣き声に気づいて慌ててやってきた夫の愛人は我が子をしかと抱きしめて、自分に必死にお許しくださいと謝罪を延べていた。

まだ幼さを残しているというのに母親の顔を持った十七の少女と、新たな命を内包して膨らみ始めたその腹が急に恐ろしくなった。

このままでは自分もつと取り返しをつかないことをしてしまう。そう思つて夫に離縁を申し立てた。斎家の後ろ盾をなくすことに躊躇いはしていたが、こちらに非があるので父は何も言わないと伝えるとすぐにうなずいた。

安心しきつた顔でそれが君のためにもなるなどと言って。

思い出したくもないのに勝手に溢れてくる記憶を踏みつぶすように歩きながら柚凜は王宮の書庫に向かつていく。

雪が解け、今年は戦中のこともあつて宴は行われぬものの各州の長官が王への新年の挨拶に出向いてきていた。その中に別れた夫も当然いた。

顔などもう二度と見ないよう長官らが滞在する場所の反対側をわざわざ遠回りしてきたというのに会ってしまった。

宮殿を見物でもしていたのか少し遠くにその姿が見えて思わず足を止め、そのうちに向こうも気づいたようだが一瞬驚いた顔をしてすぐに顔をそらした。

こんなことなら家にいればよかった。

鴻羽が戦地に行つてからその身を案ずることばかりの母に嫌気がさして鴻羽に文のひとつでもよこせと催促してみれば短いながらもあれから毎回よこすようになった。しかし今度はたった二、三行の内容の代わり映えのない文を毎日のように眺めて鴻羽のことを語る母に身の置き所がなくなつてしまつて出て来てしまつた。

書庫の扉を乱暴に開けると椅子が揺れる音がして柚凜はそちらに足を向けた。

先客がいるなら挨拶ぐらいはしておこうと思つたのだが、そこにいたのが呂淳で柚凜は柳眉を寄せた。

「陛下、こんなところにいらしてよろしいのですか？」

今まさに忙しく各長官と謁見していなければならぬはずである。

「……今日はもう、終わりました」

歯切れの悪い呂淳の言葉に柚凜は呆れかへつた。

かしくかれる、というのが苦手な彼のことだ。どうせ途中で嫌になつて逃げ出したに違いない。そして女官たちのため息の聞こえないここへ逃げ込んだのだろう。

それで時間を持て余した元夫はあんな所をうろついていたのだ。

「ご自由で羨ましい限りですわ」

とびきり厭味つたらしく言うと呂淳が決まり悪そうに肩をすくめた。

「申し訳、ありません」

反射的に口から出てしまったような謝罪の言葉に柚凜は苛立ちを増幅させる。

「あまりそのような調子でいらつしやるとあなたまで爰様に切られ

てしまいますわよ」

鴻羽への文の催促をした後に返ってきた涸の文には鴻羽に自分の護衛は必要ないと書いてくれとの頼みがあった。

呂淳は突然のことに引っかけかりは覚えているものの安心しているようだが、けして涸が口うるさい鴻羽が煩わしくなったということでもないだろう。以前鴻羽とのことをほんの少し煽った時の反応は悪くなかった。意識し初めてのことならいい傾向である。

呂淳を操るには涸は邪魔なのだ。

「……涸が帰ってくる頃までにはもう少ししっかりしたいとは思っています」

まるでしっかりしていない声でそう言う呂淳に袖凜はひとまず怒りをおさめる。

涸が近くにいるならある程度強気にはなれる彼だが、今はこの通りだ。

このまま唯一の拠り所である涸が鴻羽に心を寄せれば孤独も鴻羽への敵意も高まっていくだろう。

そうすれば主導権を握れる。

きつと、父よりも上手く。

花がほころび始めてようやく連合軍側は動くことを決めた。

軍師らが郭將軍の天幕に集まり頭を突き合わせて考えること三日、湍茜の中央である山の裾野に広がる森の中を三手に分かれて進軍していくことになった。それが決まってからも涸は郭將軍の元にとどまり地図を睨んでいた。

「考えても出ぬ時はいったん退け。意固地になるとろくなことがない」

日も暮れ灯した蝋燭が半分になる頃に郭將軍に諭され涸は不満げにうなずく。

「……わかった。ああ、もうなんだろうな。なんかひっかかるんだよなあ」

湍茜が動かないのは護りに入ったとみればいいのだが、ただどうしても誘い込まれている気がしてしまう。しかし、広げた地図の湍茜王都を囲む山々に関してはそこに山があるということしかわからず手がかりにならない。

「じゃあ、おやすみ」

湍は大人しく天幕を出るが、やはり気になって篝火にぼんやり浮かぶ地面もろくに見ずに歩いていると近くに人の気配がないことに気づいて眉宇を曇らせる。

近くにいくつも天幕は張られているが皆中央あたりで集まっていられるらしく騒がしい音が少し離れたところでしている。戻ってきた酔っ払いにでもからまれてもしたら面倒だと足を速めると、大きな影が進行方向の天幕の脇から伸びているのを見つけて湍は腰につけている短刀の柄を握る。

だが、そこから現れたのは鴻羽で張り詰めていたものは一気に緩んだ。

「こんなとこで何してるの？」

訊いても返事はなかった。近づくとくると鴻羽は背を翻してきつかり三步距離を持って歩き始める。

どうせ遅いので様子を見に来たのだろう。

「だからさ、ワタシの護衛はもういいって呂淳からの文にもあっただろう」

文が来てから鴻羽はいつもより無口になった。こっちは態度を崩さないようにしているというのにそれではやりづらくなってしまう。何も考えずに呂淳の言うとおりにしてくれればいいのに。

「……命令は関係ない。俺が気になったから来ただけだ」

投げ捨てるような言葉だったが、それを全部胸の奥で受け止めてしまった湍は足を止めかけた。

「……ちよっと引っかかることがあったから將軍と一緒に考えてた」

会話をわざとずらして爰は鴻羽の背中を追う。

「答は出たのか？」

空けた距離はそのまま鴻羽が先ほどの言葉など忘れたように応じる。

「いや、見つからないんだよな、これが」

それから会話はいつもの調子に戻った。ただ爰の心中は穏やかではなかった。

鴻羽の気づかいには胸が締めつけられる。それがなんと感情に起因しているのかもう分かってしまっている。

「あ……」

どうしたものかと空を振り仰ぐと水滴が額に落ちてきた。雨だ。

この時期になるとこのあたりは雨が增えるらしくここ数日はまともに青空を見ていない。

早く戻るぞと鴻羽に急かされて爰は仕方なく歩調を速めて鴻羽と並んだ。

湍茜の麓を流れる川面にはいくつもの死体が浮かんでいた。夕映えに彩られた川に赤褐色の湍茜兵の甲冑が混ざり血の川のように見える。ただ実際はほとんどが溺死のため血は流れていないに等しい。「これは、はまっていたらまずかつたな」

山を下りる途中木々の隙間からその光景が見えて鴻羽は顔をしかめる。

行軍し始めてすぐに爰がここ数日の雨の多さのわりに川の水が少ないことに気づいたことが幸いした。すぐに残りふたつの別部隊に伝令を飛ばし上流に行けば案の定川の流れが堰きとめられ、そこに少数の敵部隊がいた。

それから堰を奪い残りの二部隊で逆に湍茜の兵を川へと両側から囲い込むように追い込んで合図の笛の音と共に堰を切った。

そうして穏やかに流れていた小川は瞬く間に大河へと変貌した。気づかなければこちらが壊滅していたことは一目瞭然である。

川に浮かぶのが自分だったのかもしれないという恐怖と勝利の喜びのないまぜになったざわめきが周りの兵らからも上がっている。

「思ってたより凄いな。ここまで一気に片がつくとは思わなかったよ」

予想を上回る状態に援も半ば呆けたように言っている。

「そうだな。もうこれ以上の兵力は向こうにもないだろう」

「けど、残り少なくともやっぱり中央は難所だよ。まあ、これで五行ぐらいは書けるだろ」

なんのこともかすぐに分からなかったが母への文ということだと分かって鴻羽はそれはどうだろうと思う。さすがにこんな凄惨な戦場の様子を書くわけにはいかないものでいつもの内容に怪我なく勝利出来たことを書き添えるぐらいしかない気がする。

「……努力してみる」

重々しく返答すると戦の緊張の残っている援の口元が緩んだ。

あの夜以降、自分たちのぎこちない空気は元に戻った。本当に、何事もなかったようである。

名目を取り上げられて悩んだ拳句に出した答えを援がどう受け止めたかは知らない。

しかし自分が援のことを護りたいという意味は伝わっているようで側にいることを拒絶されることはなくなった。

まだ戦が続く以上はお互いわだかまりがないほうがいい。

それでいいのだけだ。

仲間の称賛に得意げに笑って見せる援の横顔を眺め、鴻羽は満ち足りていない自分の胸の内に苦悶の表情を浮かべるのだった。

第三次の戦の後、湍茜の鉦夫や鍛冶職人を中心に残った国民の半

数近くが山を下り降伏した。彼らは皆、山の意味に従うと口にしていた。

国では戦が始まる前より王家への不信があつたようだ。現王は山を下り交易に利便がいい土地に遷都しようと考えていた。それに加え二次の戦の後、山を信仰し山神の花嫁として選抜された巫女が懐妊し第一王子と恋仲であることが露見して不信感は募つていた。

そして国民の半数が王家を見限る決定打となつたのが先の戦での水攻めの失敗だ。

山は湍茜の王家ではなく連合軍に味方したと受け取り巫女を穢し山を怒らせた王家に殉じるのを拒んだ者は山を下つた。

残つた民は周囲の山間に点在する集落から中央の谷間にある王都に移り籠つているらしい。連合軍は彼らに降服を求めるが応じず攻め落とすことを決意した。

ここまででふたつき。

入り組んだ地形ゆえに連合軍も数が多いとはいえそう安易に近づけない。さすがに木々が群れ、凹凸の激しい地面では馬も入れないので騎兵部隊も歩兵として進軍していく。

空になつた五つの集落に中央を取り囲むように陣を張り動き出して三日、小競り合いをしながらじわじわと推し進めていき、ついには湍茜の残つた兵や民が武器を持ち向かってきた。

「斎隊将、湍茜国第一王子討ちとりました！」

怪我人らと共に陣に残っている湊の元に鴻羽が敵將を破つたことを伝令が伝える。

他の部隊もおそらく決着がつくころだろうとよんで湊は強張つていた肩の力をほんの少しだけ抜いた。

ここまでくればあとは王の首が上がるのを待つだけだろう。

他の兵らもそう思ったようで心なしか陣の緊張は緩んでいる。だが。

吼えるような怒号が背後でしたかと思うと敵兵が雪崩こんでくる。周りの兵が一気に浮足立つのに湊は舌打ちして片手で持てる細身の

剣を抜く。

「怯むなっ！！ 数はこちらが上だ、勝つことだけを考えて戦え！」
 湊の声が響いて兵らが冷静さを取り戻し始めた。

向こうはもうどれだけこちらを道連れに出来るかしか考えていないだろう。最期を覚悟した兵というのは手強い。

少しでも弱気になれば気迫で負ける。

湊は斬りかかってくる兵の剣を受けそのまま足をかける。剣は得意ではないが喧嘩ならそれなりにこなしてきた。

普通の男にはとうてい力では勝てないので空いた手や足で補うしかない。とはひとまずの形はつけてくれている鴻羽の言である。

ひとり斬り倒し、湊はざっと辺りを見回し状況を確認する。

手勢は予想通りこちらよりは少ないだろう。ただ怪我人が自軍には多い。幸い自力で立ってどうにかは戦えているようだが、敵兵の勢いに押され気味だ。

鴻羽達が戻ってくるまでに片をつけられるかどうかは五分五分だろう。

「彭殿！」

がむしゃらに向かってくる敵の切っ先に集中しているうちに湊は自分がもう後退できないことに気づいた。

比較的平らな地面に家が密集し、その周りは大なり小なり段差があつて小さな段差の下は大抵畑になっている。そして湊が追い詰められた足元には緩やかだが深い傾斜があつてその先は森だ。

味方が湊を追い詰めた敵兵を背後から斬り伏せ、湊はそのまま前へ足を踏み出す。敵兵が最後のあがきとぶつかってくる。

しまったと思う間もなく湊はそのまま突き落とされ下へと転がり落ちて行った。

湊茜の王子を討ち取った鴻羽は頬を流れる血を拭う。

まだ十七、八だろう王子の絶える瞬間まで弱ることのなかった突き刺すような瞳に一瞬動きを止められ、喉に向けられた切先を交わり損ねることはしなかったものの頬を浅く裂かれた。

巫女と恋仲になったというのはこの青年だろう。息絶える瞬間につぶやいたのはまだ見ぬ我が子を腹に宿す恋人の名かもしれない。

呼吸をひとつはいて地に落ちていた視線を上げればいくつもの死体が自分を取り囲むようにしてあった。

道を阻むものを切り捨てる決意を。

そして失う覚悟をしる。

初陣で誰もが聞かされる言葉である。そして戦を終えてようやくその言葉を噛みしめる。

鴻羽は剣を収めると視線を上げ死者に背を向ける。

死体を踏み越え自軍と共に陣に引き返す途中、伝令が大慌てで駆けてきた。その様子で非常事態ということを感じ緊張が走る。

「奇襲です！」

その言葉と共に疲弊した体を鞭打って全員が駆け出した。

そこそこの人数はいるが、怪我人が多いことが気がかりだ。少しずつ、音が近づいてくる。

辿りつくと、戦闘はほとんど終わりかけていた。

残った敵を斬り伏せ、合流して鴻羽はすぐに援の姿が見えないことに気づいた。倒れ伏す死体の甲冑は赤褐色で自軍の者は見当たらない。

「彭はどうした」

負傷者は多いもののどうにか全員生き残っているのを確認したのち、唯一姿の見えない援について問うとひとりが斜面を指差した。

「あそこから落ちたのですが……」

鴻羽は斜面に近づき下を見下ろす。よほど下手をしない限り死にはしないだろう。

「落ちたのはいつだ？」

伝令がきた後すぐとの答にますます鴻羽の表情は険しくなってい

く。

それなりに時間が経っているのに上がってくる気配がまるでないのは妙だ。嫌な予感ばかりがじわじわと足元から這い上がってくる。

「どう、しましよ」

「……少し、待とう」

どのみちここでいったん休息を取らねば兵は動けない。怪我人の手当ても必要でもあるし、そのうちに自力で戻ってくるだろう。

そう自分に言い聞かせて鴻羽はずっと斜面を見つめ続ける。

しかしいつまで経っても上がってくるものはおらず、強い日差しが弱り始めたところに郭將軍が王を破った報せが届いても足音すら聞こえなかった。

「すぐに戻る」

「隊将！」

本来なら自分のやることではないが、鴻羽は兵の制止の声を聞く前に斜面を降りていた。

待っていらなかった。

焦る心に冷静さはすでに揺らいでしまっている。援を失うかもしれないかと思うと心の臓は鼓動を速めて冷たい汗がにじむ。

その時の鴻羽の心に覚悟などというものは微塵もなかった。

爰は空を見上げ太陽を頼りに道を進む。

転がり落ちた場所のすぐ近くには運悪く残党がいた。気づかれて剣は持ったままだったので応戦するつもりだったが、ふたりいて正面からぶつかって勝てそうになく分散させようと動いているうちに森に入り込んでしまった。

そう長いこといたわけでもないのに落ちてきたところは近いだろうが、どこから来たか分からなくなってしまうて少し焦った。

頼るものは動く太陽しかなく不安だが、そう道は外れていないはずだ。

くたびれた足をせつについて歩きながら爰は薄暗い森と孤独に気持ち沈ませていく。

襲撃を受けて自分を裏手から逃がしあとで追いかけると言った祖父と母を漆黒の森の中で待っていた。

言われた通り窪みに身をひそめて三日過ごしたが、誰も迎えには来てくれなかった。

そして四日目の日に森を出て近くの村に立ち寄った時に行商人が客と立ち話をしているのに耳を澄ましふたりが殺されたことを知った。貯蔵庫を護るようにして果てていて、よほど大事なものを隠し持っていたのだろうと貯蔵庫の中身を予想する男の言葉を聞きながら声を押し殺して泣いた。

爰はさらさらと聞こえる水の音に足を止め、ため息をつく。

来る途中沢など見なかったから道を間違ったのだろう。水を得られる沢まで行ってこれ以上は下手に動かず救援を待とうと爰は少し歩き、見えた浅い水面に滑落した際捻った片足をつける。

見下ろした水面に映る自分は心細そうだった。

ひとりになつたあの日、自分はずっとこんな顔をしていたのかも

しない。

追手がいつ来るかもしれない数日は脅えていたが、十一の子供がひとりで生きていけるはずもないとでも考えたのか追手はかからなかった。それに生き延びたとしても孤児が王宮に近づけるはずもないのだ。

たったひとつの後ろ盾を失くした自分はただの子供だった。

どうあっても生き延びて齋家への報復をせよと祖父は言ったが、今から思っても無茶な話だ。

兵もない将がひとりで勝つなど無理だということは名高い彭軍師ならば分かりきっているはずだっただろうに。

それでもとにかくまずは生きていかねばならないと商家の奉公人になった。読み書きができる自分はすぐに雇い入れてもらい、一年後、山をひとつ越えた先の都市まちに行く商隊を手伝わされることになった。

その途中、盗賊に襲われた。

護衛はついていたがやられてしまい、一緒にいた者たちも殺されここまでかと思つたが殺されはしなかった。

盗賊たちの話す様子からすると奴隷として売られるようだった。そして仲間の死体を眺めながら死ぬよりはましだ、どうせなら中央に近い貴族に売られたほうがいいなどとぼんやりと考えていた。

盗賊らの野営地に連れて行かれる途中殺された仲間のことを思つて涙が滲んだが溢れはしなかった。

そして野営地につくと男たちはじつくりと自分を見分し始めた。男たちの言葉がどんどん下卑たものになっていくのに血の気が引いた。

その瞬間まで犯されるのは大人の女だけで、自分には関係ないことと思つていたのだ。

抵抗する間もなく押し倒され、服を剥がれた。

半端な体を人目にさらすのは屈辱だった。

それ以上に半陰陽の体を面白がる男たちの言葉や皮膚に触れる手

がたまらなく嫌でこのまま辱めを受けるぐらいなら死んだほうがましだと舌を嚙もつとした。

その瞬間、祖父と母の顔がよぎったのだ。ふたりのためにもこのまま何もなせずに死んではならない。そう思い、出しかけた舌を引つ込めて歯を食いしばった。

あれから何度歯を食いしばったことだろう。盗賊らに奴隷でなく娼婦として貴族らに体を売らされ、ときに気まぐれにいたぶられながらも屈辱や痛みを全て斎溪雁への憎しみに変えて生きてきた。

「日暮れまでに見つけてもらえるとありがたいんだけどなあ」
弱っていく陽光に爰は呑気につぶやく。

ここまでくれば自分の運の強さを信じていた。そうやすやすとは死にはしない。

でも、夜は嫌なことをたくさん思い出しそうだからこんなところにひとりでいたくない。
腰を下ろして膝を抱え少ししたところ、土を踏む音にさて敵か味方かと爰は水面に落としていた視線をあげる。

そうして、苦笑した。
「隊将殿のやることじゃないな」
言いながらも誰が迎えに来るかは予想していた。

鴻羽はいつも自分を探しに来る。初陣のときから、ずっと。
「ざっくりやられてるなあ。そんなに手強かった？」

無言で近づいてくる鴻羽の顔にある傷は残りそうでもつたいないと思った。距離も詰まってきたので立ち止まるうとした爰だが、その前に止められてしまう。

鴻羽に抱きすくめられたのだ。
力は強いうえに鎧越しなものだから痛かった。
だがそれ以上に胸が苦しかった。

そうだ、真つ暗な森でひとりでいた頃もこうしてもう一度母に抱きしめてもらえるのを待っていたのだ。

「……お前は どうして いつもひとり で消えるんだ」

耳元にかかる憔悴した声が胸の奥、ずっと乾いて枯れ果てていた場所に沁み渡っていく。

「今回は好きで消えたんじゃないよ」

鴻羽の力が緩んでも爰は大きな体押し のけようとはしなかった。

いや、出来なかった。

道を阻むものは迷いなく切り捨てると何度も言われて、そして何度も切り捨ててきた。自尊心ですら、下層で生きていくのには邪魔で切り捨てて自ら腰帯を解くこともためらわずにここまで生きてきたのに。

爰はもはや寸分も動けなくなっていた。

一晚を陣で過ごしたのち、湍茜の王都に李宋の兵が残り一部の李宋兵と紫秦の軍は山を下った。

これから湍茜を支配するのは李宋である。その代わりに軍資金の大半を李宋が持ち、一定量の鉄を破格の値段で譲ることを約束している。そしてこれからも戦あらば両国手を取り合うことになる。

実際この後いくつも奪い取った領土を李宋と紫秦が分け合いそれぞれ繁栄していきやがては蒼魏ソウイも同盟に加わる。そしてこの三国によつて今は百近くの国がひしめく大陸東部はまとめ上げられていくわけだが、それはずいぶん先の話である。

紫秦軍は山を下ったのち駐屯地に戻り居残りの兵らと合流した。

そしてその晩は宴となった。兵らは死者に弔いの杯を掲げ、勝利を呑み干す。

「ほら、呑まぬか。酒が怖くてどうする」

赤ら顔の郭將軍に杯を進められて鴻羽はたじろいだ。しかし断るような真似もできずに覚悟を決めて一気にあおる。

舌と喉を焼く感覚に顔をしかめたが、むせるといふ醜態だけはさ

らさずにすんだ。

横ではらはらと見ていた部下がすかさず水の入った杯を渡してくれたので鴻羽はありがたくそれをいただく。

酔っている郭將軍は杯の中身が酒だと思っただけらしくいけるじゃないかと上機嫌で笑っていた。

「悪い」

これ以上は無理だと馴染んだ部下が判断して郭將軍の酌をし、その際にその場から逃げさせてもらった鴻羽は自分の天幕に戻ることにした。

その際、爰の居場所を確認した。彭門下生の集団で呑み比べをしているらしくすでにその周りでは数人潰れている。爰は朝まで呑んでもけろりとしているようなざるなので問題ないだろう。

今日はほとんど爰と言葉を交わしていない。

無事でいた爰を思わず抱きしめてしまっただけからは爰のほうも口数が少なくなり、ほんのわずかな正常な関係はまたぎこちないものに変わった。

もう自分の気持ちには気づかれていることには違いない。

天幕に戻った鴻羽は布地から透ける篝火の光を頼りに寢所に向かう。

軽い酔いに思考が回らず深く考えるのはよして寝ようかと敷布に腰を下ろしたところで爰が戻ってきた。

「大丈夫？」

衝立の向こうから顔をのぞかせる爰は手には水を持っていて、鴻羽にそれを差し出した。

「どうやら呑まされているのには気づいていたらしい。」

気づかってくれるのはありがたいが、今はあまりふたりきりにはなりたくなかった。

「少し酔ったぐらいだ」

「本当に弱いよな。あんなの舐めたぐらいだったのに」

「すぐ側に腰を下ろした爰の口元にかすかに笑みが浮かぶ。」

二十をすぎても爰の笑顔はいつまでも少年のように無邪気のように見えて、仄かに甘い香りが漂う。

これだから困るのだ。

視線が絡んで、沈黙がおりる。

居心地悪そうにしながらも動かない爰の姿は乏しい明りのせいで輪郭が臃げだった。すでに髪が溶け込んでいる闇にその姿が吞まれていきそうに鴻羽は思わずその頬に手を伸べた。

指先に絹糸よりも繊細な黒髪の感触がしてそれを梳くように下へと手を滑らす。やがて瀟洒な線を描く顎がかすめて手を止めた。

顎を持ち上げてその顔を真正面に見る。

眼前にある存在の全てが欲しくてたまらなくなった。

「鴻羽……」

戸惑い自分の名を呼ぶ朱唇を己の唇で塞ぐ。

交わった呼吸の甘さは僅かな理性をかき消すには十分だった。細い腰に腕を回し引き寄せ唇の奥まで求める。

爰の手が肩に触れて拒まれるかと思ったがそのまま細腕が首に絡められた。

お互い待っていたのかもしれない。

枷が外れるこの瞬間を。

幾度も唇を重ね舌を纏れあわすうちにふたりの体が褥に沈んだ。

舌先に触れ合わせたまま薄く瞳を開いて視線を絡める。

求めるものは同じだった。

宴の喧騒は遙か遠く、耳奥を満たすのは互いの熱を孕んだ吐息と蜜のかかった睦言。

すべてを飲み込む熱に溺れ、ふたりは共に引き返せない夜を越えた。

溪雁の叱責は声こそ荒げないが言葉は容赦なく心を引き裂いてきて、呂淳は身をすくめる。

自分が内政に口出しして他の官吏が褒めると途端に伯父は機嫌が悪くなる。今日は西部の治水工事についての議題で意見が食い違い少し揉めた。

普段なら溪雁の眉根が寄り眼光が鈍い光を湛える頃には怖気づく呂淳だったが、今日はほんの少し強気だった。それも爰の帰国が近づいてきているからである。

一応は溪雁の意見にまとまったが、終わった後はいつものように執務が行われている宮の奥まった小部屋での説教が始まった。

「足りない頭で下らぬことを言つて政務の邪魔をするな」

それを皮切りにいかに呂淳が愚鈍で、浅慮な王であるかをくどくどと溪雁は説いた。

それに呂淳は自分の非力さを思い知らされ、ときに鴻羽や死んだ兄のことも引き合いに出されては比べられる。

そして父王のことに触れられた時に唇をかんだ。

「あの方は自分の向き不向きというものを重々知っておられて、出来ぬことは素直に周りにさせていた。少し褒めそやかされた程度で出来ると思ひこむな。お前は血統を守るだけでいい」

血統、とはなんとも白々しいものだ。

「王家の血筋など、とうに絶えているでしょう」

震える声で呂淳は言った。

この十数年、一度たりともこのこと口にしてこなかった。けれどももうどうでもいい気がした。

爰はこの戦で軍での地位を確立する。そして伯父の足元を崩す計略は大きく動き出すだろう。そうすれば自分は王である必要はなくなる。

爰は自分をそのまま玉座につけるつもりだろうがもうたくさんだった。

どこか遠くで身分もなく生きていきたい。

尚書らの顔色をうかがいながら言葉を紡ぎ、失敗すれば後宮で女官たちの嘲るような嘆息を聞く日々は苦しいばかりだ。

何より爰が期待するような人間になれないのが辛い。

爰はろくに何も出来ていない自分に大丈夫、十分やってくれていると言って責め立てずにいてくれる。

けれどそれでは駄目なことは自分でもよくわかっているから自身に失望する。

「……やはり、あの彭家の者にも入れ知恵されたか」

伯父に動じた様子はなかった。これまでの自分と爰との関係を見ていればたやすく想像がつくことだろう。

「いいえ、母上です」

今度は明瞭に呂淳が答えると溪雁の表情が険しくなった。

「お前はただ現状から逃げたいだけだ。下らぬ妄言などやめて大人しく私の言うことに従ってればいい」

あくまで認めず溪雁がぬけぬけとそう言つてのけるのに呂淳の頭に血がのぼった。

「この現状をつくつたのはあなたではないですか！ 兄上を殺してまで私を王位につけたのはあなただ。なぜ母上まで殺したのですか、なぜ彭軍師や本当の母上を殺してしまったのですか！！」

ずっとためていた思いをぶちまけると頬に激しい痛みが走った。

衝撃で切れたらしく鉄錆の味が口内に広がる。

どやされることは多くあっても、はたかれたのは初めてだった。

「ついに気が触れたか！ 次にそんな世迷言を口走つたなら永久に後宮の奥から出られぬもと思えっ！」

啖呵を切つた溪雁の憎々しげな瞳から呂淳は視線を外さなかった。

無言の睨みあいから数秒の後、部屋の扉が開かれた。

どちらかが退いたわけではない。

「お父様、もうそのあたりでおよしになったほうがよろしいですよ」

何食わぬ顔をして柚凜が入ってきた。

これには両者とも唾然とした。

「どこから聞いていた」

父親に睨みつけられても柚凜は穏やかに微笑んだままだった。

「血統を守る、というところかしら。陛下がまた説教部屋に連れて行かれたと聞いたから助けて差し上げようと思ったのですけど、面白そうな話をしていたのでつい聞きいってしまいましたって入るのが遅くなってしまいましたの。まさかお父様が陛下に手を上げるような真似をするなんて思いもしませんでしたわ」

そして柚凜は呂淳の頬の赤みに申し訳ありませんと苦渋の顔を見せる。

「ただの妄言だ。忘れる」

「妄言、というには媛様は叔母様に似すぎていますわ。大丈夫、わたくし誰にも言いませんから。その代わり陛下の手当てをさせていただきますだけですか？」

やんわりと問いかけながらも柚凜の口調には有無を言わせぬものがあった。

好きにしろ、と溪雁が言って呂淳は戸惑った。

はたして、この人についていってしまっていていいものかどうか。しかし今は自分に選択肢はないようだった。

父と呂淳の話に聞き耳を立て、その内容に混乱した。そして必死に頭の中で整理をつけているうちに嫌な、音がした。

その瞬間頭の中で子供の泣き声が響いて足がすくんだ。深呼吸ひとつすると頭の中の音はおさまり目の前の扉を開いて見えた呂淳の姿がどうしようもなく憐れなものに思えた。

自分が手を上げてしまった子供のように庇ってくれる者は今、誰もいないのだ。

隙だらけでつけいるにはちょうどいい。

「お父様も本当にひどいことをなさいますわ」

後宮の奥、呂淳の私室で手当てを終えた柚凜は顔をしかめる。

「姉上……」

呂淳は脅えた瞳で自分を見ていた。秘密を知られてしまったことがとても恐ろしいらしい。

「わたくし、鴻羽にも言いませんわよ。出来ることならあなたに手を貸したいと思っていますの。お話してくださいさる？」

呂淳は最初は戸惑っていたが、やがてぼつりぼつりと語り始めた。柚凜はすました顔で聞きながらようやく見えた真実に内心はひどく驚いていた。

父の行き過ぎた行為はもちろん、ここまで這い上がってきた媛の強運も驚嘆するしかない。ここまでくれば天の采配とすらよべるだろう。

「媛様は苦勞なさったのね。それであの方を玉座に戻す気なの？」

それは無謀と思われた。世継ぎ問題で確実に揉めるだろうし、丞相の犯した罪に王宮は大騒ぎになる。

「彭軍師……、私の祖父は媛が先々代の王陛下の影響の強い軍内において玉座にふさわしいものを見つけ譲位することを望んでいたそうです」

「そうですね。でも、今軍でその資質があるのは鴻羽でしょう」

気に食わないことだが、鴻羽が才覚もあれば産まれつき人を惹きつけるようなものを持っているのは認めざるを得ない。

鴻羽が王位を引き継ぐとなれば尚書らは歓待するであろうし、軍にも角が立たず丸く収まるだろう。

しかしそれでは齋家が栄華を極めてしまう。

「媛は、私をそのままに玉座においておくつもりの方です……」
呂淳がうつむいて膝の上に置いてある拳を握りしめる。王位を得

られるというのに何とも不服そうだった。

確かにこの性格ではただの重荷ではあるうが。

「せっかくだから頂いてしまえばよろしいのよ。玉座なんて欲しくて手に入るものでもありませんし。あとはお父様の周りが厄介だけれど、爰様ならどうにかできるでしょう」

呂淳の表情は暗いままで、柚凜は苛立たしげに組んだ腕を指でたたく。

「あなたはなにが欲しいのですか？」

長い、長い沈黙が横たわる。

開け放たれたままの窓から近づいてくる冬を匂わせる冷えた風が吹き込んできて時が凍りついていく。

「……爰を失望させないような人間になりたいのです」

そこにそつと呂淳が言葉を吐き出した。緩やかに時を溶かしていく熱を感じ、柚凜は目を細める。

これは忠心から出た言葉ではないだろう。なんともいじらしいものである。

「それは、あなた次第でどうにでもなりますわ。そうだわ。爰様にはわたくしに秘密が漏れたことを黙っていたほうがいいかもしれませんわね。ほら、あの方は少し鴻羽に甘いでしょう」

鴻羽に対することは口から出まかせだったが呂淳の表情を見れば外れていないようだ。

「……姉上は、齋家がどうなってもよろしいのですか？」

どうでもいいわと柚凜は笑ってみせる。

「だってお父様のことも鴻羽のことが大嫌いなんですもの」

そう言った瞬間、今までうつむいていた呂淳が顔を上げて確実に自分のほうへと引き込めたと柚凜は確信する。

予期せぬ真実を手に入れたが、これはむしろ追い風だ。

新たに手に入れた駒をどう動かすか、それを考えるととても楽しかった

なんとなしに見上げた空はどこまでも高く、薄氷に似た冷たさを感じる淡い青色が広がっていた。

「向こうはそろそろ雪降ってるかなあ」

爰はつぶやくように隣の鴻羽に問うた。

紫秦軍は湖の最北端辺りで足を休めていた。李宋と紫秦の国境はもう間近で、まだ息が白むほどではないが肌を撫ぜる風は凍てついていて兵らは郷愁を煽られていた。

「山は降っているかもしれないな。帰りつくまでは積もらないでほしいものだな」

そうだね、と返事をしながら爰はいつたい自分はなにをしているんだろうと自問する。

あの夜、鴻羽を拒もうと思えば出来たはずだった。でも、そのつもりはなかった。ひとりになった鴻羽を追いかけたときにはきつと何が起こってもいいと思っていた。多少は酒のせいもあるが。

「……帰るんだな」

ぼつりと複雑な色を宿して落とされる鴻羽の言葉に爰は瞳を半ば伏せる。

鴻羽が気にしているのは呂淳のことだろう。いろいろと勘違いしているようだが、当たらずも遠からずといったところだ。

「全部なかったことにしたっていいよ」

どうせこのまま続けられる恋ではない。終わらせるなら早いほうがいいだろう。

「それはできない」

視線を遠くへ投げたまま、鴻羽が爰の手を取る。

その大きな手が暖かくてどうしようもなく切なく、握り返して爰は鴻羽の肩にもたれかかるようにして寄り添った。

もう少しだけ。

あと、もう少しだけ。

人しれぬ場所で密やかに寄り添いあつたりの影を映す瑠璃色の
水面はゆらゆらと頼りなく揺れていた。

紫秦軍が帰国して三日になる頃には王都はすっかり雪に包まれていた。

「熱は下がった?」

ひんやりした爰の手が額に触れて、寝台で背を丸めている呂淳はうなずいた。

自分で思った以上にこの二年近くの爰の不在に気が張り詰めていたようで顔を合わせた翌日には発熱して寝込んでしまっていた。

帰ってそうそう心配をかけている自分に嫌気がする。

「……すまない」

ぼそりとつぶやけば肩をぽんぽんと優しく叩かれた。よく母がしてくれたことだ。

「別に、謝ることじゃないよ。しばらくは呂淳も休んでるといい。ひとりで大変だったろうし」

いつもと変わらず優しい爰の態度に呂淳は戸惑う。

本当にこのまま柚凜に秘密が知れたことを言わずにいていいものか。

「爰……」

言い淀んで、呂淳は柚凜に言われたことを思い出し後に続ける言葉をおそろおそろ取ってみる。

「もう、補佐官ではなく隊将にならないか? 左軍の隊将なら郭將軍の元だから、そのほうがいいだろう」

先の戦で重傷を負った隊将付きの補佐官も年齢もあって隠居を決めた。このまま隊将は鴻羽になり、その補佐官に引き続き爰がつくことはもう決まっているが正式には年が明けてからの任命になる。

それまでにまだ時間も十二分あるので調整は可能だ。

「ああ、でも。空気が、ないからさ。それまで鴻羽の補佐官でいい」

わずかに爰の瞳が揺らいだのを見て呂淳は柚凜に知られたことを隠して置いておくことにした。

柚凜は秘密が漏れたことを告げるなら、爰が戻ってきて鴻羽とは別の隊に入ろうとしないかどうか確認してから自分で決めるといいと言った。

自分の判断はたぶん間違っていない。

でもそれは酷く虚しく思えた。

後宮へと続く漆黒の扉が開かれると懐かしい脂粉の香りがした。

鴻羽は柚凜と共に呂淳の見舞いに来ていた。

帰国して四日目。十日ほど体を休めるよう休暇を与えられたはいが相次ぐ縁談話に辟易していたところどうせだから一緒に行こうと柚凜が誘ってきたのだ。

男子禁制とはいえ、従兄が見舞いに行くぐらいなら何の問題はない。

しかし後宮に入るのに鴻羽は抵抗があった。なぜだかは自分でも分からないが、足を踏み入れることに恐れがあった。

それに爰とのことで呂淳に会うのは後ろめたかった。しかし母が縁談を通り越して孫の話までするようになっていたのにも疲れていたところへ柚凜に強引に押し切られ、見舞いぐらいはと渋々うなずいた。

わずかばかり爰の顔が見られるかもしれないという期待もあった。中に進めば香の匂いも混じりこんできてそれらの香りが体中に満ちるにつれてよく遊びに来ていた頃の記憶が鮮明になる。

右に見える廊下の奥へ進んで呂淳に会いに行っていた。時々柚凜も一緒だった。

今向かうのはあまり近づいてはいけなと言われてた正妃と王の私室へ繋がる廊下である。廊下は網の目のようにあちこちに広がって

いてかくれんぼをしていた時にそちらに迷い込んで女官に叱られたこともあった。そうすると今は亡き第一王子、稜明しやうめいが苦笑しながらやってきて女官の説教から逃がしてくれたりもした。

あまり顔を見ることはなかったが、一度会えば脳裏に焼きつくほどの強い印象を残す人だった。早世してしまったことは今でも惜しいことだと思う。

「少しは愛想を振りまいてみたら？」

記憶の中の廊下を歩いていた鴻羽は柚凜の茶化す言葉に我に返る。周りではどこから集まってきたのか若い女官たちがぎゃいぎゃいとはしゃぎながらこちらを見ていた。後宮に王以外の若い男ということ物珍しいのだろう。

「……見舞いに来ただけですから」

それはもちろん本音であるが、不純な動機であるので我ながら言い訳がましいと思う。

「失礼します」

先に柚凜が部屋に入って、後に続いた鴻羽は思わず息を呑んだ。

小さな卓で向かい合って軍盤をしている媛と呂淳が、かつての叔母と呂淳に重なって見えた。

呂淳はいつも叔母の側において本を読んでいたりと、軍盤をしていたりした。父に叱られた後はぐずぐずと泣きながらその胸に甘えていた。しかしながらいつまでもそれで大丈夫だろうかと子供心ながらに心配はしたが、稜明が亡くなったときには甘えている姿を見ることが少なくなった。

それは王位を継ぐ立場を呂淳なりに呑みこんで大人になろうとしているように見えた。

「珍しいね。お前が来るなんてさ。柚凜も久しぶり」

柔らかく溶けるような媛の笑みに鴻羽は強張っていた表情を緩める。

わずか四日ぶりだが、とても長く会えなかった気がするのはこの二年近く毎日共にいたせいもあるのだろう。

「具合はどうだ？」

尋ねると呂淳は大丈夫だとうなずく。実際顔色もよく、体調は本当に回復しているようだった。

そうして女官が足りない椅子と茶を置きに来た頃柚凜の提案で涸と柚凜、鴻羽と呂淳の二組に別れて軍盤をすることになった。

「陛下の足を引っ張らないようにね」

意地悪な笑みを浮かべて柚凜が駒を動かし、鴻羽は無言で慎重に駒を進める。

「戦力的にはこっちが上だな」

涸の言うとおり、柚凜と涸はお互い上手く策を噛み合わせてどんどん駒を奪っていく。

一方鴻羽側は鴻羽が運び損じたのを呂淳がうまく取り戻してという状態で応戦していたが、いかんせん向こうが強く降参する羽目になつてしまった。

「……悪い」

「姉上と涸相手だったら仕方ない。ふたりは相性がいいんだろうな」

「そうだな。すぐくやりやすかつたよ」

「あら、嬉しい。ねえ、次は涸様とふたりだけでやりたいわ。いいでしょう。ふたりともたつぷり涸様をひとり占めしたんだから」

柚凜の我儘に鴻羽が目配せすると呂淳は別にかまわないようだった。

そしてふたりで観戦していたのだが、両者一步も引かない真剣勝負になつてその緊張感に疲れて席を外した。

「なんとというか、すごいな」

柚凜の得意なゆっくりと駒を進めながら相手を絡め取っていく戦法はいつもながらおどろおどろしい。それを上手くかわしじっくり盤を眺める涸の緊張感もただならず、ねっとりとした陰湿な戦いは男として目をそむけたくなる何かがあった。

「ふたりとも、強いからな」

窓辺に立つと会話が途絶えて、呂淳の視線が涸に向いていること

に鴻羽は気づく。

その瞳の切なげな様子は母親への懐古でなく恋情を思わされ罪悪感が胸に広がっていく。

また、自分は呂淳から奪ってしまったのだ。

そう鴻羽は自分の思考に疑念を抱く。なぜまた、なのだろうと。

そのとき陶器の割れる音がして短い悲鳴が上がり鴻羽の脳裏で何かが閃く。

黒い、扉。

開かれ、駆けて。そうして。

逃げ出した。

「ごめんなさい、割ってしまいましたわ」

傍らに置いていた茶杯を落とした柚凜の声に鴻羽は我に返るものもはや何一つ言葉を発せなかった。

柚凜と媛がそれを拾い集めようとしたので呂淳がそれを制止し、音を聞きつけた女官らが来て手早く片付けていく。

「……勝負ありだな。柚凜は敵に回すと面倒だねえ」

盤に向きなおった媛がつぶやく。将は歩兵に追いこまれているようだった。

「あら、本当。媛様に勝つたのは久しぶりですわね」

すこし落ち込んだ様子だった柚凜だったが、それに笑顔を見せた。その傍らで盤を覗く呂淳の顔を鴻羽はまともに見ることができなかった。

叔母が死んだ時、自分は後宮にいた。

なぜなら彼女が殺されると知っていたから。

それはほんの好奇心からだった。

見慣れない客がやってきて挨拶もそこそこに書斎へと父とふたりして籠ったことに秘密の匂いを感じとったのだ。

下働きの者達の目を盗み息を潜めて暗い廊下を歩き、外に聞こえやしないかと思つづぐらいうるさく跳ねる心臓を気にしながら扉にそつと耳をあてた。

やがて漏れ聞こえる言葉を拾い集め繋げていくうちに頭の中が真っ白になった。

先日亡くなつた第一王子の母である清妃せいひを焚きつけ、叔母を毒殺する。五日後には毒は彼女の元にわたりその翌日には実行されるであらう。

聞いたのは間違いなく、そんな内容だつた。

そのあとすぐに自分の部屋に戻つて寝台に潜りこんだが眠れなかつた。

「お前から話とは、珍しいな」

呂淳を見舞つたその日の夕餉の後、鴻羽は溪雁けいがんの書齋を訪ねていた。

父の口から真相を聞きたかつた。

「叔母上を殺したのは第一王子の暗殺の疑いをうやむやにするためですか」

余計な前置きは煩わしく率直に問うと溪雁の眉間に皺が寄り、何を馬鹿なことをと否定される前に鴻羽は言葉を重ねる。

「叔母上が亡くなる前にここで父上が密談をしているのを聞きました」

「……いまごろになつてなぜそんなことを聞きに来た」
思い出したから、それだけのことである。

十一だつた自分は正義感だけで動けるほど子供でなく、もし事が広まれば齋家が、ひいては我が身の立場が危ういということにどうすることも出来ずにいた。結局当日いてもたつてもいられず後宮へと駆けたが遅かつた。

そして忘れることで自分の罪から逃げた。

ずつと忠誠心の後ろで引きずっていた罪悪感の正体はそれだつたのだ。

「思い出した以上は、真実を知りたいと思っただけです。稜明殿下は病死だったのですか？」

あの当時稜明の病死に関しての暗殺疑惑に王宮は落ち着きをなくしていた。それは呂淳の母である苑昭えんしょうの毒殺、首謀者の清妃の自死によって王が心を病み官吏らが固く口を閉ざしたことで終息した。

父の意図したことというなら稜明の死因も疑うべきだろう。

「……病死だ。これ以上は蒸し返すな」

追及を許さぬ溪雁の頑なな態度を鴻羽は肯定と取って顔を歪める。「そこまでせずとも父上は十分に権力を得たでしょう」

呂淳が産まれるより前からすでに内政は父に手によって動いていた。なぜ主君を裏切り妹まで殺したのか自分にはまるで理解できなかった。お前のためだ。血の繋がりがほど確かなものはない。鴻羽、もうこのことは忘れて斎家を盛りたてることだけを考える」

穏やかに諭されながら鴻羽は弱々しく首を横に振る。

「私はそこまでして家を栄えさそうとは思いません」

小さな頃、父は素晴らしい人と周囲の大人たちから聞かされていた。そしてその父が育てた家名を引き継ぐことが自分の誇りでもあった。

あの日に裏側を知ってしまうまでは。

記憶はなくとも父への嫌悪感が残ったままだった。裏を返せばそれは何もできなかった自分への嫌悪感でもあった。

「……何が己のためかよく考えることだ」

それ以上溪雁が口を開く気配もなく、鴻羽も出すべき言葉はなかった。

休暇も残り二日となった経った頃、郭將軍を筆頭とした彭門下生らと今回の戦の軍略を見直す会合に参加したのち爰は呂淳の部屋に

来訪した。

「呂淳、また熱出すよ」

爰は雪の欠片が吹き込んでくるのもかまわず窓を開け放ち外を見ている呂淳の傍らに立つ。

窓を締めて見上げた顔に表情は薄かった。

「鴻羽は母上が殺されたことを知っていた」

すっかり自分の顔を見据えて呂淳が言った。どこか幼子に言い聞かすように丁寧な、そして訓戒を込めて。

すべて聞き終えて爰は戸惑う。驚きはしたが、鴻羽を恨む気持ちはまるで湧いてこなかった。

「お前は、それを聞いてどうしたの？」

「……何も言えなかった」

ぼつりと言葉が落ちる。

「訊きたいことも言いたいことも全部言えなかった。母上のことをたくさん思い出してそのことばかり話した。鴻羽はずっと聞いていて、最後にどうしてほしいと訊かれた」

「どう答えたの？」

「なにももらいない。このまま自分に従ってくればそれでいいと答えた」

それでいいだろう、と呂淳に目で問われて爰はぎこちなく首を縦に振る。

「そうだね。まだ、時期じゃない」

呂淳のほうへと上手く文官らの忠が行かない限りはまだ核心には触れられない。

そのことに安堵している自分が後ろめたく、爰は呂淳から分厚い玻璃の向こうへと視線をそらす。

子供の頃は雪が降る日でも家の中でじっとしていなかった。ただ単に家の外に出るのが好きだった。

外にいと、母が爰と名前と呼んでくれたから。

家の中では母は自分を殿下と呼んだ。仕方ないことだと分かって

はいたが家でも外でも母上と彼女を呼んでいた自分はそれがとても寂しかった。

けれど死んだ夫に似ているんだろうかと呂淳に思いを馳せる母はきつと自分より寂しいのだと思っていたのでその感情を言葉にはしなかった。

貴族の婚姻としては珍しく想い合っていた夫のたったひとつの忘れ形見を手放すことがなければ彼女は幸せだったに違いない。だからいつか王宮に戻る日が来たなら母を真つ先に呂淳に会わせてあげようと思った。

けれどそれは叶わなかった。

ならばせめて呂淳のために母の代わりに出来ることはしようと決めた。

それが自分のために命を散らしたふたりへの、そして偽りの場所押し込められながらも全てを受け入れ忠を尽くしてくれる呂淳へのせめてもの償いのつもりだった。

「……少し安心もした」

穏やかな声に爰は記憶の中から引き上げられる。

「ずっと鴻羽は自分とは全然別の完璧なものだったのがたまらなく嫌だった。だから、ずっと斎家も何も関係なく目の前からいなくなつて欲しかった」

さらさらと水が流れるようにこぼれる言葉は胸にたまる頃にはどろりと淀み粘ついた感情を曝け出してくる。

「でも、爰は私と違って鴻羽に引け目は感じていないし優しい。だから伯父上に恨みは持っていて、何も知らずとも伯父上を間違っていると思っている鴻羽のことは嫌ってないのが分かっていて不安だった」

呂淳と目が合つて、爰はその澄み切った瞳に息を呑んだ。

「鴻羽は自分のために母上を見殺しにした。罰を受けるのは当然なんだ」

だからもう躊躇う必要ないと言う呂淳にはそうだねとうなずくこ

としか出来なかった。

確かに、鴻羽は実母を見殺しにした。それでもまだ彼に愛されていたかと思ってしまうている。

憎しみに食まれていつの間にか大きく穿たれていた胸の空洞は復讐では埋まらないことに気づいてしまったのだ。

何の肩書もなく一個の人間として名前を呼んでもらって、優しく抱きしめられて、そうして女のなりそこないと笑われた体を綺麗だと言って愛してもらって。

それでようやく満たされていく。

主君が敵を恋うなどということを知れば呂淳を失望させるだろう。だからけして知られてはならない。

そう何度も自分に言い聞かせる涙が想いを切り捨ててしまうという考えにいたらない自分自身に気づくことはなかった。

「こつちもそんなに広くないね」

休暇も明け僅かな私物を新たな軍舎の私室に異動させ終わった鴻羽の部屋に爰が顔をのぞかせる。

正式な任命はまだだが、鴻羽には隊将のための軍舎内の小さな邸宅を与えられた。部屋の内訳は応接間、執務室に隊将と補佐官のための私室はあくまで仮眠をとる場所であつて寝台と小振りの卓がひとつあるぐらいでこれまでの私室とかわらない。

そもそも軍舎は王宮内の建物としては質素なのだ。使われている建材は黒檜などの高価なものでない一般的なもの。雨雪を防ぐための雨戸はかろうじてついているものの、明り窓は玻璃ではなく紙が貼られているだけである。

「軍舎の私室はこんなものだろう。寝台があつてひとり寝られるだけで十分だ」

十三から十四までの一年の間、二〇人で雑魚寝していた経験のある鴻羽はしみじみと言う。

限界まで押し込められているものだから必然的に身を寄せ合うことになり夏場など寝苦しくてたまらなかつた。しかしながらその頃の同部屋だつた者達とはいまだに親交があるので悪い思い出だけもない。

「じゃあ、ワタシはたまにこつちで寝ちやいけない？」

爰がどこかあどけない口調で小首をかしげてみせるのに鴻羽は一瞬呆気にとられた。そしてすぐに鼓動はさつきよりも倍の速さで動きだした。

「……うん、ああ。それは、いい」

ときおりみせるこつちいう幼い少女めいた表情かおとそれに反する色香を多分に含んだ仕草にはいまだ慣れずにしどろもどろになつてしま

う。

そんな鴻羽の隠し切れていない動揺を楽しむかのように爰はくすくすと笑いながら戸口から彼の側によりその片腕に抱きつくように身を寄せる。

「今日は帰る？」

甘えた声でじゃれつく爰の細い指は顔をうずめている鴻羽の腕の袖口をきつく握っていた。

「なにかあったのか？」

問いかけながらも鴻羽の頭には呂淳とのがあった。

せめて呂淳には真実を伝えるべきだろうと意を決して再び後宮を訪ねたところ、呂淳は父が叔母まで毒殺したことは気づいていたようで確信が持ててよかったと読み取れぬ表情で言った。

自分がそれを知っていたことに関しては何も言えないような言葉はなかった。

しかしとつとつと語られる叔母の思い出話は自分が奪ってしまったものを目の前に広げられているようで心苦しかった。

世継ぎの問題がある上に自己評価が低すぎる呂淳は爰に想いを告げることすらできないだろう。そこに自分が割り込んでいくことはしてはならないと分かっていた。だがいくら懇切丁寧に説こうと感情に正論は通じなかった。

求めて、受け入れられてもはや手放せなくなっている。

「……郭將軍から来年の夏までには隊將の席が空くだろうから来いって言われたんだ。そうならたぶん一緒にいるのは難しくなってくるだろうし、ね」

心構えていたこととはまるで違うことだったが遠くない先の終わりを仄めかすもので鴻羽はその影を追い払うように爰を抱きすくめた。

「別に全く会えなくなるわけじゃないだろ。会う時間が減ったからと言って俺の気持ちは変わらない」

「そうだね。うん……」

腕の中で答える爰の言葉は曖昧でどこか悲しげだった。

鴻羽は求婚の言葉を紡ぎかけてやめ、そのかわり爰の頭を静かに撫でた。

女人禁制の軍で爰が籍を置いておけるのは表向きは男として通しているためだ。実際腕に抱いている体は半陰陽とはいえ男のものと云うには繊細すぎるし、出逢った頃から甘くそよいでいた色香は年を重ねることに濃くなりもはや男で通すことは無理があると思えるほどだが。

それでも爰が軍人であることをこだわり続ける以上は、求婚などすればたやすくこの腕から逃げていくのは想像できる。

「……本当に、俺はお前を愛してるんだ」

鴻羽は爰の頤おとがを持ち上げ想いを吹き込むように口づける。

「夜には、まだ早いよ」

花の馨を漂わす首筋に唇をあて、舐めあげると弱々しい抵抗の声がかかる。自分の耳元にかかる吐息は熱く湿っている。

「直に夜になる」

鴻羽は寝台の上に爰を座らせ、合わせから手を差し込んで肌を愛撫しながら衣を剥いでいく。

背筋を指先でなぞりながら鎖骨のくぼみに口づけを落とすたびに爰がため息のような声を漏らしながら敷布を握りしめる。

鴻羽は顔を上げて爰を組み伏せ、頬を薄紅に染め瞳を潤ます顔をのぞき込む。そして唾液に濡れて艶めく唇を貪った。

その手はすでに本能の赴くままに腰帯を解き引き締まった腿を撫でさすりながら深部へと向かっている。

長年色狂いする者をだらしがないと思っていたというのに今の自分はどうだろう。

「あ、鴻羽……」

だが淫靡に甘える声で名を呼ばれるとそんな自己嫌悪は瞬く間にかき消されてしまった。

白蛾七年。呂淳が即位して七度目の春である。

戦勝の余韻をまだ残すこの年の春の宴は軍からも多くの者が招かれ例年よりにぎわっていた。

その中で尚書や貴族に慣れない愛想をふりまいて呂淳は疲れ果てていた。近年の内政への口出で多少は芽があると思ってくれた幾人かの官吏は自らやってきて声をかけてくれるが、それ以外の者に声をかけるといふのは思った以上に緊張して変に体に力が入ってしまう。

それでも出来るだけ伯父の側近らとの繋がりを太くしていかなければならないので仕方ない。

「上等だよ。そう簡単にはいかないものだから無理はしなくていい」
露台の隅で一緒に一息ついてそう言う浚はついひとつき前に隊将となり五年前と違いこの露台上がるのに誰にも文句をつけられない地位にいる。

左軍側であるから鴻羽との関わりも薄くなるので少し気は休まった。だが浚が視線を向ける下には鴻羽がいる。

彼の周りには多くの人が集まっていて、あまり見ていると楽しい光景ではない。

「あれ、姪、だよな。ああ、子供産まれたって言うてたっけ」

今鴻羽に挨拶をしているのは確か一番上の姉の娘で一七だったはずだ。一昨年結婚して昨年子供が産まれその挨拶らしい。その傍らの夫が人垣のほうへ向き誰かを呼んでいた。

そして前に出てきたのは十八程度の娘を連れた夫婦で、どうやら娘と鴻羽を見合わせているようだった。

「結婚か……。お前の正妃もそろそろ考えないとな。やっぱり世継ぎが出来るのが一番いい」

それはすでに官吏らからもそろそろ子のひとりやふたりはと声をかけられているがその気は起きない。それに浚から言われるのは胸

が重苦しくことさら気が進まなかった。

そんな感情が顔に出ていたのか、爰が苦笑する。

「下手なの選ぶと後々厄介だからゆっくり考えるといいよ。柚凜ならいい人選んでくれそうだからなんだったら頼んでもいいかな」

家柄、容姿、年齢。そんなことをあれこれと話す爰の言葉はあまり耳には残らなかった。

ぼんやりと目を落としていた爰の漆黒の髪が柔らかな陽射しに包まれ煌めいていて綺麗だと思った。

それだけでなく、この頃は前にもまして美しくなった気がする。表情の少年めいたものが薄らいで艶めいたものが色濃くなってきたせいかもしれない。

爰の花びらと同じ色の唇が黒い盃に触れる。その瞬間、そこから目が離せなくなった。

飲みほした後に唇に残った酒をねぶる赤い舌を見て耳のあたりが熱くなり呂淳は思わずうつむく。

ひどく不躰ことをしてしまったようで恥ずかしかった。

だがそんな自分の様子に気づくこともなく露台の下へ爰がまた目を向けていて呂淳は今度は消沈してうつむいたのだった。

冬が帰って来たような冷やややかな風の吹く日、初代王の血族の末裔とされている貴族の邸宅がひしめく区画のとある屋敷を爰と郭將軍は訪ねていた。

彭家の屋敷である。周囲の家々と同じように建国より二百年近くここにある屋敷はいくつかの棟と花々が甘い芳香を放つ広い中庭を塀の中に抱え込んでおり、管理が行きとどいているようで整然としていた。

ただ二十数年分の沈黙に人のぬくもりは埋もれ胸が凍えるような寂しさがあった。

雇い入れている管理人に正式な当主としての挨拶を済ませたのち、
爰は郭將軍と共にひととおり部屋などを見回り最後に中庭で咲き零
れる杏の花を眺めながら屋敷を後にした。

「住む気にはなつたか？」

幾年も年を重ね艶やかさを増した黒櫨の門を出たところで郭將軍
に尋ねられ、爰は苦笑する。

「ひとりに住むには大きすぎるよ。軍舎の部屋がちょうどいいや」
隊將就任にあたって郭將軍が預かっていた彭家の屋敷は爰へとい
うことになり今日見に来たのだ。

旧家らしく軍舎のもの三倍近くはありそんな寝室が六つに書齋
が三つ、他に下働き用の棟など広すぎる屋敷はひとりで暮らすには
あまりにも隙間が多く寂しい。

それに、自分の帰るべき場所はどこではない。そのうち呂淳も一
度連れてきたいと思つたが、けして帰れはしない場所へ連れてくる
のも酷な気がしてその考えは打ち消した。

「そつだな。そのうち跡目が……いや、すまん」

「いいよ。彭家は私で終いだろつな。遠縁つていうのももういない
みたいだし、そしたらこの屋敷は呂淳が気に入った官吏にでも名前
ごと下げ渡せばいい」

もはやそれしか彭家が名を残す道はないだろつ。

出来れば呂淳の娘が嫁すときにその相手に彭家の名を与えるよう
なことになるれば最善だ。

「そつだな……」

物悲しげにつぶやいて郭將軍が咳き込む。先日風邪をひいたのが
まだ治りきっていないらしい。

「大丈夫？ 軍舎と屋敷どつちに帰る？」

「少し痰が絡まつただけだ。そこまで弱つてはおらん」

爰は郭將軍の返事にそれは失礼しましたと笑つて軍舎に足を向け
る。そして人通りの少ない往来に袖凜がいてこちらに近づいてくる
のが見えた。

「爰様に郭將軍。ごきげんよう」

「こんにちは。今日も書庫？ いい加減読みつくくしちやいそうだね」

この頃はよく王宮の書庫に通っているという柚凜は今日も飽きずに書物を読みあさっているらしい。

「そうなつてしまつてはまた退屈になつてしまつけど、書物は増えるものだから心配いりませんわ。爰様は……もしかしてお屋敷に戻られるのですか？」

期待を秘めた柚凜の眼差しに爰が郭將軍について先ほど告げたことを話すと分かりやすく落胆された。

「家も近くて楽しそうですね。ああ、でもお父様がやっぱりうるさくなりそうですね。わたくしは爰様と仲良くしたいのにお父様つたら本当に。郭將軍もいつも父がご迷惑おかけして申し訳ありません」

若い二人の会話を心持ち離れた場所で見ていた郭將軍は話を向けられ片眉をあげる。そして不愛想にご令嬢が気になさることはないと返した。

それからいくつ言葉 exchanged のち柚凜は斜め向かいの齋家の屋敷へと戻つていった。

斜め向かいとはいつても屋敷ひとつひとつが広大なので目と鼻の先と言つほどでもないがやはり近い。

齋家と彭家の家のわずかな差は家格の差でもある。

本来ならば王宮に近い彭家のほうが上のはずだ。

「あのご令嬢も供もつけずひとり歩きはする上に書物好きとはかわつているな。まあしかし父親よりかはまともか。まったくあの父親で娘も息子もよく分別あるように育つたものだな」

「息子も？」

珍しく鴻羽に好意的な言及に訊き返してみると郭將軍は不服そうにうなずいた。

「ああ。あの男に息子なのが信じられんほどな。しかしあれは自立

ちすぎる。本人に自覚がないのがことさら悪い」

「呂淳を立てるにはやっぱり邪魔、か」

ひとりごとのように言って爰は視線を落とす。

鴻羽が呂淳の為、国の為と心血を注げば注ぐほど呂淳は卑屈になる。そして周囲はさすがは斎家のと褒め、それに比べ従弟である王はと陰で囁く。そうなるとますます呂淳が、と悪循環だ。

軍の要となりかけている鴻羽の扱いは難しい。

そしてそれを口実にして自分は出来るだけ鴻羽の近くにしようとする。

「……お前もあまり目立ち過ぎぬよう陛下のお支えになるのだぞ」

郭將軍がそう言って、爰はわかつているとため息をつくように答えた。

すっかり密談場所となった書庫で柚凜は呂淳の前に地図を広げる。「このこと、ここの領主の娘が新しい鴻羽の花嫁候補ですわ。どっちを選んでも西の主要な穀倉地帯と縁故が結べますわね」

この頃は呂淳に鴻羽の花嫁候補を教えるのが主だった。鴻羽の縁談はつまるところ父が次にどこを取り込もうとしているかである。さすがにこればかりは爰が知りえない情報だろう。

これまでの傾向は名家で広い領土、そして中央との結びつきがまだ薄い貴族。

中央どころか国の全域を取りこもうとしている様はひそやかに篡奪でも狙っているのではないかとおもえるほどである。

しかしながら州長官を勤める家は見事に排除されているのが面白いくない。州長官は中央より派遣され、地方の領主である貴族を束ねるいわば州の王であるが、やはり土地を持っている領主のほうがないかと強い。

自分が州長官の元へ嫁がされたときに適当だと思ったのはそのた

めだ。元夫は特に領主の意見に右往左往させられてばかりでまだ若いとはいえあまりにも情けなかった。

「ああ、あと湊様は隊将になられてからも軍舎の鴻羽の部屋へ時々訪ねているようですけど、なんの企み事をしていらっしゃるのかしら」

道を逸れて嫌な思い出を掘り起こしてしまい柚凜は眉をひそめながら話題を変える。

さすがに目立つ二人だけあって下世話な噂も多い。これまでは補佐官とその上官の関係であるのですが、噂話で終わっていたが、今は違う。

長いこと共に戦地で戦った朋輩であり新任の隊将同士でもあるのでお互いいろいろ話したいことがあるんだ、とは面白半分を装って問い詰めてみたときの鴻羽の言い訳であるが弟の嘘は分かりやす過ぎる。

「……いえ。なにも」

呂淳に不安の色が見え、柚凜は湊が報復のために鴻羽に取りいつているわけではないらしいと憶測する。

下手に隠し立てすれば余計な疑いが向くことぐらい湊ならば分かるだろうに。その判断も出来ないということはよほど後ろめたいのだろう。

「湊様にもなにかお考えがあるのかもしれませんが。陛下のほうにはあまりことを進められていらっしゃらないんでしょう」

必要以上に不安をかきたてるのをやめてそう問うと、呂淳がうなだれはいと答えた。

「そう気にすることもありませんわ。お父様が何十年とかけてきたものを一朝一夕でどうにかできるなんて湊様も思っていないかもしれませんよ」

若い頃は開墾や農地の見直しのため地方をかけずり回り、中央に戻れば王を宥め有能な官吏を見定めて内政を整えと努力を惜しまぬ有能な人物として父の信奉者は官吏らに多い。

だがしかし、父の信奉者同士、というのはけして全てが一致団結しているわけではない。

媚を売ろうと話しかけてきて誰かを落としめながら自分を持ち上げようとする人間は多い。

ここ数年王宮で耳をそばだててうるついでに官吏らの派閥やその確執はだいたいは把握出来た。

そしてその官吏らがひとつだけ共有するのは父へ畏敬であることも強く感じた。

寄りあわない糸を束ねる父が辞した時はひとしきり揉めたのち軍内で地位を築く鴻羽が新たな束ね役として担ぎ出されるのが目に見える。

そうならぬように呂淳には入り込みやすそうな派閥の長なども教えているが、あまり上手く進んでいないようだ。

「ですがもう少し目に見える結果があればいいのですが……」

「それは陛下の努力次第ですわ。やっぱり正妃をお迎えになることをお考えになったらいかが？ 相手は鴻羽の相手から選ぶのがいいですわね。わたくしもあなたに合うかどうか見ておきますし」

縁談の話になるとそれは、と呂淳が口ごもる。

「二十三にもなるのに寵姫のひとりも持たずにお世継ぎがないというのはさすがに皆不安に思っておいでですわよ」

少し口調をきつくしてみると見ていて情けなくなるほど呂淳は縮こまってしまった。

「まあ、それは鴻羽もですわね。こちらは下手に後継ぎなんて作られたら面倒だけれど。爰様の目的はそれかしら。でもあの方も情が深いようですし、少し心配ね」

半ばひとりごちるように柚凜は言う。

少なくとも鴻羽はあの性格では爰を愛したまま他に妻を迎えるなどということとはできない。

「……鴻羽は母上を見殺しにしたのです。だから、裏切るようなこととはありません」

言葉は強いが、その反面呂淳は母親に置き去りにされてしまった子供のような顔をしていた。

鴻羽が叔母の死についての顛末を知っていて黙っていたことは呂淳から聞いて知っている柚凜は形だけ同意する。

その頭の中ではひとつの駒に指をかけていた。

邪魔な駒を排除するにはまだ距離があり、駒を持っていく先はまだ見定められなかった。

かたん、と扉が閉まる音がして湊は重たい瞼を持ち上げる。ぼんやりしたまま半身を起すと、悪い、と鴻羽の声が聞こえた。

「起こしたか？」

いつものまにか寝ていたらしいとようやく気づいた湊は寝台を降り、脱ぎ捨てていた服のうち下着に当たる単衣を身につける。

「んー、どれぐらい寝てた？」

「そんなに長いことじゃないと思うが、飲むか？」

鴻羽が卓の上に置かれた水差しを示し、湊はまだ半分寝惚けた様子でうなずいて乾いた喉を潤す。それで多少は頭ははっきりしたものの体全体を包むうだるさは抜けきらない。

「だるい」

湊はぼやきながら全体重を預けるようにして鴻羽に抱きつきその胸に顔をうずめる。そうすればうだるさの中にぼんやりとある甘さは強くなり幸福感に変わる。ただ日常の疲労はまだ底で重たく残っていた。

隊将に昇格してみつき。

春ごろから郭將軍の体調が優れずここ最近には彭門下生は集まって遅くまで話しこんでいることが多くなった。郭將軍の容体の不安もあって、先々丞相とどう渡り合っていくか軍はどうあるべきか皆真剣に話している。

その中でやはり祖父のことや呂淳のこともあって自分への期待は大きいようだが、それはそれで気疲れしてしまう。

そして気づくのだ。いかに鴻羽の側が安らげる場所かということ

を。

「泊まっていくか？」
欠伸をひとつすると口づけを落とそうとしていた鴻羽が苦笑しながらそう問いかけてくる。

「さすがに朝までいるのはまずいよ」

とは言ったものの眠気はまだ留まったままで自分の部屋に戻るのも億劫だ。なにより鴻羽と離れがたかった。

隊長になつてから自分は別の部屋に移り鴻羽との逢瀬は今日のように日暮れ時に鴻羽の部屋を訪ね夜更けに戻るという形になっている。お互いの補佐官は家庭持ちなので仕事が終われば帰ることが大半で会うのに苦労はしないものの人目もあるのでそう頻繁には一緒にいられない。

共に過ごす時間が減れば多少は鴻羽への気持ちも落ち着くかと思つた。しかし職務上顔を合わす機会が多いが言葉を交わすことは少なく、それがどうしようもなくじれったく切ないばかりだった。

そして会えば時の流れが緩やかになることを望んでいる。

それではいけないことは重々分かっている。

分かっているが。

「言い訳は後で考えればいい。俺は日が昇って一番にお前が見たい」
そんな胸をくすぐる言葉にはつい甘えてしまう。

疲労感を言い訳にして爰は再び寝台に潜りこむことにした。

蜀台の火が消え、隣に鴻羽が横たわり抱き寄せられると胸の奥まで優しい温度に包まれている気分になる。

このぬくもりが自分の帰るべき場所であればよかつたのに。

穏やかな眠りの波に沈む間際、爰はそう願つた。

秋の初め李宋と東側の小国を攻め落とすための軍議の途中、郭將軍が血を吐いて倒れた。肺の病らしく、もう先が短いだろうということだった。

しかしながら今回の戦は左軍に任されたものなのでそのことに気を落としてはいらなかった。隊将らは將軍の補佐官を中心に準備を進め、秋が深まる頃にはどうにかまとまった。

そしてようやく体が空いて後宮へ向かった爰だが、呂淳はおらず書庫にいるということで引き返してそちらに向かっていた。

「こんにちは。久しぶりだね。今日も書庫？ 呂淳いるよね」

途中の廊下で柚凜を見かけ挨拶をする。今日も今日とて王宮で暇つぶしをしているらしい。

「……ええ。いらつしゃいましたわ。少しお話もお聞きしたのですけれど大変そうですね。爰様はまた戦に行かれてしまいますの？」「いや、今度はいかない。湍茜攻めに出た奴らは今回は残ることになってる。そう難しい戦でもないし、雪が少ないところだから春ごろまでには決着つくかな」

「そうですね。それなら鴻羽も寂しくありませんわね」

含みを持った柚凜の笑顔に爰は言い逃れできそうにないと愛想笑いをひっこめる。

「最近忙しくてろくに会ってないけどね。気づいてたんなら早く言ってくればよかったのに」

鴻羽の元に通っていることは噂になっっているので実際本人に詰めよってみたのだろう。柚凜ならばそう上手くはない鴻羽の嘘ぐらい見抜いてしまったに違いない。

「鴻羽は秘密にしたがっているようだし、邪魔になっとは思って我慢してましたのですけれどねえ。この間、鴻羽がいつまでたっても縁談を断り続けるものだからお父様が勝手に話をまとめようとし

ましたの。それはあんまりだと思って鴻羽に告げ口したらお父様と鴻羽が大喧嘩してしまいました……」

呂淳の縁談に関してはおおざりだということのにとなんと呆れた話である。

「それで、家のためにはワタシに身をひいてほしいってことかな」
人通りは周りにないものの、ふたりの声は自然と潜められていく。
「いいえ。わたくしはね、女が自分の幸せを犠牲にしてまで家名だの血統だのくだらない男の自己満足に付き合っただけの義理はない
と思っけていますの。もし、あなたの幸せが鴻羽と共にあることなら
そうしていただきたいわ」

慈愛に満ちた袖凜の表情の裏に出会った時のやつれて蒼褪めた顔が見えた。

男に産まれたかったのかもしれないといつか言っていた彼女にとつて血統や家名は女を不幸にするものでしかないのだろう。

「……それは嬉しいけど、無理だろうね」
そのために母たちは幸せを得られなかったかもしれないが、自分
はそれをくだらないとは言えない。

それを守るために命を賭した者たちがいた事実がある以上は。
「でも、鴻羽のことは愛していらいらっしゃるのでしょうか？」

「媛はそれには首を縦に振らなかった。
「感情を優先出来るならすぐ、楽だろうな。それにこんな半端な
体だしね」

皮肉な物言いに袖凜が憐れむように眉をひそめる。

「あなたも、とても窮屈そうですね。答はゆっくり考えていただき
きたいけれど……」

思わせぶりに一度目を伏せて袖凜が言い淀む。何、と首をかしげ
るとその視線が躊躇いがちに合わされる。

「陛下の癖、媛様なら知ってらっしゃるでしょう。女官がこのごろ
陛下の衣装によく血の染みがついていて落とすのが大変だと言っ
ているのを聞いてしまって……。嘘というのは時を置けば置くほど

悲しいものになるのではありませんか？」

すがりつく視線に爰は顔を曇らせる。

呂淳が不安を感じたり心が疲れている時に自分の腕をひっかいてしまう癖は知っている。あれだけはやめさせたいが、いまだに術が見つかからない。

「もう少しだけ、内緒にしてもらっていいかな」

果たしてこれは何度目のもう少しだろうか。

答を見つけられぬままずると先伸ばしていくうちに恋に溺れていく自分がいる。

しかし、呂淳が勘付いているなら言うべきだろうかと悩めど最後にはもう少しと言ってしまう。

「ええ。では、わたくしはこれで」

会釈して袖凜は足早に去っていった後、爰はため息を落とす。動かそうとする足はずいぶん重かった。

それでも書庫に入り奥へと向かうと呂淳が驚いた顔で立ちあがった。

その卓の上に広げられた紙に爰は眉宇を曇らせる。印がつけられた地図と、いくつかの名前が並べられた紙。名前の上には線が引いてあって消されているものもある。

「呂淳の字じゃないね。あ、袖凜か」

どこか奔放さを思わせる流麗な字は見覚えがあつてすぐに思い出した。

「……はい。あの、鴻羽の縁談相手と伯父上と親しい官吏らを教えてもらっているんです」

「そうか。ワタシは軍にかかりきりでこういうのは把握しきれないからなあ。袖凜はどうして知りたがっているかとか聞かなかった？」

目の付けどころがいいと感心しながらも爰はどこか腑に落ちないものを感じていた。

「先に、父上の周囲のことをちゃんと把握しておきたいと頼んだの

で……」

呂淳の目が泳いでいるのに嘘だとすぐ分かったが爰は自分のこと
もあってそれを指摘できなかった。

「……凄いな」

気まずい沈黙をごまかすように書面に目を落とした爰は思わず目
を丸くする。

ざっと眺めただけでもきちんと枝葉まで人間関係を整理されてい
ることがわかる書面は実に便利そうだった。

ただ退屈しのぎで王宮をふらついているだけならこうはいかない。
父親の人脈を把握しておこうという明確な意思がなければ。

しかしながら目的が見えない。さきほどの会話とこの行動がつま
く噛み合わないのだ。

爰は思案しながら警戒するにこしたことはない結論づける。

「あんまり頼りすぎるとも危ないな。斎家の人間であることは変わ
りないしもうこのあたりで距離を置いたほうがいい」

そう言つと呂淳が不服そうな顔をした。

「鴻羽も、斎家の者だ」

小さいながらも責め立てる声が胸に重く響く。

「うん。そうだね。でも、ワタシももう左軍にいるから……」

言葉はもたついて呂淳の表情が不安に曇る。その手が腕を組むよ
うに動くのを慌ててとどめる。

「なにも、心配することはないよ」

おそらく腕をひつかこうとしたのは無意識だった。たろう呂淳は自
分の腕をぼんやりと見たあとうなだれてすまないと言った。

それに対してごめん、と爰は口だけ動かした。

年の瀬、爰は郭將軍の邸宅に招かれていた。

嗜血してからは軍舎には顔を見せず見舞いも受け付けなかった郭

將軍に呼びつけられていよいよかと覚悟はしていたが、実際その姿を見ると胸が押しつぶされそうになる。

「こんなところで悪いな」

掠れた声で言っつて寝台から半身を起こす郭將軍は一回り小さくなつていた。屈強な岩のようだったのにすっかりくしゃくしゃに丸めた紙のようになつてしまつてゐる。

「いいよ、寝てて。話つて何？」

「一局相手してもらおうと思つてな」

寝台の脇の卓に軍盤があつて、爰はいいよと静かに答えた。

「あんまり無茶しないでよ」

郭將軍が寝台にいても出来る位置に卓はよせられていて椅子は一脚だけありそこに爰は腰を下ろす。

静かな、対局だつた。

時折ひゅうひゅうと郭將軍の喉から漏れ出る呼吸音と駒を動かす音しかない。

互いの駒が半分ほどに減つた頃、郭將軍がおもむろに口を開いた。

「僕の跡を引き継げ」

爰の指が一瞬止まる。

「ワタシじゃまだ若すぎるし、この間隊将になつたばかりだよ」

次に据えるなら郭將軍の補佐官を務めている者がいいと促すと郭將軍はその補佐官と彭門下生である隊将らの名をゆっくりとあげて言つた。

「皆、すでに同意している」

「なんだ、みんなここに來てたのか」

自分がいちばん最初だと思つてゐた爰は盤上の駒を行き場を探りながら吐息を洩らす。

「……………ワタシが、爺様の孫だからかな」

彭吾准（ほんごしゆん）という人は本当に慕われていたらしいと改めて思い知らされて誇らしくも思う。

それと同時に嘘をついてゐることに気がとがめた。

「隊将たちはおおむねそれだ」

「將軍はそうじゃないの？」

「……ずっと気にかかっていたことがある。陛下のお顔はどことなく露白殿ろはくに似ている気がするのだ」

露白。それは呂淳の実の父親の名だった。

爰は初めて盤から顔を上げた。

「特に特徴のあるという顔でもないので気のせいかと思っていたのだがなあ、苑昭えんしょう様に瓜二つのお前が現れた」

そこまで言っつて小さく郭將軍がむせ込み爰は人を呼ぼうとしたが止められる。

「……この程度の咳はよくある、気にするな。お前の軍略の知識は先生からのものだった。そのうち彭家の生き残りしんきと明言した。思い返せば先生の訃報ふくほうが届いたのは稜明殿下りょうめいがお隠れになったあとその間をおかずにだった」

痩せこけた指で郭將軍が駒を動かす。爰はその動きをまともに追うことが出来なかった。

「將軍としての地位は、必要だろう」

明確な答えは出さずに郭將軍は黙々と駒を進めていく。逃げ切れず、將は取られてしまった。

「ふむ、少々卑怯だったか」

「……すごく卑怯だよ、次は正々堂々と勝負してよね」

そうだなと笑う郭將軍が再び咳きこんで血を吐く。さすがに今度は人を呼んだ。

荒い呼吸に体を震わせながら、郭將軍はかつてと変わらぬ鋭い眼光を宿した瞳で爰をしつかりと捉えていた。

「陛下、どうあってもあの男を許してはなりませんぞ」

それが、爰の聞いた郭將軍の最期の言葉となった。

これより三日の後、年が明ける間際に郭関牙は静かに息を引き取った。

葬儀は身内のみで密やかに行われ、その日軍は全ての訓練を取り

やめ喪に服して沈黙した。ただひたすらに悲しみに浸った。

そうして喪が明ける頃、爰は二十四になる年、建国以来最年少の
將軍となった。

春を目前にするころには昨年から始めていた戦は相手国の降伏で終戦を迎え、李宋と領土の折半も確約通り進められていた。

左軍も涑を中心にした体制が整いつつあった。そんなさなか軍議の後將軍ふたりに残るように言われ、夏將軍から突然の引退を告げられた鴻羽は困惑していた。

「急に、というわけではないんだよ。本当は去年のうちにと思っていたんだけどね、関牙かんががああなつてしまつて残らざるを得なくなつただけなんだ。もう、右は見えない。左もずいぶん悪くなつてきたし何も見えなくなる前に領地に戻つてゆっくり子供や孫の顔を見ておきたい」

目が悪いとは聞いていたがまさかそこまで進行していたとは思わなかつた鴻羽は引きとめる言葉を飲みこんだ。

「それで、後任は君に任せたい」

「……私には無理です。他の隊将方もいい顔はしないでしょ」

経験も足りなければ、父のこともある。

鴻羽は夏將軍の隣にいる涑に戸惑いの視線を向ける。

「左軍のほうはワタシを将として丞相と対立する意思を固めていく方針だよ。丞相側と軍側が完全に割れてしまつのはまずいというのはわかつてるんだけどね、いろいろと面倒なんだよ。本来なら呂淳が間に立つのが一番だと思つただけだね……」

実質の軍の長は呂淳であるが、丞相側に偏り気味というより逆らえない。しかしここ数年は涑にとかく甘く、それゆえに左軍側としても涑を通じて王を味方につけてしまおうという意図が見える。どちらにしろ呂淳が中間に立つというのは難しいだろう。

「しかし、私が將軍となつたらむしろ軍が割れるのでは」

「その懸念はあるんだけどね、まあ彭殿ともこれまで上手くやってこれたし、君は若い子たちに特に支持されているし、他の隊将がた

も信頼に値するって言われてるしね、大丈夫」

夏將軍の自信はどこから来るのだろうと他人事のように鴻羽は思う。

彭軍師の影響の強い軍において郭將軍を將軍という地位に置きつつ丞相側と完全な対立に及ばなかったのは夏將軍がいるからこそである。軍にも信頼が大きく丞相に対しても平静にかつ偏りなく接することのできる人格者の彼の後釜というのは重荷だ。

「少し、考えさせてください」

残念がる様子もなく仕方ないといった態で微笑む夏將軍にすみませんと鴻羽は小さく付け加えた。

一礼して退室した途端に思考が止まって長いため息が漏れ出る。

話している間は冷静に受け止めているつもりだったが、今は頭の中で嵐が吹き荒れていた。

「鴻羽」

爰が追いかけてきて、鴻羽は歩調を緩める。

「……驚いた」

そう零すとふつと爰が笑った。

「だろうね。夏將軍から話された時ワタシも驚いたよ」

「お前は、俺が將軍につくことには抵抗はないのか？」

幾分か沈黙にそれはそうだろうと鴻羽は眉根を寄せた。

「面倒だよなあ。ワタシとしてはお前とのほうがやりやすいんだ。迷ってる理由はそれだけ？」

演習場を見渡せる回廊にさしかかって爰が立ち止まり、欄干に浅く腰かけるようにして問いかける。

「ああ。自信はそんなにないが託されたならやってみようとは思う。

……最後に決めるのは呂淳だな」

いずれにせよ、呂淳が認めなければ始まらないのだ。認めてもらえるとは到底思えないが。

どうだろうな、と爰は風にかき消されそうな声で言って演習場に目を向ける。今は休憩中のように皆汗だくで地面に座り込んでいる。

一緒にそれを眺めながら鴻羽は普段より高い位置で揺れる馬の尾のような爰の髪にふと違和感を覚える。

「……髪、切ったのか？」

単に結び目が高いからかとも思ったがやはり短い気がする。

「切った。なに、もうちよっと長いほうがいい？ お前そういうのにはこだわらないと思ってたけど」

爰が瞳を鴻羽に向け、小首をかしげる。

「別にこだわわるわけじゃないが、長ければ長いことにこしたことはない」

そんなに自分は不服そうな顔をしていたのだろうかと思いつつ抑揚なく答えると爰が肩を揺らして笑った。

「じゃ、元の長さになるまで切るのはよしとくよ。短くしたいわけじゃなくてただの気分転換だからさ」

爰の笑顔の中に疲れを見つけて気詰まりしているのだろうかと思いつつは思う。

「將軍は大変か」

そう深刻そうに訊くつもりはなかったが、自然と口調は重々しいものになってしまった。

爰は視線をまた演習場に投げてうん、とうなずく。

「……ワタシはこんなだから認めてくれない奴もかなりいる。爺様の教えを受けてる奴でも、お前と仲良くしてるのが気に入らないっていう反発もある。左軍に移ってから鴻羽のところに行ってるのはどうしたって隠しきれないしね。もっともお前とのことを勘ぐられるのは昔からだし、いまさらって気もするけど。そっちは何か言われないの」

確かに湍茜たんせん攻めの前から上官に擲掬されたりすることは多かった。あの頃は事実無根であったものの今は違う。

しかしながら擲掬の言葉を聞くことは減ったと思いつつながら鴻羽はああ、とうなずく。

「……最近やたら花街に誘われたり子を持つことのよさを説かれる

のもそういうことか」

特に年上の兵から真面目であることはいいが羽目を外すことも大事であるという趣旨のことはよく言われ最終的に花街に連れて行かれそうになる。

年の近い者たちは一様にいかに子供が可愛いものかと語ってくる始末だ。補佐官の娘自慢に関しては含むものはないだろうが。

「みんなお前のことが心配なんだなあ。相手には困ってないんだろうからさっさと決めたほうがいいんじゃない？」

冗談でもなく気易く進めてくる媛に鴻羽は不貞腐れた顔をする。

「俺はそう簡単に割り切れない」

貴族にとつて婚姻とは家名を上げよりよい血統を残すためのものである。個人的な感情が反映されることは稀だ。想い人に身分差がある場合たいてい外に別邸を用意したりするのだ。

かといって本妻、妾と分けへだてるような器用さは自分がない。

出戻ってきたときの生気の欠けた柚凜を思い出すことさらそういうことはできそうになかった。

「真面目だな」

媛が困ったように言ってお互い言葉を失う。

もう一年以上続く関係も行き詰ってしまつて足踏みするどころか後退しようとしている気がする。互いにしがらみが多すぎるのだ。

休憩の終わりを知らせる鐘が鳴る。

戻るか、と鴻羽が言つと媛も同意した。そして廊下の向こうからやってくる人物にまた足を止められた。

「……父上。どうされました」

深雁は鴻羽の隣にいる媛を不快そうに見やっつてから口を開く。

「お前が將軍を引き継ぐことについて夏將軍と話をしようと思つてな。外堀はきちんと埋まつているかの確認だ」

要するにまだ將軍となることに父としては若すぎることや確執などが気になっているということらしい。

「……ワタシは仕事に戻るから」

一礼もせず、溪雁の横を通り過ぎていく、溪の背中に、鴻羽は苦いものを感じながら父親と向き合う。

「あまりあれに気を許すな。腹の底ではなにを考えてるかかわらん。あのような出自すら怪しい者を將軍に取り立てるようなことは許してはならんかったというのに」

忌々しげに毒を吐く父親に、腹の奥が熱くなる。

「彭殿は將軍として相応しい実力も兼ね備えていますし、彭軍師の孫であることは郭將軍をはじめとして皆認めていました」

自然と声は刺々しいものになってしまっていた。しかし、溪雁はそれを取り合いもせず、鴻羽を見据える。

「あまりあれを庇いだてしても身のためにはならんぞ。李宋の丞相の娘との縁談の話がある。妙な噂を立てられぬよう気をつける」

また、なぜと、鴻羽が口を挟む間もなく、溪雁が続ける。

「これは外交だ。李宋が同盟を強固にするために互いに貴族の娘を何人が嫁がせることを提案してきた。それをこちら側は呑むつもりだ」

互いに、姫のいない王家同士が縁戚になれない代わりに、血の近い自分ごとということだろう。

「国のためとあらば、お前も身を固める気になれるだろう」

そう言い残して、溪雁はその場を後にした。

国のため。

それはつまり、呂淳のためでもある。それでも、そう簡単に受け入れられる事ではないが、自分が異議を唱える権限はない。

悠然とした父の後ろ姿に、覚悟を決めなければならぬのかと悶々とする、鴻羽だったが、その縁談は形を成すことはなかった。

呂淳が強固に反対したのだ。

それは、鴻羽の縁談のみだけに限られていた。かつてないほど、王と丞相の意見は分かれ、王宮は揺れ動き始めていた。

縁談の話からひとつき、呂淳の意思は通り鴻羽の縁談のみが白紙にされ他の縁談についてはつつがなく執り行われることになった。さすがに鴻羽の縁談相手が外交にかかわるような人物ではまずいのだ。

肝心の齋家の婚姻をさしたる理由もなく断ることはよいことではないが、これで呂淳が溪雁にしつかり反論できることが周知されたことを考えれば判断は間違っていないかつただろうと爰は思う。

いつものささやかな呂淳の反抗かと初めは周囲も冷めた思いで溪雁と呂淳の対立を見ていたようだが、一步も引く気がない上に外交上の重要な案件であることもあって王の丞相離れかとざわついている。その一方で鴻羽が將軍に任命されますます混乱し、官吏らはこちらにつくべきか迷っているようだった。

これでもうひと踏ん張りすれば強いほうへ日和見してきた官吏らは呂淳につくだろう。溪雁の側近らはさすがにまだ手強そうだ。

「わからないな」

傍らで夏將軍から教えてもらった軍内の事細かな人間関係を記したものを読んでいた鴻羽がつぶやく。

鴻羽は將軍に任命されたもののまだ引き継ぎの途中で、夏將軍が退役するまでまだ五日ある。今日もつい先ほどまでこの資料室で夏將軍は鴻羽にあれこれ教えこんでいたが、後を爰に任せて帰郷の準備に行ってしまった。

「なら、將軍に訊きに行ってくればいいよ。そういうことはワタシより將軍のから直に訊いたほうがいい」

雑務に関しては教えられることはあるが右軍の人間関係となるとある程度は把握しているものの將軍ほど深くは知らない。

「いや、これじゃなく呂淳のことだ。俺の縁談を阻むのは齋家を俺で終わらしたいのかとも思ったが將軍になることは認めた。呂淳が俺をどうしたいのかわからない」

核心を突かれて爰は言葉に詰まる。

「……呂淳が望む償いは齋家の断絶かもしれないね」

本音をひとのものにしてその白々しさに自嘲したくなった。

「それならそれでいい。どうせ俺には父上の地位を継ぐ気はないからな。生涯軍を守り育てて国の盾なり剣なりなればそれでいい。でも、こういうのは苦手だな」

書類に視線を落として鴻羽が苦笑する。それに爰も相好を崩した。身内の腹の探り合いのようなことをするのは鴻羽には似合わない。夏將軍もそれは分かかっていて自分にも情報を漏れ聞こえさせ、時折助言をすることが出来るようにとしているのだろう。

しかしその中で折れることのない信念を持った剣は強く人を惹きつける。

そこはやはり父親に似たところがあると思うと複雑ではあったが嫌悪はなかった。

「まあ、ある程度頭に入れとけば人は動かしやすくなるからちゃんと覚えておいたほうがいいよ。柚凜はこういうの得意そうだよなあ。あの人つてさ、昔からああなの？」

今回は呂淳を丞相に捕まらないうちに後宮へ逃げ込めるよう庇ってくれたらしい柚凜だが、やはり人のことはよく読んで自分の胸の内は悟らせない。家を潰したいのだろうかとは思っただが、確信は持てない。

いまのところは警戒心は残しつつ呂淳を介して伝えられる情報は貰っておくことにしている。

今日も非番であるが軍舎から出ることにひとり歩きは控えたほうがいいという柚凜の警告に大人しく従っている。

「昔から、かな。そういえば叱られた時の対処方法を教えてもらったことがある気がする。古参の侍女のひとりが説教が長かったんだ。話をきちんと聞いて山場辺りで泣いて聞いた話を踏まえた反省の言葉と感謝を述べるって。よっつの俺には難しすぎてわからなかったがな」

「それは無理だな」

顔を見合わせてふたりは忍び笑いをもらす。

そうしてどちらともなく顔を寄せ合い唇を合わせ、交わる吐息のぬくもりを惜しむようにしてゆっくりと離す。

「俺たちはこのままでいいか？」

視線は絡めたまま鴻羽が申し訳なさそうに言う。

「うん。このままでいいよ。誰かに知ってほしいなんて思わないから」

齋家の断絶は叶う。もはや鴻羽に真実を告げる必要などありはない。

そうなれば溪雁を追い落とした後には呂淳だって重石が取れて楽になるはずで、自分たちの関係さえ上手く隠し通し誤魔化しきればもう誰も傷つくこともない。

心のどこかでそう都合よくいくはずがないと思いつつも、そんな夢を見ずにはいらなかった。

ようやく目の前の皿から硬めの粥がなくなり、寝台で食事をする呂淳はため息をつく。まだ薬湯の入った椀が盆の端で鎮座していて、漂ってくる匂いをかいただけで口の中が苦くなってくる。

しかしいつまでも睨みあったところで消えてくれないのでひと思いに飲み干し、すぐに水を飲んで口をすすいだ。

薬の味はともかく胃痛はずいぶんよくなった。

呂淳の縁談を阻んで五日もするとしくしく痛んでいた胃はついには鋭い痛みが変わって三日ほど寝ついてしまったのだ。

盆を寝台の端に置いて横になっていると盆を下げに来た侍女が柚凜が来ていることを告げた。

呂淳は入れるよう即答した。

どうしても吐き出したいことがあった。

昨日爰は鴻羽が斎家を継ぐことを放棄しもう真実を告げる必要はないと言った。確かにそれで目的は果たされるのだろうが、胸の中では灰色の雲が立ち込めていた。時折雪が降る前のような冷たい風が胸を吹き抜けていき心細くなる。

「こんな恰好で申し訳ありません」

先に椅子に座って柚凜を待っていた呂淳はまず寝衣であることを詫びた。

「いいえ。寝ていらっしやなくて大丈夫ですよ？」

「もう、ずいぶんよくなりましたから……あの、鴻羽のことですが、しどろもどろに言うつと柚凜が聞きましたわと言葉を続ける。

「これではお父様さえ引きずり降ろせばよろしいのですよね。でも鴻羽はずっと軍に置いておくおつもり？」

縁談破棄のあとに將軍任命をしないでしたら溪雁派との間に角が立ちすぎるといふことで今のところは將軍として置いておいて落ち

着いたら僻地に飛ばすということになったが、それも不服だった。

「仕方ないと思います。爰も軍には必要な人材であるし、害にもならないだろうと。真実を話す必要すらないようです」

諦めきつたように言つと、柚凜が眉宇をひそめた。

「それであなたはよろしいのですの？ なにも知らない鴻羽がのうと爰様を奪つて、あなたはひとりここで我慢させられて本当によろしいのですの？」

ぎゅっと胸を握り潰されるようだった。

報復が終わつても自分は解放されない。それなのに、鴻羽は自分の苦しみなど永遠に理解せず地位も名誉も手に入れる。

「しかし、爰が鴻羽を選ぶことなどありません。母上を見殺しにしたのに」

呂淳にとつてその事実が唯一絶えるものだったが、もはやそれも藁よりも頼りない。

爰にとつても鴻羽は『敵』ということに違いはないはずであるのに、鴻羽に罰を与えようとはしない。

「そのことを許してしまえるほどに鴻羽のことを愛しているのかもしれませんわね」

今まで必死に否定してきた可能性を口にされ呂淳は唇を噛む。

「……もうずいぶん深い関係のようですし」

軽く淡い柚凜の言葉は何よりも鋭利なもので、呂淳の唇から血が滲んだ。

さきほどまで凍えそうだった胸の内は炎に舐められているかのようには焦げついていた。それを嫉妬と呼ぶことを呂淳は知らない。

「少しぐらい、あなたの思い通りにしてもよろしいではありませんせんのか？ 爰様だつて許してくださいませわ。あの人はとてもお優しいから」

鼓膜を伝い意識の奥深くへ言葉は忍び込んでくる。

それ以上の話をやめて柚凜が出て行ったあと、寝台の上で寝がえりを繰り返して、寝衣を血に染めながら呂淳は考え続けていた。

このままでいいはずがない。爰もわかつてくれるはずだ。
そんな言葉をこの日から何度も反芻した。だがなかなか決心はつ
かなかつた。

そして十日目のこと。

何のきっかけがあつたわけではなかつた。ただ今なら鴻羽に面と
向かつて言えるかもしれないという前向きさが急に現れ、決心が鈍
る前に呂淳は鴻羽を呼びつけた。

鴻羽は後宮にひとりで入り、重たい足取りで呂淳の部屋へと向か
つていた。

大事な話があるので急いで後宮へと言伝が来たのは昼を過ぎた頃だ
つた。もう二度と足を踏み入れることはないだろうと思つていた廊
下は長いようで短かつた

「失礼します」

緊張した面持ちで部屋に入り、呂淳と向かい合いになる。

「急にすまない」

書棚の影が一番濃い場所に佇んでいる呂淳がそこから微動だにせ
ずに言う。

「いや、それで話は何だ？」

重たい空気に背をぴんと伸ばしながら鴻羽は呂淳が口を開くのを
待つ。夏はまだ少し遠く窓から流れ込んでくる風は涼しいのにじつ
とりと汗が滲んでくる。

遠くに聞こえている女官らの衣擦れすら聞こえてきそうなほどの
静寂にひとつの足音が混ざる。

それはどんだん近付いてきて扉が開かれた。

「呂淳、なにかあつ、た……」

言葉を紡ぎかけたまま爰が鴻羽の姿に硬直する。驚いたのは鴻羽
も同じだった。

「ひとつだけお聞かせください陛下」

呂淳がふたりの驚愕など素知らぬ顔で重たい口を開く。その言葉と視線の先で悲しげに視線を落とす爰に鴻羽は困惑した。

強い風が吹き込む。背中が冷たい。

風に髪を揺らされる爰に叔母の姿が重なる。これほど似ている他人がいるだろうかと思えるほど重なるのその姿。

「……すり替えられていたのか」

鴻羽は呆然とつぶやいていた。それに応えるように爰が小さくうなづく。

「父上か」

誰が何のためにと疑問が浮かぶと同時に答は出た。

「そう。全部深雁がやった。兄上も、母上達も爺様もみんなあいつが殺したんだ。それで、訊きたいことって何？」

投げやりともとれる平坦な口調で答えて爰が腕組みしながら呂淳に顔を向け小首をかしげる。

呂淳は幾分か躊躇いを見せそろりと言葉を吐きだす。

「鴻羽と関係を持ったのは齋家の断絶のためですか？」

爰が一度目を伏せ、そしてゆっくりとまた持ち上げる。

その漆黒の瞳はただ呂淳だけを見ていた。

「違う。ワタシが身勝手な感情を抑えられなかった。それだけだよ。ふたりの視線に挟まれた鴻羽は自分がひとつに繋がっていなくてはならないものを断ち切ってしまった事実を拳を強く握る。

「なぜですか。鴻羽は母上を見殺しにしたのですよ。もう、あなたにとってそれはどうでもいいことなのですか。伯父上のことも、齋家への報復もむ全部どうだっていいのですか!？」

「そういうことじゃない。そうじゃないんだ……」

爰が首を横に振る。その表情が酷く苦しげで、鴻羽は思わず咎めるように呂淳の名を呼んでしまう。

呂淳が眉根を寄せつつむいて何も言わずに書棚の後ろへと歩みだす。誰も引きとめる言葉をもたない。

左の壁際と書棚の端の間、光の降り注ぐその場所さしかかったときようやく鴻羽は深藍の呂淳の左の袖の一部に黒い染みがあることに気づいた。

過去のことを思い出し、さっと血の気が引いた。

「呂淳、お前また……」

鴻羽は慌てて駆け寄り呂淳の腕をとる。拒まれたが傷の具合が気になった。

「鴻羽、やめて！」

爰の制止の声が耳に届いたときにはすでに鴻羽はその袖をめぐっていた。そして凍りついた。

顔をそらして唇をわななかせている呂淳に気づいて鴻羽はまだ半分思考を停止したままその腕を離す。その隙に呂淳は寝台のほうへと逃げて行った。

「……後でまた来るから。会いたくなかったら会わなくていい。出よう」

爰に呼ばれて呂淳がさっきまでいた場所を見つめたままの鴻羽は一度下を向き目を閉じゆっくりと身をひるがえす。

部屋を出るさいも声がかかることはなかった。

「そんな……」

翌日後宮を訪れた爰は扉の前で自分を待っていた柚凜に耳打ちされたことに愕然とする。

「もう話せる状態にあるようですから行ってさしあげて。今、あの人に必要なのはきつとあなたですわ」

「……会ってくれはしないとと思うけど、一応行ってみるよ」

爰に関しては呂淳から許可を取らなくとも入れるよう命じられている衛兵が扉を開く。

そして慌てて中に入った爰は柚凜に鴻羽には言わないようにと口

止めをすることを言い忘れたことを思い出し後ろを振り向く。しかし扉は閉まりかかっている。諦めて呂淳の部屋に急ぐ。

「あの、陛下は今体調がすぐれないので……」

蒼褪めた顔の女官のひとりが止めに来るのに、媛は袖凜から聞いているとだけ答えて進んだ。

「呂淳、入っていない？」

扉越しに声をかけるが返事はなかった。沈黙にが不安になって媛は躊躇いながらも部屋に入り奥の寝所に足を向ける。

窓の帳が下ろされあたりは薄暗かった。深い影を落とす書棚に異様な圧迫感を覚える。たつぷりと陽光を抱え込んだガラスを透かす帳ばかりが仄白い。

最初に目を向けた寝台に呂淳の姿はない。その奥、影が溜まる壁と寝台の間に頭を見つめる。

媛はそれに安堵しながら緩やかに空気を振るわせるように声を出す。

「呂淳……」

寝台にもたれかかっている呂淳は抱えた膝にうずめた顔を上げることなくさらに縮こまる。

わずかに覗く左手首に見える新しい包帯に媛は苦悶の表情を浮かべる。

分かっていたはずだった。呂淳は他者を責められない代わりに自分を傷つける。

「いいんだよ。悪いのは全部ワタシなんだから、ワタシを責めたっていいんだ」

「……陛下は王に忠実であるべきだ」

いつかどこかで聞いたような文句を顔を上げないまま呂淳がぼそりつぶやく。

「間違いを正すのも臣下の務めだ」

そう言いながら媛は自分の胸が軋むのを感じていた。

「……間違い」

呂淳が顔を上げてどこか虚ろな瞳を涸に向ける。

反復された言葉にさらにきつく胸が締めつけられる。

「そう、間違いだ」

口にするのは肯定。だが感情は否定している。

それでも涸は感情をねじ伏せ呂淳の瞳を抱きこむように覗きこむ。光が差し込む呂淳の目の中央に自分の姿が写りこんでいるのを確認して涸はうなずく。

呂淳が求める主君の顔をちゃんとできている。

「少し、ゆっくり休んでいて。それからまた始めよう」

そろりと手を伸ばして白い包帯のまきつく左手首を撫でる。そして己のしでかしたことの重大さをしっかりと指先に覚え込ませる。

押し殺した嗚咽が聞こえ始める。

涸はそのまま無言で立ち去ろうとするが袖を引かれ立ち止まる。

あとは抱きしめるわけでもなく慰めるわけでもなくただその声を聞いていた。

涸を見送ったのち袖凜が向かったのは丞相の執務室だった。今まで宮のあちらこちらを歩きまわったがそこへ行くのは初めてだった。様子はどうだった」

部屋に入ると書面を確認し判を押し、あるいは修正を入れという作業を止めずに涸雁が問いかけてくる。

呂淳が手首を切ったと知らせがあったのは今朝。涸雁にだけ侍医から報告があった。そして様子を見てこいと言われたのが袖凜だった。

鴻羽に打ち明けるのに十日はかかるという読みは当たったが、さすがに手首を切るなど想像できなかった。十中八九死ぬ気はなかっただろう。以前より傷が浅く、女官が起こしに来る直前に切ったのだ。ただこんなに傷ついたんだと見せつけて涸を引き止めようとし

ていることは容易に想像がつく。

「起きたあと、少しお話は出来ましたが特にこれといったことは女官によると昨日鴻羽が呼び出されてそのすぐ後に爰様もいらしたそうですわ」

溪雁が眉をひそめて筆を止める。そして再び手を動かし書き終えた書類を脇に置き、新たな書類を自分の前に置いてからようやく顔を上げた。

「喋ったのか」

「おそらくは。それと、爰様に問いただしたのではないのでしょうか。なぜ鴻羽と関係を持ったか」

たつぷりと余韻を持たせて言いながら柚凜は溪雁の顔を見る。忌々しげにあの娼婦めがと呟かれた声は小さかったがききとれた。

「あの方はひどくつらい答えを爰様から聞かされたに違いありませんわ。お父様、今なら爰様を陛下から引き離すいい機会だと思いませんか？ 鴻羽は真実を知った以上上げて斎家を継ぐなんて考えませんわ。それどころかお父様がこれまで築き上げてきたものを全部壊すだけ。幸いお姉さま方の所に男児は二人ずついますし、鴻羽を廃嫡して誰かを養子に迎えればいいでしょう。爰様が鴻羽を選ぶよう後押しも、呂淳を上手く扱う方法もわたくしならできますわ」

そう、鴻羽など必要ない。自分さえいれば斎家は保たれる。名目上は甥が家名を継ぐことになるだろうが、実権は自分のものだ。

「……そうまでして鴻羽を廃したいか」

溪雁がねめつけてくるのに脅えもせず柚凜は顎を上げ不遜な笑みを浮かべる。

「いいえ。お父様の大事なものを護ってさしあげただけですわ。お父様にとって大事なもの家名でしょう」

溪雁は娘から書類に視線を戻し判を押す。

「鴻羽以上に斎家の跡目にふさわしい者はいない。斎家の名に恥を塗るのはお前だけだ。石女で役に立たただけでなく、子供に手を上げるような女には後妻の話すら上がってこん」

煩わしげな父の声に柚凜の頬に血が昇る。

継子をぶつたことは夫とその場にいた者以外は知らないと思っていた。よもや父の耳にまで入っているなど思ってもみなかった。

震える手で柚凜はここを出たらあとでこっそり返しておこうと思っていたものを取り出す。

「……呂淳が眠っている隙に持ち出してきました。これをお父様に渡すことは万にひとつぐらいはあると思います」

ゆるりと歩み寄って柚凜は溪雁の卓の上に短刀を置く。彭軍師の形見である短刀を。

「どうぞ、ご有意義にお使いになつてください。お父様の大事な鴻羽のために」

言い捨てて柚凜は身を翻し部屋を出る。

彼女を引き止める声はなかった。

柚凜から呂淳のことを聞くなりすぐに爰の執務室へと向かったが爰はいなかった。補佐官に無理を言っただけで待たせてもらえないことになったが座っていることが落ち着かず、部屋をうろろし三度窓辺に立ったところで爰が戻ってきた。

「呂淳の容体は？」

「そんなに深い傷じゃなかった。だから何の心配もしないでいい。別にお前が悪いわけじゃないんだからそんな顔しないでよ」

無理に作られた爰の笑顔は歪で焦燥と後悔が透けて見えてしまっていた。

「俺にも責任があるだろう」

歩み寄って顔を覗きこもつとすれば爰はうつむいて素顔を見せようとしないうとしない。

「ワタシは全部分かった。呂淳がお前を嫌いなことも、自傷の癖も、自分が為すべきことも。本当の母上がお前に見殺しされたって聞いたってお前との関係を断とうとしなかった。どうせ溪雁には今回のことは伝わって側近にも伝わる。六年かけてようやく呂淳が認められ始めたっていうのにこれでまた最初からやり直した。これがワタシの責任じゃなかったらなんだっていうんだ」

吐き出される自責の言葉に鴻羽は無言で爰を抱き寄せ小さな背中に背負っているものをすべて払い落とそうとするように背をなでる。「俺は、お前のためなら今持っている全部捨ててもいいと思っていたが、違った。捨てなければならぬんだ。……お前への想いも」

爰が体を強張らせるのがわかる。「許されるのなら、お前の側にいたい。だがお前を苦しめてまで我を通したくない。爰、今のお前に俺は必要か？」

離してしまわないように腕の力を強めてしまいそうになるのをこらえて問いかける。

ここで時が止まってしまえばと矛盾する想いを抱えながらじつと返答を待っているとその胸を押された。

言葉はない。それでも答は明確だった。

鴻羽は奥歯を強くかみしめ腕を解く。

離れていくぬくもりは余韻もなく雪が解けるより儚く消え去っていく。

「呂淳から命が下るまではこのまま軍にいて大人しくしていればいいんだな」

爰の表情を確認することもせず鴻羽は抑揚なくそう言いながら扉に向けて歩いた。

「それでいい」

返事が聞こえて視線を背中に感じたが、鴻羽は気のせいだと言いついて聞かせて退出する。

あるのは喪失感だというのに胸はひどく重苦しかった。

「左軍将軍に呼ばれているので行ってくる。すぐ戻る」

呂淳が手首を切つて五日後、溪雁はそう言つて部下の不安と訝りの混じった顔を確認し部屋を出る。

そして廊下を伝いながらゆるりと自分の歩んできた道を辿っていく。

時代遅れの軍国主義者である彭吾准を追いだし、国土を穀物で満たし内政を手中に収めそのうえ妹が王の寵愛を受け何もかもが順調だった。

ただひとつ問題だったのは世継ぎである。第一王子が公表しているよりもずっと重篤な病を繰り返して年を重ねるごとに悪化していることは侍医と王と溪雁のみが知っていた。成人するまで持つかどうかもあやういうえにこの先、王が子を授かる可能性も低く血が絶える危険があるのではと危ぶみ始めたころ苑昭が懐妊した。

子供はできるなら男児が望ましかった。

そして夜明けに産声があがったとき、その力強さに初めは喜びが沸いた。しかしそれは一瞬で絶望に変わった。

よりにもよって半陰陽などとは思わなかった。いくら薄くなっているとはいえ王家の血が混ざっている以上妹は健康な男児を産めないとみなされるに違いない。いつそ死産としておいたほうが思ったが結果は同じだ。

このまま王家の血が絶えらなれば内乱がおこるやも知れない状況だった。ここまで積み上げてきたことを無為にするわけにはいかないと思った。

そして鴻羽の泣き声が聞こえて入れ替えを思いついた。しかし赤子というのは半年と生後間もなくでは違いすぎる。それに鴻羽は産まれた頃より普通より大きかったのもあった。

そして彭家の子供を思いつき一家を苑昭が会いたがっていると言つて呼び寄せた。

第一王子の病状などを包み隠さず話したが、いかんせん信じなかった。そこで諦めることはできず彭家が赤子を入れ替え連れ去ろうとしたとうそぶいて外を私兵で固めさせ強行した。

吾准がどう申し開きしようが王は信じないことを分かった上だった。

湊は殺すつもりだったが苑昭がそんなことをそすれば呂淳も殺すとのめいたために仕方なしに生かした。そして彭一家を遠方へと追いやった。向こうも王の子を護らねばという使命に駆られ大人しくしていた。

下手に騒ぎ立てれば門下生らもそれに呼応し反逆の意図ありとみられ処罰される可能性も十二分あることも重々承知していたのだらう。

例え第一王子が死んだ後に吾准が真実を話そうと誰も信じまいと思っていた。

しかし、時折様子を見に行かせている手の者から湊が苑昭に瓜二

つだと報告が入り始末することを考えだした頃、第一王子が死んだ。成人は迎えたものの濃すぎる血はやはり毒としかならなかったようだった。

当然疑いの目は自分に向いた。あろうことか苑昭までもが疑いはじめていた。

そうして、彭家へ刺客を放ち苑昭も騒ぎを鎮めるのに殺した。

その頃には呂淳がたまらなく煩わしくなっていた。精神が脆弱なところは血も繋がってもいないのに王と似ている。ただ王のように出来ないことは人任せにして自分は遊んでいればいいと考えるほどの阿呆でもなく無駄な努力をしようとする頑なさがどこか彭吾准を彷彿させて苛立った。

その一方で息子の鴻羽はなにをしても人よりもひとつ飛びぬけていた。少々真面目すぎて堅苦しいところもあるが、面度見もよく周囲の評価は上々で整った容姿も相まって人目を惹いていた。

もし、鴻羽が後半年遅く産まれたらと何度思ったことだろう。

気がつけば鴻羽を玉座に立てることばかりを考えていた。

この頃に自分が築いた地盤は確固としたものとなり、あの鴻羽の天性の才があれば可能であると確信すら持ってしまった。

そうなれば呂淳はもはや邪魔でしかなく、愚王であつてもらわねばならなかった。

しかし、まさか湲が生きてここまで戻ってくるとは思わなかった。生死は不明だったが所詮子供と放っておいたのが裏目に出たのだ。

初め姿を見たときには本当に妹と瓜二つで啞然とした。

苑昭が呂淳に真実を告げてしまいそれを信じて待ち続けたのも誤算だった。

鴻羽が湲のふざけた態度に反発を覚えていて安堵していたがそれも束の間のことだ。

そして、呂淳は全てを鴻羽に告げてしまったと袖凜が言ってきた。あれもなにを考えているか分からない娘だ。

溪雁にとって上ふたりと違い利発すぎる三女は不可解だった。そ

れ故に適当なところに嫁がせたが、出戻って来てしまい嫌な予感を感じていた。

鴻羽を斎家に置いておく最後の手段を柚凜も同じように考えていたことで気づいた。

自分と一番似ているのは他の誰でもなく柚凜だ。欲しい物を手に入れるためなら身内だろうと蹴落とし踏み潰すことを躊躇わない。

柚凜の目論見はまだわからないが鴻羽が真実を知ってしまった以上は急ぐしかないだろう。

溪雁は袂に隠した短刀の感触を確かめ軍舎に足を踏み入れた。

仕事があらかた片付き爰は補佐官の入れたぬるい茶をすする。曖昧な温度が胸にたまって思わずため息がこぼれる。

「おつかれですね」
それを目に止めた補佐官の苦笑に爰はみただねと他人事のように返す。

あれから五日。

呂淳が気を取り戻すのは思っていたよりも早く三日前には朝議に出られた。むしろ爰のほうが気鬱から立ち直れずにいた。

呂淳の自傷に対する後ろめたさと胸を穿つ喪失感。

静かに去っていく鴻羽を引き止める言葉は課せられた責任で押しつぶした。それでもしばらく部屋で立ち尽くしたまま最後に自分の背を撫でた鴻羽の掌を思い出そうとしていた。

自己嫌悪にどうしようもない寂しさが絡んでぐるぐると螺旋を下って行くように気分は深く沈んでいく。

「あの、丞相が將軍とお話がしたいと中央の応接室に……」

再び茶を口に含みゆっくりと嚙下していると扉が叩かれ、入ってきた兵卒はそう告げた。

「ワタシと？」

今までさんざん避けてきたのにいったい何のつもりか。考えても仕方ないので行く、と爰が怪訝な表情で答えると補佐官が不服そうな顔をした。

「無視するわけにもいかないだろ。さっさと終わらせてくるよ」

補佐官にそう告げ爰は応接室へとひとり向かう。そして部屋の前にいた緊張した面持ちの兵卒が明らかに安心した顔を見せるのに苦笑して持ち場に戻っていいと言って入室した。

「珍しいね。なんの用？」

長椅子に腰を下ろし爰は正面に座る溪雁を見据える。いつもながらふてぶてしい男である。

「呂淳を大人しくさせる。朝議が滞る」

どうやら呂淳は溪雁が文句を言いに来るほど気を持ち直して積極的に朝議で発言しているようだ。

「王が国を想つての発言をしているなら話を聞くぐらいかまわないだろう。それとも偽物には従えない？」

自分で据えたくせにと爰が鼻で笑う。

「……それほどまでに玉座が欲しいか」

「別に。ワタシは呂淳に任せるつもりだよ。自分がやったことを素直に認め全権を呂淳に委ねろ。そうすれば全ては奪わない」

せめて一言でもこの男の口から自らの罪を認め許しを請う言葉が聞きたかった。

しかし溪雁はまるで動揺を見せない。黒々とした眼ですごむわけでもなく淡々と爰を見ている。

「私は何もしておらん。呂淳も貴様と産まれてすぐ入れ替えられたなどと戯言を言っていたが、だれもとりのあわんだらうな。そんな思い込みで娼婦まがいを將軍職につけるなど恥さらしな真似をするような者に国がまかせられると思うのか」

ようやく感情が湛えられた溪雁の表情は汚物でも見るかのような侮蔑したもので爰は奥歯を噛む。

なんとも汚らしい子供だ。

もう、忘れたと思った嘲笑が耳奥で響く。

買われた貴族の屋敷で事がすんでまともに服を着る間もなく閨から放り出され、床に散らばる報酬の玉を這いつくばって拾い上げているときさんざん自分を弄んだ男は笑った。

惨めで、悔しくてそれでも歯を食いしばるしか出来なかった。

「……自分の欲のために兄上を殺したお前なんか馬鹿にされる筋合いはない」

安い挑発とわかっていても怒りを抑えることもできずに爰は溪雁を睨みつける。

「ひとつ、言っておくが第一王子は病死だ」

視線を受け流し溪雁が静かに告げる。

「嘘だ。そんなこと、誰が信じるっていうんだ」

時期があまりに都合がよすぎる。ちょうど婚姻が整いかけていた頃に没するなど後継ぎが出来ぬ間に殺したとしか思えない。

「好きにとればいい。ただ殺そうと思えばいつでもできたというのは成人した後からというのは不自然ではないのか」

反論の言葉は出てこなかった。だがそれでも爰は頑なに溪雁の言葉は嘘だと思っていた。

「国のためを思うなら、大人しくしている」

吐き捨てて溪雁が立ち上がる。それに遅れて爰は腰を上げ待て、と言ってその足を止める。

「そこまで権力にしがみついてもお前で終わりだ。もう鴻羽は齋家を繋ぐ気はない」

切り札だった。

そう、それさえなければこの男のやっていることなど意味を失う。……身に沁みついた汚さは変わらんようだな。お前が鴻羽を籠絡した目的はやはりそれか」

ようやく溪雁の顔に蔑み以外のものが浮かんで爰は乱雑な足取りで彼に歩み寄る。

「だったらなんだって言うんだ。どっちにしる鴻羽は呂淳に従う。」

さすがに自分の息子の性格ぐらいはよく知ってるだろ」

笑って言いながらも真白い絹に自分で泥を塗っているようで気分はよくなかった。

「そうだな。よく知っている」

そう言い溪雁が袂から短刀を取り出し、媛はそれに言葉を失う。

祖父の形見だった。

「どうしてそれをお前が持っているんだ」

上擦った声で問いただしながら、媛は手を伸べるが刀身が露わになったそれを突き付けられて身を退く。

「後宮に私の手の者がひとりもないと思ったか？ どうせ殺されるならこれのほうがいいだろう」

勝ち誇った笑みだった。

媛は齒噛みして腰にある自分の短刀に手を伸ばしながら、溪雁の意図を探る。

こんなところで自分を殺してなんの得もないはずだ。破れかぶれなどということはこの男がするはずがない。わざわざ、呂淳の部屋を探らせてまで。

「ま」

待て、と言葉を発するより早く刀身は心の臓に到達していた。

媛はそれを呆然と見る。

刃が引き抜かれ短刀は床へ投げ捨てられて、戦場の匂いが鼻をつく。

鮮血にずぶ濡れになりながら、媛は血だまりに落下する体を見る。

そして視線を下ろすと、溪雁の薄く開かれた目とかち合う。

その瞳にもはや光はなかった。

死んだのだ。

斎溪雁は自ら命を絶つたのだ。

媛は呆然とその場に立ち尽くすしかなかった。

「將軍」

卓に視線を落としていた鴻羽は補佐官に呼ばれて顔を上げる。

「これは、削つて、こっちに回せませんか？」

予算の示された文書を補佐官が卓に置き、指で示す。

「ああ、なるほど。それならこっちからも少し持つてくればちょうどにならないでしょうか？」

とんとんと鴻羽が指を滑らすのに補佐官が大きくうなずくいた。

「間違っていますか？」

探るような視線に気づき鴻羽が首をかしげ問いかけると補佐官は悪戯がばれた子供のような顔をする。

「いや、申し訳ありません。すこし將軍がぼんやりされていたのでつい意地悪をついしてしまいました」

「とりあえずはまだ頭は働いてるようです」

軽い口調で返しながらも鴻羽はまだいろいろとわり切れていない自分に内心ため息をつく。気がつくともまだ涸や呂淳のことを考えてしまっているのだ。

気分転換に茶でもと席を立とうしたとき、扉が叩かれた。返事をするところりと兵卒が中へ入ってくる。

「あの、齋將軍、御父君がこられていて左の中央にある応接室にいらしてほしいらしいのですが」

まだ若い兵卒の困惑した顔からして事情はよくわかっていないらしい。左軍側の応接室に父がいるというのは珍しく、もしかして涸と揉めているのだろうかと鴻羽は急いで部屋を出た。

応接室に近い廊下にたどりつくとも見張りの兵がいて鴻羽はそのままのしさに胸騒ぎを覚えるが、兵はとにかく先へと促すばかりで答えてはくれなかった。

部屋に近づくとつれて鉄錆た匂いが濃くなってくる。戦場に立っているかのような錯覚を覚えそうなほどだ。

血相を変えて入口に立つふたりの隊将に何事かと詰め寄ると苦々しい顔で部屋を示す。

「父君が自刃されたそうだ」

そう言つて隊将のひとりが開かれたままの扉の向こうを顎で示す。鴻羽は今聞いたことが信じられないままゆっくりと部屋の中に視線を落とす。

血だまりの上でうつぶせに倒れ伏す男をみてもそれが父だとは認識できなかった。

視線を上げた先には血まみれの涙が腕を組み壁にもたれかかつて立っている。その顔は表情がなかったが、目が合うとわずかに眉が動いた。

「なにがあつた」

部屋に入り、ぴちやりと音を立てて足を進める。

死体の顔は横向きでようやくそれが父とわかった。すぐそばに転がっている短刀は見覚えがあつた。

「いきなり自分の胸をついた。と言つてもこの部屋にいたのはワタシと溪雁だけで、そこに落ちているのは爺様の形見。ワタシが刺したつていわれてもしかたない状況だね」

一瞬それを考えた鴻羽は溪雁と涙を交互に見て自害だろうと鴻羽は断定する。どう考えたところでこれは涙にとって不利でしかない状況だ。

「どうやってこれを持ち出したんだ」

短刀に視線をやると涙が不愉快そうな顔で近くに来るよう言い、声をひそめる。

「…… 袖凜だろうね。お前はとにかくこれ以上事態をひつかきまわさないように言つていて。ここまで来たらあの人は目的を果たしたのかもしれないけど」

「姉上はただ父上に言われてあれを持ち出したんじゃないのか？」

確かに呂淳の部屋に自由に出入りできるのは姉しかいないが、特に意図などないように思われた。

「あの人はお前が思ってるよりずっと頭のいい人だよ。考えなしに命に従うなんてことは絶対にしない。やっぱり一番警戒しておくべきはあの人だったな」

悔しげな爰の呟きに鴻羽は困惑する。なぜ姉がこんな事をする必要があるのか分からなかった。

「……他に俺が出来ることは？」

「明日まで公表は控えて。呂淳にはワタシから伝える。あとは、この人、家に持ち帰って」

鴻羽は改めて父を見やりそばまで行って屈んで目を伏せる。戦地で何度もそうしてきたのと変わらず特別な感情はなにもおきなかった。

そして自分の感情を認識できたのは急ごしらえの仮の棺に溪雁をおさめてからだだった。

あれほど軽蔑していたというのに、涙をこらえねばならないほど哀しかった。言葉はいくつも思い浮かんだがそれは脳裏に留まらず、母にどう伝えるべきかで頭がいっぱいになった。母はそう強くない人だ。回りくどいことはせず事実をそのまま告げるのがいい。

姉は、本当にこの事態を予測しているのだろうか。

そんなことを考えながら出兵の時にだけに開かれる軍舎の東の大門から外に出、鴻羽は棺を担ぐ数人の兵と共に家路をたどる。

もう日暮れ時だった。

茜が藍へと変わり漆黒がそつと四隅から忍び寄ってくる頃、ようやく家に辿りついた。

運ばれる棺に迎えた下働きの者らが蒼白になり、慌ただしく人が行き交いを始める。

「父上が自害された」

何事かとやってきた柚凜は一瞬目を見開いたのち蓋の開けられた棺に歩み寄る。

「本当に亡くなられたのね」

そして死に顔を眺めそれだけを言った。涙も浮かんでいない平然とした様子に鴻羽は姉への不信を抱く。それからすぐ、柚凜が侍女に支えられるようにしてふらついた足取りでやってくる母に場所を譲り、鴻羽は侍女たちに変わりその背を支えるた。

棺の中を覗きこんだ花江かしょうが両手で口元を覆う。そして肩を震わしぼろぼろと涙を零したかと思うとその場で座り込んでその死を否定するかのようによ首を左右に振った。

鴻羽はかける言葉も見つけられずそつとその両肩に手を置く。

「お母様のことはわたくしにまかせて」

問いただしいことはあつたが鴻羽は柚凜に母を任せることにした。

あとは自分でも不思議なほど冷静に葬儀などの準備に取り掛かっていた。

嫁いだふたりの姉たちへ取り急ぎ文を出し、棺が担ぎ込まれるのを見た近所の邸宅がながあつたのかと慌ただしく使いをやってくるがそれにも全て明日にと自ら対応した。

そしてそれらが終わったのち母の部屋を訪れる。薬を飲んで母は眠っているらしく柚凜は傍らの椅子に腰を下ろしその寝顔をじつと見ていた。

「お母様なら朝まで目を覚まさないと思うわ。おまえも少し休んだほうがいいわ。わたくしはしばらくここにいますから」

穏やかで優しい柚凜の声は耳馴染みがいい。つい甘えて従つてしまいたくなるが、鴻羽は姉の横顔を見下ろしながら問いかける。

「短刀を呂淳の部屋から持ち出したのは姉上ですか？」

柚凜は答える代わりに鴻羽を別室へと促した。母の枕元で話すにはさすがに気が引けた。

「気づかれたのは媛様かしら。それでわたくしにお父様が自害だとも言わせたいの？」

素知らぬ顔でそう言ってみれば鴻羽は複雑な心境を隠しもせず表情に浮かべていた。

「なぜこのようなことを。父上が自害すると分かっておきながら」

「あら。お父様がわたくしの言うことなど大きくと思うの？ わたくしがやらなくてもきつと女官の誰かを潜り込ませていたはずだわ」

なんとも心地よい気分で柚凜は微笑む。その一方で苦しげに眉根を寄せる鴻羽の表情は彼女を喜ばせるばかりだった。

「このままなら真実がどうであれお父様の配下は確実に媛様を疑うわ。そして軍側はの人を庇って文官と武官の間の溝が深くなる。

これを収められるのは呂淳だけだけれど、あの子には無理よ。そうしているうちにお父様の後釜を狙って宮中は確実に混乱するわ。軍内でも媛様を疑う人は大勢いるだろうし最終的には媛様を排除して丸く収めなければならなくなる。それに反論する彭門下生も軍要職からはずさなくてはいけなくなるわね。もとよりあの人が彭軍師の孫である確実な証拠も薄いし、彭門下生のほとんどは最後には利用価値がないとみなして離れるわ。でも呂淳は絶対に媛様を手放したりしないしできない、宮中の混乱も収められない。後継もないし、みんな斎家の当主である上に軍での信頼もある血統も才覚も誰よりも秀でているお前を養子に迎えさせて讓位を求めるわ。お父様は命を捨てても玉座にお前を据えたいようね」

「そんなものは、ただの父上の自己満足です。俺は、そんなものは欲しくありません」

「ええそうね。お前が欲しいのは媛様だけでしょう。でも媛様は、呂淳のためだけに王であろうとするわ。お前のことはけして選べない」

「……いつから入れ替えのことを」

目を見開いて鴻羽が抑揚なく問い、二年前かしらと柚凜が答える
と力なく近くの壁に背をもたれた。

「いったい、何をなさりたいのですか？」

苛立ちが見え隠れする鴻羽の声に柚凜は少し考える。

「お前がいけないのよ。欲しかったものを全部持って行ってしまったからわたくしは盤の上からほうりだされてられない駒扱い」

「そんなことを誰が」

「いらなんでしょう。家督を継ぐ人間は嫡子だけだわ。そもそも三人も女はいらない。それに離縁された理由は知ってるでしょう」

鴻羽が産まれた瞬間から自分から斎家の後継ぎという役割は消え盤の上から放り出された。そして一度拾いあげられてまた盤に乗ったが結局子を成せずに妻と言う役割を全うできずに捨てられた。

鴻羽が何も答えられずにいるのに柚凜は微笑を浮かべる。

「……盤の上に乗れないならいつそ打ち手になったほうが楽しいわ。実際みんな駒のように自分に与えられた役割を忠実にこなそうとしているのを見ているのは面白いものよ。わたくしの思うとおり動いてくれたし、呂淳なんて本当に単純。でも、お父様は難しいわね。お父様に勝つかお前に勝つか、どちらかだから負けはないけれど」

どう転んだって自分に失くすものなんてない。

そう、なにも失くしてなんかいない。

「あなたは勝つてもいなければ負けてもいない。その対局は虚しいだけです」

そう言い捨てて鴻羽が部屋を出る。乱暴に扉が閉まり頼りなく揺れていた蜀台の火がふつと消えた。

「本当はわたくしだって盤の上に乗っていたかったわ」

暗闇の中でぼつりと柚凜はつぶやく。

それと同時に喉がひきつり嗚咽がせり上がってきて崩れ落ちるように床に座りこんだ。抱えた膝に顔をうずめてきつく歯を食いしばり、嗚咽が外に漏れぬようこらえる。それでもとめどなく零れた涙で膝のあたりはぐっしりぬれていた。

どれほど抑えようとしても涙は止まらなかった。

「さて、どうするかな」

爰は血にまみれた体を洗い清め着替えたのち、呂淳の元へ向かう。
溪雁は死んだ。

状況を全てひっくり返して。

この状況を好転させられる方法は思いつかない。いや、考えることが出来なかった。

溪雁の自害の目的に気づいたと同時に負けたと思ってしまった。

あの男は自分たちの苦しみを寸分たりと理解せずに逝ってしまった。それどころか罪さえ認めなかった。

そうしてひとつだけ胸に引っかかっていることがあった。

第一王子、兄の死についてだ。

幼少期体が弱かったのは彭軍師からきいて知っている。呂淳は頻繁に顔を合わすことはなかったが、会うときはいつも元気そうだったと言っていた。病死は誰もが疑念に思うほど突然のことだった。

しかし古参の隊将に聞いてみると澆刺としてどんな位の低い者とも話し聡明な人だという印象が強く残っているが、よくよく考えてみれば年に二、三度しか後宮から出てくることはなく、話をしたのはたった一度きりだったと今初めて気づいたという顔をして言った。もしか兄は小康状態の時に精いっぱい自分が生きた証を人の記憶に刻みこもうとしたのではないかと考えて足元がみえなくなりそう。でその考えを振り払った。

真実はもうどこにもない。

余計なことを考える必要はないと自分に言い聞かせたが思考は雪に埋もれていくように消えて頭の中も胸の内も真っ白に染まってしまった。

「こんな時間にどうされたのですか？」

書類に目を通していた呂淳が突然の来訪に首をかしげる。あれか

ら責任を忘れさせないためか彼は言葉づかいを改めたままだ。

「溪雁が自害した。これ持ち出したのは柚凜かな」

同じように洗い清めた彭軍師の形見を出すとびくりと呂淳が肩を強張らす。

「どうして、姉上が……」

「さあ。斎家を護るため、とは違うか」

呂淳の視線が僅かにそらされて揺れる。彼には理解できているようだと思いつながら、媛はうだるげに椅子に腰を下ろす。柚凜のことはこれ以上触れずにこのままであれば、鴻羽が溪雁の後釜に据えられ玉座すら持つて行かれかねないだろうことを話す。

呂淳は驚いていたものの、消沈するわけでもなくどこことなく安堵したように瞳を伏せた。

媛はそれに終わりか、と思った。

ずつと分かつていた。呂淳の繊細すぎる精神に玉座はあまりにも重すぎることには。いい加減ひびだらけの所へ自分の裏切りによって傷は広がりこれいじょう耐えさせるのは難しい。

「もう、終わりにしようか」

そう口に出すのは存外簡単だった。だが想像していた解放感もなかった。

呂淳はひどく不安そうに媛を見やった後、包帯の巻かれている手首を落ち着きなく触りながら言う。

「そうしたら、あなたは鴻羽の元に行くのですか？」

媛はそれに小さく頭をふり微笑む。

「行かないよ。ワタシのいるべき場所は鴻羽の側じゃない」

いたい場所は彼の側であるけれど、それを望むのは自分だけだ。

最後まで付き従ってくれた彭家の者が望んだのは正当なる王家の後継者であること。

「ひとつだけ、我儘言っただいかな？」

媛が首をかしげると呂淳が椅子から腰を上げる。そしてその傍らに跪きその裾に口づけた。

「私はあなたのお側で永遠の……忠誠を誓います」

溪雁の死から二十日余り。

喪も開け、新たな丞相に爰が任命された。それと同時に鴻羽には新たに設けられた南側の国境である白線山脈沿い一帯に駐留されている各軍をまとめる軍団長の役職に就くよう命じられた。実質の左遷である。

「納得がいきません！」

その知らせを受けて声を荒げたのは鴻羽の補佐官だった。他にも右軍の隊将も將軍の執務室に集まっていて皆不服そうだ。

「彭殿ははじめから齋殿を陥れる気だったのではないか。父君は本当に」

「自害だ。父上は間違いなく自害だった」

隊将の言葉をさえぎり鴻羽は断言する。

溪雁の部下が左軍將軍に呼ばれたと溪雁が確かに言っていたと証言し、一方爰の補佐官は急に訪れてきたと証言した。柚凜は短刀を持ち出したことについてはけして口を割らず宮中は混乱している。そこにこの人事だ。

当然のように爰への疑いは濃くなり、鴻羽の左遷で右軍側も不信感を抱き始めている。そしてそれを命じた呂淳の今まで以上にあからさまな爰の重用に文官、武官共々王への不信が募り始めていた。

「とにかく、彭がやるにとしては手順が悪すぎる。話してくる」

まだ爰は左軍側にいるはずだ。

ひとりで行くのはよしたほうが、一応は帯剣しておいたほうがと心配する補佐官らの意見はすべて却下して鴻羽はひとり左軍側に向かう。

そこはまさしく針のむしろだった。警戒心を孕んだ視線がこちらこちらから刺さってくる。そしてちょうど爰が隊将ふたりと歩いて

いるを見つけた。

「少し、話がある」

爰を庇うようにして立つ隊将が顔をしかめる。

「父君の仇討でもなさるおつもりですか？」

「違う。すぐに呂淳……陛下にこの無茶な人事を取りやめるよ進言しろ。このままだとお前の分が悪くなりすぎる」

鴻羽が真摯に見つめる爰の二つの双眸は氷が張っているかのよう
に冷ややかだった。

「これは勅命だ。従え」

放たれた言葉も鋭く研ぎ澄まされたもので、その美貌もあいまっ
て気圧される。

鴻羽は唇を引き結んだ。

爰は王として自分に命じているのだ。返答を考えているうちに爰
は通りすぎていき、鴻羽はやるせない思いでその背を見送る。

ふたりの距離は開いて行く。

それは二度と取り戻せない距離の様な気がした。

鴻羽りゅうは冬には山を滑り降りる一番冷たい風を受ける小さな村に移り住み、斎家は衰退の道をたどっていた。

禁軍の三倍にあたる兵を預けられるその役目は一見榮譽職にも見られたが、李宋いそうとの同盟により近隣諸国は恐れをなし攻め入ってくることはほとんどなくなっていた。実質的には閑職である。

母と姉は王都の屋敷にまだいる。それぐらいのことは許されていた。あれから母の花江かしょうは床に伏せている。出立の頃はぼんやりとしてほとんど会話を成すことが出来なかったが、この頃は庭に出るようになって昔のように会話もできると常に王都の様子を知らせてくれるよう頼みである將軍だった頃の補佐官からの文が届いて安堵する。

次の將軍かと思われるはこの人かと思われていたがなぜか隊將に降格され今の將軍とその補佐官は少々問題のある人物だ。それだけでなく左軍のほうも浚がいつだかろくなものではないと愚痴を言つて男が就いている。軍も揉め事が増えさらに文官たちも内部で対立がおこり大変らしい。

浚は一体これをどう収集するつもりなのだろう。
嫌な予感だけが胸を焦がしていく。

そして王都より長い冬を越えて春を迎える頃には文の数には増えていった。父の側近やら昔自分の下にいた者や、旧友らである。

朝議に王はおるか丞相すら姿を見せることが少なくなたまに来れば私欲に走る官吏の味方をするばかり。派閥の対立も激しくどこが主導権を握るかのいがみ合いが露骨になって朝議がまとまらないとどの文にもあり、皆一様に一度戻つてはこれないかと最後に書き加えられていた。

父が死んでわずか半年である。

こつもはやく歪が産まれているのは異様だった。意図的に、とし

か捉えようがない。

鴻羽はそこで帰郷を決意した。

花の散った禁苑の桃花楼を見上げる東屋にその日ふたつの花があった。爰と柚凜である。

「鴻羽とはお会いになりませんか？」

「会わないよ。分かっているけれど。本当に意地悪だね、あなたは」

爰は肩をすくめて柚凜が持ってきた茶菓子をつまむ。鴻羽が帰郷してきて呂淳に謁見を求めていることはすでに耳に入っている。やはりじつとはしていられない性分のようなのだ。

「別に意地悪するつもりではありませんけどね」

柚凜が不服そうにつぶやいて空になつた茶杯に新たに茶を注ぐ。

柔らかい日差しが降り注ぎ緑が煌めくなかで向かい合う美しい容姿のふたりの様子は春そのものである。だが流れる空気は冷え込んでいる。

「……余計なことはいいから、とにかく尚書連中上手く煽っておいてよ。鴻羽はまだ帰る気なさそう？」

「だから、あなたが直接帰りなさいと言えば済む話ですわ。会ったらついて行きたくなる？」

爰が椅子の背に深くもたれかかりため息をつく。

「ああ、もう本当に猫剥ぐときついなあ」

柚凜が入れ替えのことまですべて知っていることはもう本人から聞いている。どこまで絡んでいたのかまでは問いただててはいない。まかれた種に水をやったただけと言われれば種をまいた本人としてはもうこれ以上聞く気にはなれなかった。

「なら、これはお読みにならないほうがよろしいかしら」

柚凜は胸元から一通の文を出す。うつすらと透けて見える中の几帳面な文字は見慣れたもので爰は泣き笑いのような顔をした。

「中、読んだ？」

柚凜がゆつたりと微笑む。

「弟には恋文を書く才はないようですね。残念ながら普通の嘆願書」
「だと思つたよ。なら中身もだいたい分かつた」

予想した内容をかいつまんで言ってみせると柚凜がくすくすと笑い声をあげる。

「お見事ですわ。あなたはこんなにも鴻羽を理解しているのにあの子は駄目ね」

鴻羽のことを語るときは柚凜は辛辣だ。これが彼女の行動の理由のすべてだろう。

「それでいいんだよ、鴻羽は。だけど先のことを考えるとやあなたにはしつかり鴻羽を裏で支えておいてほしいな。あんまり意地悪はしないであげて」

ただただまっすぐで、だからこそ彼から注がれる愛情は簡単に胸に入り込んできた。

今でもまだ会いたいという気持ちはある。しかし想いを遂げることはできずともその代わり彼に残せるものがあると思うと波立つ心は穏やかになる。

どうしようもない我儘をきいてくれた呂淳は嘆くこともなければ自分を傷つけることもなくむしろ陰鬱さが消えて穏やかな表情でいる。

宮中は騒がしいけれど、自分たち主従は毎日静かで平穏だ。

「ええ。出来うる限りは。今日でお会いするのは最後がよろしいかしら」

柚凜が言うのに涙はうなずく。

そして彼女が帰った後、桃花楼を眺めながら今日も自室でのんびりと書物をめくっているだろう呂淳の元へと帰った。

後宮を出た柚凜はまず父の側近であった初老の男に声をかけられ、悲しげに微笑む。

「……申し訳ありません。丞相様にもう来るなといわれてしまいました。遠方へ追いやられた弟や志半ばで亡くなられた父のために少しでも出来ることがあればとは思いましたが、所詮は女の身。なにも成果を出せずに情けなく思います」

男は瞳を潤ませて何度もいいえと言う。

「お嬢様のそのお優しい心を分からねあの者が悪いのです。……若君はどうされるおつもりでしょうか」

「いまから返答を持って行くつもりです」

けれど、と柚凜は愁いを含んだ瞳をそっと男からそらす。

「弟はやはり陛下と争うのには出来るだけ避けたいと思っているようですが、このまま時を置いても変化がないようであればいずれは……その時は力になってくださいますでしょうか」

男が神妙な顔でもちろんとうなずき頭を垂れて廊下の奥へと消えていく。彼に話を通れば他の父の側近にも言葉は通るだろうと柚凜は口元に淡く笑みを浮かべる。

「姉上」

そして男の消えた反対側から鴻羽が硬い面持ちでやってくる。

「あら、待っていてと言ったのに来てしまったのね。お二方ともお前にはお会いにはならないそうよ。それとわたくしも二度と来ないように言われてしまったわ」

「……そうですか」

固く閉じられた後宮への扉を見つめ、鴻羽がため息をつく。初めからあまり期待していなかったような顔だった。

それから姉弟は静かな回廊を並んで歩く。

「もう戻ってしまうの？」

「……姉上は俺がいない方がいいでしょう」

「そうでもないわ。お前のそういう顔が見られないのはつまらないもの」

微笑みかけると鴻羽の表情が強張った。だが彼はなにも言わなかった。

「本当に、つまらない子」

つぶやいて柚凜は足を止める。鴻羽がその数歩先でようやく立ち止まり振り返る。

「……俺はこのまま戻ります。母上のことはよろしくお願いします」
憐憫するかのよような顔でそう言って鴻羽が先を行くのを柚凜は立ち止まったまま見送った。

他に回廊を行き交う人はなく、木々の葉擦れがやたら大きく聞こえてやけに孤独を側に感じた。

夏に鴻羽は剣ではなく鎌や荷車を持って村の近くの山を兵や住民と共に登っていた。

国境警備、とはいえども攻めてくる敵もおらずここ一年近くは開墾に力を費やしていた。このあたりは土地が痩せてあまり食糧が取れないが、稗畑ぐらいならどうにかなるだろうと開墾を始め、気がつけば似たような環境の近隣の村のあちこちに兵を割いている自分がいた。

畑を増やしたところで人手が足りないのでこれまで手はつけられていなかったが、先のことを思えばやることにこしたことはない。

兵の中には近隣の国より流れてきて傭兵として雇われている者も多い。すでに戦が少なくなった今、彼らが国に腰を据えるのに働き食っていく場所が必要である。

帰郷したものの結局呂淳にも援にも会えず、為すすべもなくここに戻ってきた鴻羽にとっては打ち込めることのあるこの環境はありがたいものだった。

「いや、いや、さすが斎家のご子息ですなあ。お父君を思い出します。昔は食糧が少なくて食いつばぐれて死ぬもんも多かったです

がね、お父君のおかげでそういうこともなくなつて感謝したもんですよ」

何度も同じ話をする老人に苦笑しながら鴻羽は実つた稗を眺める。いくつか村を巡るうちに溪雁に感謝する者の多さに驚かされた。確かに立派な人であつたのだらう、父は。それがいったいどこで間違つてあなつてしまつたのか。

考えたところで本当のところを知る本人はもういない。

もういつそのまま農夫にでもなつてしまおうかとも思うが、そういうわけにはいかない。

すでに王都周辺の州にまでとある噂が広がり始めている。

王は宦官を重用し他の者の言葉など聞かずその宦官も政務をこなさす王とふたりで自堕落に過ごしている。この宦官は傾国の美姫さながらの容色で、王はそれに入れ上げており世継ぎをもつける気配すらない。これまで国が保たれていたのはすべて前の丞相の力によるものであり、その嫡男は有能であるが王を窘めために地方に追いやられたのだ。

などという噂である。

これを聞いたとき鴻羽は頭を抱えた。事態は悪化の一途を辿っている。

爰がなにを狙っているかは明白だった。

国の先を憂う一部の文官と武官はしだいに結束を固め、自分にもう一度王都に戻るよう文がこの間届いた。血の気の多い者は爰を始末すべきだなどの声まで出ているらしい。

そうして秋を迎える前、蒼魏^{そつぎ}へ侵攻する案件が持ち上がった。左軍將軍の発案だつたようだ。これによって反対派と賛成派で大きく割れた。

蒼魏はすでに安定を取り戻し始め攻め込むにはあまりにも危険が大きい。先走つた者が勝手に李宋に蒼魏攻めを促したがさすがに向こうも明確な勝機が見えねば協力はできないと情勢を訝しんでいる。李宋との間にまで亀裂が入ってしまうのはどうあつても避けねば

ならない。

王にこの事態をおさめてくれと何度訴えても国の行く末を左右する事態だというのにまるで無関心な様子について先を思いやる官らは王を見限った。

「どうかご決断を」

元補佐官が自ら宿舎である小屋に來訪してきて現状を告げたのちに言った言葉に鴻羽は眉根を寄せる。

「それは反乱の先導に立てということか」

「そうです。讓位をお求めください。軍の皆はあなたに仕えることを不服としない。文官らも齋家の当主であるあなたならば相応しいと」

父の思惑通りに事が進んでいくのに鴻羽は瞳を伏せる。

「……王陛下はどこへ追いやるつもりだ。彭も、もう置いてはおけないだろう」

讓位させた後はふたりとも王都に留めておくわけがない。

呂淳はそれでいいのだろう。王位は彼の心に重すぎる。すべてを棄てて援さえ側にいれば心安らかにいられる。

それが呂淳の自分への復讐なのかもしれない。

「湖州こしゅうに古い離宮があります。そこにおふたりを移せばよろしいでしょう。齋殿、彭殿はいつたいどうされたというのでしょうか。あなたの方は決して愚かではない」

鴻羽は静かに愚かでないなら、この情勢の中で何をすると元補佐官に問いかける。

しばらく思索したのち元補佐官は顔を蒼ざめさせた。

「まさか。あの方は……」

援は溪雁の策を利用して官吏の浄化を行う気だ。

反目する武官と文官は国の危機というひとつの試練が放り込まれればまともな者はいがみ合っている場合ではないと結束する。

私欲にしか頭が回らなかつたり先の見通しがろくにできない者は王の無気力につけいつてただ好き放題し右往左往するだけ。

そして水と油のように優秀な者とそうでない者が綺麗に分離される。

余計な火を起こす油を取り除けば澄んだ水が残る。

その危機を乗り越えた後も文官と武官を結束させるのに広く名が知れ畏敬をもたれる斎家の当主であり、十数年武官として軍に属した自分は態がいい。

湊が君主として国の繁栄を望むならば、それが叶えるのが自分のすべきことならば。

「……俺はその意思を無為にするわけにはいかない」

鴻羽の声は悲愴なものだった。元補佐官はその様子に言葉もなくなされた。

そうして三日の後、鴻羽は王都に向けて足った。

反乱軍が王都へとの報告が入ると一気に王宮は騒然となった。

始めわずか五十の兵のみの軍勢は王都に近づくにつれ各地の兵が
尽き従い三千まで膨れ上がっていた。

すでに鴻羽につくつもりの方達は息をひそめて今か今かと待ちわ
びている。

朝議が開かれこの事態になっても玉座は空のままだった。

これは王を見捨てるべきかどうか、立ち向かうべきかと決めかね
ている者達は不意に現れた丞相の姿に口を閉ざし静まりかえる。

纏う衣装の色は紫。

王のみに許されたはずの禁色だった。

「敵の数は三千。我らが三万の軍勢が負けると思つか」

玉座の前に立ってさも自分が王であるかのようにふるまう媛に誰
もなにも言わなかった。

ただ圧倒されていた。

柳眉、長い睫毛に縁取られ黒曜石の嵌った切れ長の目、通った鼻
梁、花卉のような唇。

それらが完璧に配置された顔に浮かぶ傲岸な表情は天上の神のよ
うに思えるほどだった。

「兵は全員正門に集まれ。策はいらない。迎え討て！」

高すぎずかといって低いわけでもない耳障りのいい声は衣擦れの
音すらない場内でよく響いた。

余韻が消え静寂の後に人々がそれぞれの道へと動き出す。

媛は人が消えてから玉座に腰を下ろす。

空になった部屋を見渡し、なにかを想起するように瞳を閉じてし
ばらくしたのちに静かにその場を去った。

王都の門は待ち構えていたかのように開かれ、王宮の正門へと続く大通りを鴻羽は兵を引き連れゆるやかに進む。何かと不安とともに様子を見る住民らは先導に立つ鴻羽の姿に表情を期待に満ちたものに変える。

門が緩やかに開かれ、広場にはぎつしりと兵が詰めていた。しかし彼らは腰に下げた剣を引き抜くことはなく、道を開け前の者が跪くとそれにならって後ろ者がと波が引くように広がっていく。鎧の奏でる音がさんざめいてまさしく波音のようだった。

「貴様ら何のつもりだ！」

宮殿の入口に立つ鴻羽よりも背丈も胴周りも一回り大柄な壮年の左軍将軍が唾を飛ばし罵声を浴びせかける。それを冷ややかに見ながら馬から降りた鴻羽は道の真ん中を悠然と進む。

金属音が跳ねる。

曇天の隙間に残る陽射しを切り裂いて刃が交錯する。

「通してもらわねば斬るしかありません」

間合いを置き鴻羽は淡々と言いながら、音もなく燃えさかる蒼い火を灯す瞳を左軍将軍に向ける。

「若造がつー！」

上からたたきつけるように振り降ろされる刃を交わし鴻羽はそのまま流れるように剣を操る。

銀の煌めきに深紅が尾を引く。

地面に伏した左軍将軍の巨体には見向きもせず鴻羽は前へと進む。立ち向かうつもりで剣を握っていた兵らは一斉にひれ伏した。

仕掛けられた変革の筋書き通りに動いている自分を滑稽だと思いつながら先に進むと尚書らが自分たちを迎えた。その傍らには見覚えのある左軍隊将がふたりいた。このふたりは援が信を置いていたはずだ。

「陛下と彭丞相は？」

戦う気はないとみて安心し剣を納め、鴻羽は彼らに問いかける。

「讓位なさるよう説得しようとしたのですが……」

もとより権力の固執するそぶりを見せない気弱な王だ。多勢に敵にまわれれば大人しく讓位すると踏んでいた尚書らは頑として譲らない王に困惑していた。しかしそれは鴻羽も同じだった。

ここで讓位すれば全てが終わるはずである、そういう計画のはずだ。なぜ拒む必要があるというのだろうか。

「齋殿、彭丞相よりの預かりものです。本来ならば全てが終わったのちにと言われたのですが」

苦しみに耐えるような顔をして隊将のひとりがそつとひとつの包みを袂から出し、鴻羽に渡す。

白い絹の布で包まれたそれを開いて体の芯から熱が消えさった。

「ふたりはどこに！」

声を張り上げると尚書が肩をすくめて後宮のほうにとか細い声で言つて、鴻羽は駆けだす。

媛が託したものは腕輪だった。艶やかな黒真珠と瑠璃真珠の、伯母の形見であるはずのもの。

後宮に飛び込み、呂淳の私室へ走るが誰もいない。脅える女官に問いただせばふたりは禁苑へと出て行ったということだった。

鴻羽は方向を定められず苛立ちながら広い禁苑をあてどなく駆ける。

ふと、木々の向こうに頭を突き出す桃花楼が目に入る。

根拠はなかった。だが確信はあった。

「早まるな……」

祈りながら鴻羽は楼閣へと向かった。

「雨、降りそうだね」

高樓の二階の小部屋で座りこむ媛は窓の外の空を見る。少しばかり覗いていた薄青も灰色へと変わっていた。

土と緑の匂いをたっぷりと含む湿った風が湊の髪を揺らめかす。

「湊……」

呼びかける呂淳に淡い笑みを浮かべて湊はその手を取り両手で包みこむ。

壊れやすい物でも扱おうようにそっと。

「お前は、後は好きに生きていいよ。鴻羽なら何とかしてくれるだろう」

すべてを鴻羽に託すことを許してくれた呂淳を最後まで付き合わせる気はさらさらない。

湊は彭軍師の形見である短刀をゆっくりと引きぬく。刃に映る自分に死に対する恐れはなかった。

「呂淳？」

刃を首へとあてがおうとしたが、止められて湊は訝しげに刃を握る手首をしつかり握る呂淳の顔を見る。

泣く寸前のような顔をして呂淳が短刀を奪い取る。

「返して。もう、ワタシは、呂淳……」

がたんと一階で扉が開く音がする。

鴻羽だ、と湊が思うそばで呂淳が己の首に刃を当てていた。

「駄目。呂淳、やめて」

呂淳が死ぬ必要などありはしない。

「先に逝って、お待ちしています」

階段を駆け上がる足音。

湊は立ち上がり手を伸ばす。だがそれより早く呂淳が喉を掻き切った。

「呂淳っ……」

かしぐ体を受け止めて自分の視界の端で噴き出す血を呆然と眺める。短刀が床に落ちて呂淳がしがみついていた。

「……………れ」

かすかな声が耳に届いて湊は目尻から雫を伝わす。

精いっぱい母の代わりに呂淳を幸せにしてあげるつもりだった。

なのに結局王位という重圧を背負わせ裏切りに脅えさせ、なにひとつ喜びを与えることができなかった。

ここでようやくしがらみから解放してやれると思ったのに、どうして死を選ばせてしまったのだろうか。

足音が近づいてくる。

半ば放心していた爰はそれに我に帰り呂淳の体を横たえて床に落ちた短刀を拾い上げた。

「ごめん、ごめんね。すぐ行くから」

血にぬめる呂淳の頬を撫でて爰は今度こそ短刀を持って自分の首へと持っていく。

その時、扉は開かれた。

「爰っ！」

誰よりも会いたかった人が自分の名を呼んでそこにいた。

爰は顔を歪め、刃を首にあてたまま愛おしい人を両の目に映した。

急に爰が死んでいくのを見るのが恐ろしくなつて短刀を奪った。

死なせたたくない、とは不思議と思わなかった。下の扉が開く音はたぶん鴻羽だと気づいてふと自分の感情の真実が見えた。

共に生きたところでもはや爰の心は鴻羽の元にあり続ける。それが嫌だった。ならばいつそ爰が死んだらなんの心配もいらなくなるけれど爰を失くしてひとりで生きていくこともできないから、共に死ぬつもりだった。

困った顔で自分を見上げる爰の顔にふとずっとこんな表情ばかりだと思ひ出す。

爰の笑顔が好きだった。

鴻羽と引き離してからはずっと寂そうで、笑っていても瞳の奥は悲しげだった。

自分がここで死んだら爰は昔のように笑えるのだろうか。けど鴻

羽の隣にいる涸は見たくない。

もしかしたら後を追ってきてくれるかもしれないけれど、自分が選ばれることはやはりないかもしれない。

どっちにしろ死んだら何も見なくてすむ。

それが楽だろう、と気軽に己の首を切った。

抱きとめてくれる涸の声が遠くて寂しくなってくる。

どこにも行かないでくれ。

最期に喉を震わした言葉に呂淳は思う。

自分はただ涸を愛していたんだと。

鴻羽は喉に刃をあてているもののまだそこにいる涸を見つけてま
ず安堵した。

「どうして……」

しかし、その傍らの血だまりに横たわる呂淳の姿に呆然とし、そ
のあと幼い頃の日々が頭を巡って目頭が熱くなる。

「鴻羽、あとはたのんだよ」

だが涸が首に刃をあてたままそう言っただけに沈む間は無かった。

鴻羽は首を横に振り覚悟を決めた顔に焦燥に駆られた声で呼ぶ。

「よせ。ここで死んで何の意味がある」

剣を下ろせと懇願しても涸はしつかりと柄を握りしめたままだっ
た。

「ワタシだけ生き残るわけにはいかないんだよ。むしろ生き残った
ら何の意味もなくなる。呂淳の死も何もかも無駄になるんだ」

涸は冷たくなった呂淳を見下ろしている。その滲んでいる瞳から
涙が零れ落ちていた。

そうしてその首筋からは薄皮が破れ血が伝い始めている。

「罪なら俺も共に背負う。ひとりですべてを背負おうとするな。だか
ら、生きる。一緒に生きてくれ」

心のどこかで、傲慢な自信があった。

すべてを終えて手を伸べたならば、爰はその手を取ってくれと。だが目の前の爰は短刀から手を離そうとしない。ほんの一步ほどの距離ならば力づくで刃は奪えるだろうが、この距離では手を伸ばすより刃がその喉を裂くほうが先だ。

どうすればいい、と鴻羽は自分に問う。

しかし問いかけだけが頭の中を延々と周り答に辿りつけない。

「お前に託したいんだ。お願い、繋いでいって。ワタシたちの血の染みたこの紫秦の地を」

爰はまっすぐに自分を見ていた。

どこまでも深い闇色の瞳が涙で煌めいていて、その目が細められる。

口づけの後によく見せるはにかんだような愛おしい笑顔。

「ありがとう。幸せだったよ」

視線を合わせたまま爰は刃を引いた。

白い喉元から深紅の花が風に散らされ舞い飛ぶかのように血が噴く。

その体がゆったりと前のめりに倒れてその場に縫い止められるように動けずにいた鴻羽はのろのろと前に進む。

崩れ落ちるようにその場にしゃがみこんで爰を抱き上げた。

「爰」

頬にかかる髪を取り払って名前を呼びかける。

閉じられた瞳の長い睫毛は震えない。薄く開かれた唇から吐息はこぼれない。

愛していたすべてが温度を失くしていく。

「……っ！」

額を合わせて、鴻羽は嗚咽もなく泣いた。

その涙と爰の頬を濡らす涙と血が混ざり合い溶けていく。

降り注ぎ始めた雨の音は遠いようでとても近い胸の内で鳴り響いている気がした。

柔らかい春の風を受けながら柚凜は盤の上の駒を滑らす。対局相手はいない。

鴻羽が反乱を起こして十二年になる。

呂淳と爰のふたりが死んでしばらくは鴻羽は塞ぎこんでいた。待ちわびた瞬間だったが、特に何の感慨もなかった。しかし呂淳と爰の最期の様子を聞いたとき無性に呂淳が妬ましく思えた。

呂淳は爰を選んでもらえたのだ。彼は最期の最期に本当に欲しかったものを手に入れた。

自分には何も無い。

五日前の対局相手であった鴻羽も昨日没してしまった。外では葬儀の準備で騒がしい。

玉座についてからの鴻羽は無心に政務に打ち込みその仕事ぶりに鴻羽を選んだ者たちはとても満足げだった。しかしながら、その一方で鴻羽は夜、昏倒するまで酒を飲むことが増えた。眠れないから、と彼は言っていた。

体が慣れていったせいも次第に酒の量は増え、この頃は酒ではなく薬を飲むようになっていた。そのせいで午前中は政務にあたれない日々も増え、即位して半年したところに妻を迎える気がないと示し養子に迎えた一番上の姉の当時十五才だった長男に少しずつ仕事を任せるようになった。

ただひたすらに鴻羽は爰を失ったことを悔やんでいた。夜半に禁苑の隅に作らせた墓碑の前でぼんやり佇んでいることは度々だった。それでも託されたものだけを頼りに日々をすごしていたが、ついには散った桃の花の後を追うかのように服毒し、逝ってしまった。

死に顔はずいぶん安らかなものだった。その傍らにはひとつの腕輪があり、それも一緒に埋葬するよう柚凜は命じた。

「大叔母上。こちらにいらしたのですか。父上が探されていました

よ

甥孫である十歳の少年が部屋に入ってきて少し戸惑つように盤を覗きこむ。

「……お相手しましょうか？」

よく懐いていた大伯父を失くして今朝も目を真つ赤にしていた甥孫はまた泣きそうな顔をして柚凜の向かいに座る。

「かまないわ。わたくしに用があるのでしょ」

柚凜が立とうとすると甥孫が先に立って手を伸べる。血のつながりはそう近くもないのに本当に鴻羽とよく似た子だ。彼女はふんわりと微笑んでその手を取らずにひとりで立ち上がる。

そして残された盤を一瞥して胸の内ですりこちる。

所詮は虚しいひとり遊びだ、と

白蛾の時代は短いながらも国の崩壊のぎりぎりのところにあつた時代だつたと、後に歴史家は記す。

その中で勇猛果敢な武官として国を護り、そして国と共に絶えかけた秦家の血を絶ち新たな礎を築きあげた斎鴻羽という人物は紫秦国の中興の祖と言って差し支えないだろう。惜しむべくは妻をもたず直系の嫡子をひとりも残さなかつたことだが、甥とその息子をよく養育し相続で混乱をきたすことはなかつた。

そのように残した功績が華やかであるがゆえにその最期だけは不自然であつた。暗殺もささやかれたが遺書は紛れもなく本物だつた。彼が何に絶望したのか人は知ることはない。

ただあるのはそれより百年たつた今日こんにちの紫秦が豊かで強大な国である事実のみである。

心地よい空気をたつぷりと吸いこんで紫秦国の第一王子である稜明は口元を緩める。

春を迎えたものの夜にはまだ冬が居座っていてつい風邪をひいてしまい十日。体調はとつくによくなったというのにいつまでも部屋から出してくれない母の目を盗んでようやく外に出られた。

母にも困ったものだ。自分はもう十二で決して赤子ではないのに心配性すぎる。それも自分の体が弱いせいということは十分わかっている。口には出せない。

白木蓮の天蓋の下をそぞろ歩きながら稜明は春風に乗って聞こえてくる子供の泣き声に辺りを見回す。近くの東屋へ足を向けると七つ年下の異母弟を見つけた。

「呂淳、どうした？」

しゃがみこんでしゃくりあげている呂淳にあわせて稜明は屈みその頭をなでる。泣き声の中に伯父上という言葉があつて彼は苦笑した。

呂淳の母の兄である丞相はなにかと厳しい。そして叱られるたびに呂淳は泣いて母親の元に甘えにいつているはずであるが。

「どうして、ひとりでいるんだ？」

「母上はお加減が悪いので……」

「そうか。いい子だな、お前は」

なによりも真つ先に母親の元に行きたいだろうにこうやってきちんと我慢が出来るところはいいところである。

「よし、今日は僕がお前の話を聞くとよ。丞相殿はどうせまた大したことないことで怒つたのだろう」

稜明は呂淳を長椅子に座らせ自分もその隣に座る。

「算術の問題が十問中六問しかできなかつたのです」

「正解のほづが多いじゃないか。それにまだ算術は始めたばかりな

のだろっ」

「でも、鴻羽つひは全部できたそうす」

呂淳より半年年上の彼の従兄の名前に稜明はなるほど、と思う。丞相の嫡男である鴻羽は丞相の幼いころを彷彿させるような神童であるらしい。何度か会ったことはあるが礼儀正しくいい子であった気がする。

年も一緒なのでなにかと丞相は比べるようだが、それは弟の芽を摘むようで少々面白くない。

「別に鴻羽と同じぐらいに出来る必要はないんだよ。人はみんな違うんだ。呂淳は呂淳で頑張ったならそれでいいんだ」

そう諭すと呂淳は納得いかない様子でうなずいた。

「私は兄上のように賢く強い人になりたいです」

「僕は強くないよ。禁苑に出ることすらままならないぐらいにひ弱なんだ。だから勉学しかすることがない。だから別に賢いわけでもない。むしろ僕は呂淳が羨ましいよ」

そこまで言って稜明は苦笑する。

「なんでも人のほうがよく見えるんだよな」

でも、自分の弱すぎる体はどうしたって好きになれそうにない。

「はい……」

二人揃って言葉を失くし黙り込んだが居心地悪い感覚はなかった。むしろ同じ感傷を抱いている実感があって弟がますます愛おしく思えた。

「あらおふたりが一緒なんて珍しいですわね」

春風を思わせるような愛らしい声が聞こえて兄弟は同時に振りかえる。そこにいたのはまさしく春の化身のようなふんわりした美しい少女だった。

「姉上……」

呂淳がそう言うが、少女、柚凜ゆうれんは彼にとっては従姉である。鴻羽の姉で十一。たんに鴻羽が姉上と呼ぶので呂淳もそれを真似ているだけである。

「姉上が先に見つけてしまいましたね」

その後ろからは鴻羽が残念そうな声で言いながらやってくる。鴻羽のほうも人目を引く整った顔をしていてふたり並べば場が華やかにさすが美形一家として知られる斎家の子供だと思いつながら稜明はちらりと隣の弟を見る。

呂淳の母親もその容貌は国一と謳われる。狭い世界ながら女ばかりの後宮で過ごす稜明はそれが誇張ではなく事実だと思っている。あんなに美しい人はきつと一生見ることはない。しかしながらその息子の呂淳の目鼻立ちは整っているが華やかさはなく、妙に印象が薄い。鴻羽と並ぶとその差が歴然としていてそれが劣等感に拍車をかけているようだ。

「稜明殿下、お体はもうよろしいのですか？」

鴻羽が綺麗に一礼してそう問うてくるのに稜明はこの通りと笑って見せる。そうすると心からの笑顔を鴻羽が浮かべた。

眩いその姿に少し苦い物を覚えてしまう。

光の元に影が出来ることなどまだ知らないだろう。そのうち気づいてくれればいいが、不安を覚えてしまう。

「隣、失礼してもよろしいですか？」

鴻羽と呂淳が場を離れると袖凜が小首をかしげて見せる。自分より一つ年下のはずの彼女はいつもどこか大人びて見える。

「どうぞ。……ふたりは仲がいいな」

何のかんと言っても鴻羽と一緒にいる呂淳は笑顔を見せて楽しんでそうに落ちた白木蓮を拾い集めていた。

「ええ。今はまだ子供ですもの。ひとりで遊ぶよりふたりで遊ぶほうが楽しいですわ」

多分に毒を含んだ言い方だった。何度か言葉を交わしたことはあるが、その中で初めてきく彼女には不似合いな声だった。

「なにか、面白くないことでもあったのか？」

「ええ。嫁ぎ先が決まりましたの。まだ四年も後ですけれど」

「どんな方なのだ？」

「八つ年上で亜州あの長官の御嫡男。そのままお父様のお仕事を継がれる予定ですって。お姉様方はもっと重要な地方の貴族の方々に」

州長官といえは州をまとめるために中央より派遣される官吏である。州をまとめる、といつても各地の領主である貴族らの声は大きく、様々なことで中央と板挟みになる面倒な職だ。要職と言えは要職であるが、派遣されるのはそう家格の高い家でもなく齋家の令嬢が嫁ぐには不釣り合いではある。

「丞相殿もなにかお考えあつてのことだろう」

とは言つたものの亜州によしみを持ちたいのならやはり最も多く土地を所有している貴族の元へ嫁ぐのが妥当で、州長官に嫁ぐのはあまり益などないように思えた。

「お父様はわたくしが邪魔なだけなのですわ」

拗ねた物言いは年相応で、しかしながら酷く深刻なものだつた。

その横顔に何か急に胸が苦しくなつて、どうにかしてやりたいと思つた。

「そんなことはない。きつと、君の幸せを願つてのことだ」

しかしなんのひねりもない慰めの言葉しか出てこずに稜明は自身に落胆する。

「……お父様はわたくしが何を幸せと感じるかなんて知りませんわ。そつですわね、せいぜい型にはまつた女の幸せぐらいしか知らないでしょう」

物憂げに長い睫を伏せて袖凜がうつむく。

君にとつての幸せとはなんだろうか。

そつ、問いかけようとしたとき自分を呼ぶ声が離れた場所から聞こえてきた。母の清妃せいひとそのお付きの女官達だろう。

「殿下、稜明殿下！」

長椅子から立ち上がり駆け寄つてくる母を稜明は迎える。

「そつ慌てずとも私は遠くへは行きませんよ、母上」

抱きすくめられて気恥ずかしい思いをしながら母の薄い背を撫で

る。

自分が床に伏せるたびに母はやつれていく。一晚中ついて看病をしたり、自分と同じわずかな粥をすすったりしているのを見ていと申し訳なくなる。

「なりませんよ」

呂淳と齋姉弟に別れを告げて後宮の自室へと戻る途中、稜明の手を引きながら清妃が強張った声で言う。

「齋家の者たちは殿下を床に縛り付けようとしているのです。先日の風邪もあの女が呪詛をかけたのに違います。そうして陛下のご寵愛も玉座もなにもかも手に入れる気なのです」

見上げた母の顔は蒼白でその瞳だけがいやにぎらついて見えた。

そこに昔の朧気な記憶にあるたおやかで美しかった頃の面影はない。それでも父である王は頻繁に母の元へ訪れる。

父は王としては利口ではなく内政は丞相に任せきりでその役目を果たせない人だけれど、一度愛情を注いだものへはかわらず愛を注ぎ続ける人だ。

こんなにも弱って後継としては先も望めない自分のためにも床へ来て頭を撫で、涙を見せてくれる。

自分のこの体が丈夫であれば誰も苦しむ事もありはしないだろうに。

幸福か、と稜明は口の中でごちる。

そのときふわりと花弁が落ちるように柚凜のことが思い出された。問えなかつたことを次に会ったときには訊いてみようと思った。

ただ、なにか出来ることがあるのならそれを叶えてやりたかった。

それから二年が経ったが稜明が柚凜とその話をすることはなかった。

時を経るにつれ体調は悪くなる一方でこの頃は心臓が痛むように

なつてきて自室から出る機会も減っていった。それでもたまに禁園にできれば柚凜の姿を見ることはあった。間が悪く帰り際でゆっくり話をする時間はなかったがただ姿を見られるだけでどこか浮き足だった気持ちになれた。

「今日も駄目だったな」

小康状態で禁園に出たが柚凜どころか今日は呂淳も熱を出して会えずに稜明は落胆しながら樹上を見上げる。

そこには鶇つくみの巣があった。二週間ほど前に見つけ、床に伏せつついる間は呂淳から巣の様子を報告してもらっていて雛が孵ったようだとおとついで聞いた。

親鳥が餌を運んできて雛の鳴き声がする。

飛び立つ所は見られるだろうか。

葉擦れと鳥の囀りに耳を浸しながら稜明は目を伏せる。なんとなくに生きている実感がした。

そうしてそれから三日あまりたつと回復した呂淳と巣を見に来る。その後は禁園の後宮から近い場所を巡っていく。それが数日続けられるようになった。

ただその時はどうしても健康な弟と違ってすぐに息が上がってしまつて死に近い場所にいる気になる。

足を休めた場所にあつた榆の樹の枝が下がっていて稜明は何気なくそれに手を伸ばして掴むと簡単に折れてしまった。断面を見るとどうやら中が虫にでも喰われたのか朽ちていた。

「兄上？」

笑い声を漏らすと呂淳が小首をかしげる。

「この樹は見た目は健康そうでもほら、中はこれだ。なんだか僕みたいだろう」

冗談めかして言うと呂淳は返答に困っていて稜明はその頭を軽く叩く。

「……兄上にはお元気でいてもらわねば困ります。私は王になどなりたくはないのですから」

「そうか。でもなつて貰わねばならないよ。僕はきつと父上より早く死んでしまつたらうからね。王家の血を引き継ぐのは呂淳しかないんだ。なに、職務が面倒なら世継ぎだけ残すことを考えてあとは父上のように政は丞相殿に任せればいい。ああ、その頃には鴻羽が丞相かな。でも、お前は賢い子だし、鴻羽と一緒に間違ひなく父上よりもいい王になれる。あ、僕がこんな事を言っていたなんて誰にも言つてはいけないぞ」

口到人差し指を当てて内緒だと稜明は呂淳に笑いかける。

「鴻羽が丞相では嫌です。きつとみんな私より鴻羽の方が王らしいと笑います。でも兄上なら鴻羽に負けません」

袍ほろを握りしめながら呂淳が卑屈に言う

呂淳の鴻羽へ対する劣等感はずばかりだ。学問で先をこされ、背丈も追い越され、この頃鴻羽は馬術を覚えて器用に乗りこなしているらしいが呂淳は馬に近づくことすら怯える。

同い年で従弟同士だからこそなおさら周囲は比較する。

そして噂は流れて本人の耳に入る。

「昔から言っているように鴻羽に勝つ必要はないんだぞ」

何度そう言つても呂淳は絶対に鴻羽より上位に立たねばならないと思ひ込んでいて聞かない。

意固地になりすぎているのだ。何か変わるためのきつかけを自分が与えられればと思うが出来るとは思いつかなかつた。

しかしながらその時はそれほど深刻に呂淳の卑屈さを考えなかつた。いずれ、きつと変わつてくれるだろうと無責任な期待までしていた。

だが五日後、体全体にのしかかる倦怠感と微熱に伏せついている時に弟の心がどれほど追い詰められていたかを知ることになった。

うつらうつらしていると外が慌ただしく、側にいる女官に何があつたのか様子を見に行かせるとうつらうつらとやがて鴻羽が樹から落ちたらしいとのことだつた。

幸い足を捻つて肩を脱臼した程度で済んだときいて安心した。し

かし時間を経て詳しいことを知ってすつと血の気が引いた。

鴻羽は榆の樹から落ちたのだ。あの内側が朽ちた榆の樹から。

たまたま様子を見かけた女官の話では呂淳が樹上を指差してなにか頼み事をした後、鴻羽はうなずいて樹に登ったとうことだ。

ただ鴻羽本人は自分で上つてみただけで特に呂淳に何か頼み事をされたわけではなかったと頑なに言い張っているらしい。危ないことをさせたことで呂淳が丞相に叱られないためではないかと女官達はひそひそと憶測している。

稜明は母が側を離れると筆をとり呂淳に手紙をしたためる。

雛の様子を聞きたい。

その一文書いて、迷いながらもそこで筆を置いて侍女に手紙を届けるよう頼む。

呂淳は雛はまだ飛び立っていないと返信はよこしてくれたが、翌日になつても部屋を訪ねてくることはなかった。

さらに翌日、すこし体調がよくなつてとにかく呂淳に会いに行こうとする道すがら、斎姉弟に出くわした。

鴻羽は左腕を布でつり足を引きずって見ていてただで痛々しかった。

「大事なくてよかった」

「お騒がせして申し訳ありませんでした」

今日も呂淳と遊ぶのかと問うと一緒に軍盤をするのだと鴻羽は笑う。そのなんの曇りのない笑顔に胸が痛んだ。

「……鴻羽は呂淳が好きだな」

そして迷いなくはいと答えた鴻羽にこれからも仲良く、と言っしかなかった。

「かわいそう、ですわね」

だまってふたりのやりとりを見ていた柚凜が、鴻羽が先に歩き出してからぼつりとつぶやく。

「……鴻羽がか？」

「どうぞでしょう。むしろ逃げて追いかけてきて無自覚にその生ま

れ持った才を見せびらかさせられる弟君のほうがお辛いのでは？」

片足を引きずりながらもどんと先を歩いて行く鴻羽を見る柚凜の横顔と呂淳の劣等感と嫉妬の念の混じった横顔が重なって稜明は口を引き結んだ。

きつと、自分に柚凜にしてやれることはない。彼女が望むものは玉座を得てもなお、難しいことだろう。

「稜明殿下も弟君の所へ？」

そう問いかけながら顔を動かした柚凜と突然視線がぶつかって稜明は返答にまごついた。

「い、いや。今日は遠慮しておくよ。君も一緒に呂淳と軍盤をするのか？」

「わたくしは叔母様にお相手してもらいに来ましたの。もう嫁ぐまであと二年になりましたし、本来ならこうして後宮に入るのも禁じられている身になってしまったのですが今日は鴻羽の付き添いで特別に父に許可をいただいたのです」

柚凜の微妙な言い回しと彼女がここ数週間後宮に来ていないことを思いだし稜明は一瞬言葉を忘れた。

嫁す前の娘が急に後宮に入れなくなったということはその体が子を産める状態になっているということだ。要は初潮を迎えた、のである。

「……そうなのか。ではなおさら邪魔をしてはいけないな。それに早く行かないと鴻羽に置いて行かれるぞ」

柚凜が煩わしげに嘆息して一礼し、早足で鴻羽を追いかけ始めて稜明は細く長いため息をこぼす。

そして少し熱い気がする頬を手で撫でながら踵を返す。

しかしそのあとに胸が軋むような感覚に足を止め、振り返った。

これが彼女との今生の別れとなるのだろうか。

ぼんやりと稜明はその後ろ姿が回廊の角を曲がり見えなくなるまですつと見つめていた。

ひとりきりになるとやけに息苦しく、足下から震えがくるほどの

感情の渦が胸をかき回していった。

稜明は無性に人恋しくなり、孤独から逃げるように戻った自室ではやつれた母がうたたねをしていてようやく気分はくつろいだ。

だがそのとき呂淳へ鴻羽が樹から落ちたことの真相を尋ねる気も、その心を救う気も失せていた。

これから死に行く自分に出れることなど何も出来やしないと思っ
た。

そして感情が落ち込むと一緒に体調を崩してまた寝付くことにな
ってしまった。

「兄上……」

寝付いてから十日ほど経ってようやく復調し始めた頃、呂淳が訪
ねてきた。

事前に女官が呂淳が来ていることを告げ、母が通さぬようにごね
たがどうにか頼み込んでふたりだけにして貰った。

「どうした？」

呂淳はうつむいて小さく、雛が巣立ったみたいですよと言った。

「そうか。巣立ってしまったか……。やっぱり毎日一日中張り付い
てないと難しいな」

「あの、でも。一羽だけ飛べなくて樹の下に落ちていたのでこれか
ら埋めようと思うのです。兄上のお体が大丈夫なら一緒に……」

「いいよ、と柔らかく微笑んで稜明は寝台から降りる。体調はもう
ずいぶんよかった。ただ外に出る気がしなかっただけだ。」

心配する母を宥め、それに怯える呂淳を庇いながらなんとか外に
出る。

快晴だった。

日差しはほどよくぬくもりを与えてくれて空気は澄んでいる。命
に満ちた空気で体を満たしながら稜明は呂淳と並んで巣のあった樹
の側に立つ。

その根元には小さな鳥が半端に羽を広げて死んでいた。

稜明と呂淳は無言で根元に手で土を掘って手首が隠れるぐらいの

深さの穴をつくる。稜明はその中に死骸をそつと置く。

そしてふたりで土を被せていく。

「……兄上、私は鴻羽が、嫌いです。だから、だから」

あの樹に登らせたのです。

嗚咽混じりの声で呂淳がそう告げた。

「でも怪我がたいしたことなくてよかったと思っっているだろう」

呂淳の泣く声が大きくなる。分からない、とかすれた声で言う。

安心もしているけれどがっかりもしているのだと。

「……そうか」

淡々とうなずきながら稜明は土の中に埋まっている小鳥の死骸の残像を追い続ける。

最後までもがいて羽を広げ空へとあがるうとしたのだろうか。

視界が歪んで頬に涙がつたう感覚がした。

嗚咽がふたつになる。

ふたりは言葉を交わすことなく小さな命を埋葬した。

月日は流れ、さらに四年が経つ。

あれからずつと稜明はもがくことをしてみた。いつか、飛び立てるかもしれないと。

呂淳にすら体の不調を告げることをやめてさも健康そうに振る舞い、周囲にも同じようにして見せた。

顔をみせる機会は少ないというのに、皆不思議と自分の事を小さい頃は体が弱かったが今はずいぶん逞しくなったと言うようになった。

もはや月の半分以上を寝台で過ごしているということを知りきっている自分自身でさえ死が遠ざかっている気がしていた。

ついには縁談まで持ち上がった。

しかし、病は残酷に希望を打ち消す。

十八になつてすぐに寝台から起き上がることは出来なくなつた。母は毎日付き添い、呂淳の母を怨嗟する声をはき続ける。

確実に忍び寄ってくる死の傍らで袖凜のことを思い出す機会が増えた。二年前に嫁ぐとき、一度だけ後宮にやってきたのを見かけた。十五になつた彼女はとても美しかった。華やかさと慎ましさを併せ持つて佇む姿は呼吸を忘れるほどだった。

遠目に見ただけで声をかけられなかつたことが今になつてどうしようもなく後悔している。

本当は君のことが好きだつたんだ、と冗談めかして言つて、彼女を驚かせて。そうしてどうか幸せにと笑つて送り出したかつた。

いくら悔やんでも時は戻らない。

そして未来さえも幾ばくもないだろう。

春と夏の隙間のほどよく暖かい頃、稜明は瞳を閉じて両親の呼びかけを聞く。

瞼は持ち上げられなかつた。

鳥の羽ばたく音がする。

飛び立てるのだろうか――瞬思うが違つた。両親の声も羽音も遠ざかつていく。

置いて行かれるのだ。

羽ばたけず、ただ空を見上げて先へ行く兄弟を見送る。

呂淳はちゃんと飛べるのだろうか。迷わず、飛んでやがて自分の巣を築くことが出来るだろうか。

自分には見送ることしか出来ない。

もう、なにも見えない。羽音すら聞こえなくなつていた。

鄙びた村の隅にある榆の木の側で十ほどの子供がひとり、佇んでいた。どこか枯れた色合いの周囲のなかでその子供の美しさは異彩を放っている。

少年とも少女ともつかないその子供はいましたがた巢立った鶉を見送っていた。

子供は嫌だな、と思った。

ここから出て行かなければならない。生きるならばこの暖かい巢から出て見知らぬ場所へと行かねばならないのだ。

「^{えん}暖！」

暖、とよばれた子供は振り返り、狼狽した母親とおぼしき女性にかけよる。

「ごめんなさい。すぐにもどるつもりだったんだけど」

「いいのよ。でもひとりではけして出て行かないで。もうは村を出る準備をしなければならぬわ。急ぎましよう」

暖は返事をして母親の手を握る。

ここでの暮らしが変わってしまうなんて嫌だけれど、行きたくはない、とは言えなかった。

それでも母に手を繋いでもらえるのならどうにか前に進めるだろう。

暖は母の手を握る力を強め、澄んだ青空を仰いだ。

雛たちは巢立っていく。

置き去りにされた兄弟の願いなど知ることもなく嵐の中へと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3608w/>

花ひらけば風雨多し

2012年1月14日02時51分発行